

平成15年度

研究 紀要

Vol.33

◎ 研究チーム等の研究

- 1 学校評価研究チーム
- 2 カリキュラム研究チーム
- 3 情報活用研究チーム
- 4 教育調査チーム
- 5 情報教育チーム
- 6 教育相談チーム

◎ 指導主事の個人研究

- 1 小学校総合的な学習の時間
- 2 小学校算数科
- 3 中学校保健体育科

◎ 長期研究員の研究

- 1 高等学校芸術科(美術)
- 2 中学校美術科
- 3 中学校英語科
- 4 中学校理科
- 5 小学校算数科
- 6 小学校総合的な学習の時間
- 7 小学校図画工作科
- 8 中学校学級活動

福島県教育センター

ま え が き

社会の転換期にあつて、社会の存立の基盤である教育に対する期待は、今ますます大きくなつています。しかしながら、その一方で、子どもたちは将来への夢や明確な目標を持つことができずに、学ぶ意欲が低下しているなどの深刻な教育問題が発生しています。今日的な教育課題の解決を図るためには、それぞれの学校が、機動的にそれらの課題に対応することが必要です。一人一人の児童・生徒が抱える多種多様な教育の問題に対応し、保護者や地域住民の期待に応えるためには、目の前の児童・生徒たちに対してどのような教育活動が必要なのかを、それぞれの学校が見定める必要があるのです。時代の流れは、各学校の創意工夫を生かすという方向へ向かっています。「今まではこうだった」という発想ではなく、子どもたちやそれを取り巻く環境を見定め、さらに、自分たちで実証的に情報収集し、柔軟な発想で学校経営や学習指導に取り組んでいくことが求められます。

教育センターの大きな責務は、このような各学校の主体的かつ積極的な教育活動を支援することにあります。すなわち、教育センターは、教育に関する今日的な課題をいち早く把握し、その解決に向けた基礎的な研究をスピーディーに行い、その成果を学校や関係教育機関に速やかに提供することが必要であると考えています。そこで、本年度は3つの研究チームを組織し、各学校と連携しながら、学校に視点を置いた基礎的、実践的な研究に取り組んできました。

- 1 学校評価研究チーム 「学校評価システムの構築と学校改善」
- 2 カリキュラム研究チーム 「思考過程を重視したきめ細かな学習指導を充実させるための工夫」
- 3 情報活用研究チーム 「教育用コンテンツを活用した授業実践モデルの開発と研究」

さらに、研究チーム以外の次の3つのチームにおいても、研究に取り組んできました。

- 1 教育調査チーム 「『ふくしまの学習意識』に関する調査研究」
- 2 情報教育チーム 「情報機器やネットワークを活用した新たな学習形態に関する基礎研究 ―eラーニングの利用に関して―」
- 3 教育相談チーム 「生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究―学級（ホームルーム）活動を中心に―」

これらの研究成果は、今後できるだけ教育センターの研修講座に反映させていきます。さらに、各学校のニーズや今日的な教育課題に対応できるよう研究を進め、開かれた教育センターと各学校との関わりをより密接なものにしていきたいと考えています。

教育センターでは、指導主事、長期研究員の個人研究も推進しています。理論研究にとどまることなく、学習指導や教育相談について、各学校における日々の教育活動に直接役立つ実践研究を行ってきました。

この「研究紀要第33集」は、こうしたチーム及び個人の研究の成果をまとめたものです。紙幅の限りもあり、十分に意を尽くせない面もありますが、各学校がそれぞれの教育課題の解決や教育実践の充実を図る上で役立てていただければ幸いです。

おわりに、教育センターの研究にご協力を賜りました研究協力校や研究協力員の皆様、並びに、関係機関の方々に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成16年3月

福島県教育センター所長 星 本文

《 総 目 次 》

◎研究チーム等の研究

- 1 学校評価研究チーム(研究紀第146号 分類基準E01-05)
学校評価システムの構築と学校改善 1
- 2 カリキュラム研究チーム(研究紀第147号 分類基準F02-01)
思考過程を重視したきめ細かな学習指導を充実させるための工夫 15
- 3 情報活用研究チーム(研究紀第148号 分類基準Z01-02)
教育用コンテンツを活用した授業実践モデルの開発と研究 29
- 4 教育調査チーム(研究紀第149号 分類基準J01-01)
「ふくしまの学習意識」に関する調査研究 43
- 5 情報教育チーム(研究紀第150号 分類基準Z01-02)
情報機器やネットワークを活用した新たな学習形態に関する基礎研究
ーeラーニングの利用に関してー 55
- 6 教育相談チーム(研究紀第151号 分類基準F09-01)
生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究
ー学級(ホームルーム)活動を中心にー 61

◎指導主事の個人研究

- 1 小学校総合的な学習の時間(研究紀第152号 分類基準F01-05)
小学校英語活動の在り方についての調査研究 76
- 2 小学校算数科(研究紀第153号 分類基準G03-02)
子どもたちの「確かな学力」の向上を目指し、「個に応じたきめ細かな学習指導」
を実施するための基礎研究(小学校算数) 80
- 3 中学校保健体育科(研究紀第154号 分類基準G06-03)
簡単なディベートを組み込んだ中学校保健の授業
ー討論で喫煙問題の見方・考え方を深めるー 84

◎長期研究員の研究

- 1 高等学校芸術科（美術）（研究紀第155号 分類基準G05-09）
形の構想を明確にするための学習指導の工夫 …………… 90
- 2 中学校美術科（研究紀第156号 分類基準G05-08）
互いの感性を生かし、協調し合える共同で行う創造活動の在り方 …………… 92
- 3 中学校英語科（研究紀第157号 分類基準G09-02）
音声英語のオンライン処理能力向上を目指した音読指導 …………… 94
- 4 中学校理科（研究紀第158号 分類基準G04-03）
電流領域の基本概念の理解を深める学習計画の在り方
－電流モデルの確立と規則性（法則）の検証・一般化を通して－ …………… 96
- 5 小学校算数科（研究紀第159号 分類基準G03-02）
小学校算数科において、児童が意味理解を図り、学習内容を自分の知識として
獲得する授業の在り方 …………… 98
- 6 小学校総合的な学習の時間（研究紀第160号 分類基準G01-05）
総合的な学習の時間における効果的な指導の在り方
－評価観点と育成したい力をもとにした評価計画と支援計画の在り方－ …………… 100
- 7 小学校図画工作科（研究紀第161号 分類基準G05-07）
子どもたちが意欲的に取り組むことのできる図画工作科の授業はどうあればよいか
－図画工作科における効果的な情報機器の活用－ …………… 102
- 8 中学校学級活動（研究紀第162号 分類基準F11-03）
教育相談的手法を用い自己理解の深化と社会性の向上を目指す、学級活動を通
通しての支援の在り方 …………… 104

学校評価チーム

学校評価システムの構築と学校改善

学校評価システムの構築と学校改善

《目次》

I 研究の趣旨	1
II 研究の概要	1
1 学校評価の意義とシステム	1
2 学校評価システム	3
3 学校評価委員会の組織化	4
4 『学校経営・運営ビジョン』の作成と公表	6
5 教育の実践	8
6 評価	9
7 『実践・改善報告』の作成と公表	11
III 研究のまとめ	12
※ 『学校評価システム図』	13
※ 『学校経営・運営ビジョン』の高等学校の例	14
※ 『実践・改善報告』の小学校の例	14

学校評価システムの構築と学校改善

学校評価研究チーム

本研究の詳細については、福島県教育センターWebに次の内容を掲載しているをご覧ください。

- 学校評価の試案「計画・実践・評価・改善の営みの確立を目指して」
- 同ダイジェスト版
- 『学校経営・運営ビジョン』（案）
- 『実践・改善報告』（案）

I 研究の趣旨

これまでも学校改善を求めて学校の自己点検・評価は行われてきた。子どもたちの健やかな成長を願って、各学校がそれぞれの方法で学校評価を行ってきたのである。先の学校評価に関する調査（県内全小・中・高等学校889校の校長対象に、2002年実施、平成14年度研究紀要で報告済）では、次のような本県の学校評価の現状が見られた。

学校を開く方法や内容の重要性を認めながらも、学校で行われる点検評価は外部への説明資料としての位置付けはなされておらず、点検評価に関する項目数や対象はまちまちである。

平成14年3月の学校設置基準の制定・改正で示された学校評価に関わる主な内容は、「自己評価と情報提供」であり、近年の教育改革の流れの中で取りあげられる学校評価は、次の2点で従来の学校評価とは内容を異にするものと考える。

- 一般に評価とは、改善のために行われるものであり、評価の前提となるものは計画・実践でなければならない。したがって学校評価も評価のみを単体で論じるのではなく、計画（Plan）・実践（Do）・評価（Check）・改善（Action）という一連のマネジメントサイクルの流れの中で論じることが重要になってくる。「学校評価を行う」とは、すなわち、マネジメントサイクルによる学校経営・運営の改善そのものということになる。
- 次に、学校の説明責任との関連である。PDC

Aのサイクルの中に情報の発信・受信を計画的に位置付けることで、相互の納得と協力関係を深め、それを基盤として家庭・地域に信頼される学校づくりに努めることが重要である。

このような考えのもと各学校が学校評価を組織的・計画的に実践するための学校評価システムの構築が急務であることから、次の2点を重点的な目標として標記のテーマのもと研究を推進した。

- 学校評価システムを構築し提言する。
- 各学校における学校評価システム構築のための参考資料を作成し提言する。

II 研究の概要

1 学校評価の意義とシステム

(1) 家庭・地域から信頼される学校づくり

今日、学校教育をめぐる状況が著しく変化している中であって、教育に対する地域住民のニーズに的確に対応しながら、家庭・地域に信頼される学校づくりを推進し、不断の学校改善を進め、教育の水準の向上を図ることが大切である。このような状況下であって、それぞれの学校には、その学校の特色を生かし、児童生徒、保護者、地域住民から求められる学校としての役割を果たし、家庭・地域に信頼される学校づくりのために、次の3つが重要となってくる。

① 自主性・自律性の確立された学校

学校経営・運営にあたっては、学校の創意・工夫が今まで以上に求められており、そのために校長のリーダーシップと説明責任を果たしていくことが強く求められている。

「学校の自主性・自律性が確立する」ということは、個々の学校が、独自に教育目標を設定し、それを効果的に実現するための方策・方法を自ら選択して実施し、その実施状況を自ら把握・診断し、教育活動を継続的に改善していくことのできる状態である。

② 責任体制の確立された学校

教育の地方分権を推進し校長の権限を中心に個々

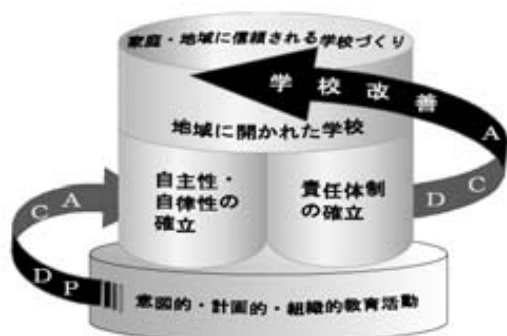
の学校の自主性・自律性を高めることは、同時に学校の経営責任が明確に問われることでもある。

学校の経営責任は、単に「結果を説明する」ことで果たされるものではない。教育活動の経過や結果を積極的に公表・説明し、保護者、地域住民から納得と信頼を引き出すまでも含めて捉えることが重要である。

③ 地域に開かれた学校

学校を開くのは、学校及び家庭・地域が一体となって子どもの教育に取り組む環境をつくるためである。家庭・地域との相互理解に基づき家庭・地域の思いや願いを学校運営に反映することにより、地域社会の人々に「我々の学校」の意識を育てることになる。

また、地域の人材、施設、自然、文化や伝統等地域の教育力を取り入れ地域の特色を生かした学校運営が特色ある学校づくりにもつながる。学習の内容、方法、場が拡大される総合的な学習の時間はそのよい例である。



(2) 学校改善と学校評価の役割

「学校評価」とは、「学校が学校としての機能をどれだけ果たしているかを総合的・客観的に評価する」ことである。学校評価が学校経営に位置付けられ、実践を継続・累積することは、子どもの現状に変化をもたらすものであるとともに、教職員の意識の改革、資質の向上に資する等教職員の現状にも変化をもたらすことになる。

① 学校評価の目的

評価の結果に基づき、教育活動について改善を図り、教育の水準の向上を図るために学校評価を行う。したがって、学校評価自体が目的ではなく、あくまでも学校の教育目標の実現に向け、教育活動がどこまで有効に行われたかを見直し、教育の水準の向上

を図るための手段である。

② マネジメントサイクルと学校評価

評価の前提となるものは計画・実践で、評価のねらいは改善のためである。ここに、学校経営におけるマネジメントサイクルの必要性がある。教育目標具現のために計画を立て(P l a n)、実行し(D o)、その過程や結果を目標や計画に沿って評価し(C h e c k)、さらにその結果をもとに改善する(A c t i o n)という一連のサイクル(マネジメントサイクル)の中で、教職員が主体となり、必要に応じて児童生徒や家庭と地域みんなの目で学校評価を行うことになる。

③ 双方向コミュニケーションと学校評価

情報は、発信者の意図が正確に伝わるのが大切である。学校教育の場合は、客観的な数値で説明できないことが多いので、一度や二度の「説明」で合意が得られるとは限らないことから、学校が児童生徒、保護者、地域住民等との間で双方向コミュニケーションを継続しつつ納得と信頼を得る努力を続けることが重要になってくる。

④ 学校の目指す変容と学校評価

学校評価の実践は次のような学校の変容を目指すものでありたい。

【学校の発展的継続性】

年度が替わり、教職員が変わっても、前年度までの成功体験を一層生かすことができる。

【共有される問題意識や達成感】

実践を通じて、教職員、児童生徒、保護者、地域住民等の問題意識や達成感が共有される。

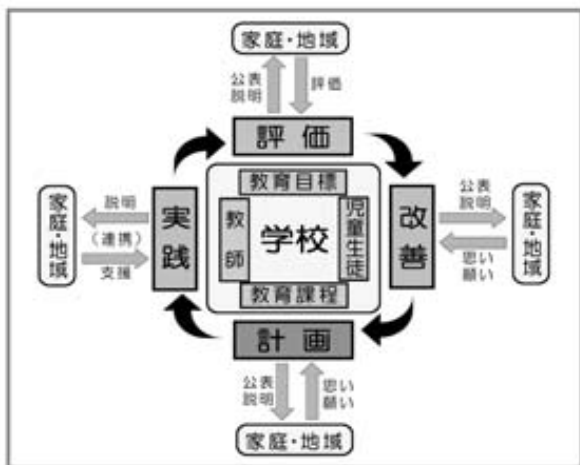
【プロセスへの参加意識】

計画の公表から評価に至るプロセスにおいて、絶えざる双方向コミュニケーションの場を増やすことで、教職員、児童生徒、保護者、地域住民等の一体感と参加意識が醸し出される。

⑤ 教育活動の質を変える学校評価

「学校評価を行う」ことが、教職員の仕事を今まで以上に煩雑にしたりするならば、肝心の児童生徒との対話や授業の教材の準備の時間を圧迫してしまう。大切なことは、新たに何かを付け加えるという発想ではなく、質を変えるという発想である。例え

ば学校評価を行う組織についても、既にある校内組織に、新たに付け加えるという発想ではなく、整理したり、統合したりすることなどにより、既にある組織の質を変えることが重要となってくる。

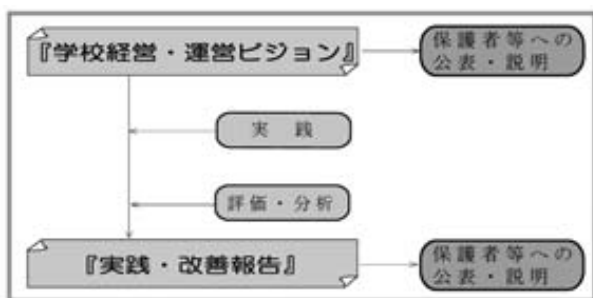


2 学校評価システム

各学校で、教育目標具現のための一連の学校経営・運営の中に学校評価を効果的に位置付けるには、年間を通じて日々の教育活動と一体化を図るように努めなければならない。日々の教育活動や運営状況のすべてが調査の対象になることから、学校の一部の人だけが関わるのではなく全校的・組織的に行うことが大切となってくる。

そのためには、PDCAのマネジメントサイクルの考え方に沿った取り組みを推進することが効果的で、このような「各学校が組織的に行う学校評価の枠組み」を「学校評価システム」と呼ぶ。

(学校評価システム図は13頁参照)



(1) Plan (計画) <『学校経営・運営ビジョン』の作成と公表>

綿密な計画なくしてはよい実践には結びつかない。そのために『学校経営・運営ビジョン』(6頁及び14頁参照)というものを作成し公表していく必要が

ある。『学校経営・運営ビジョン』の作成と公表は、学校評価システムの根幹ともいえる部分である。単に教育目標や重点目標をスローガンのように述べるのではなく、各学校において教育目標を受けての重点的な目標、それをいつどのような手だてで実践していくのかといった具体的内容を分かりやすく説明し、さらには、取り組み内容と対をなす学校評価の内容も盛り込むことになる。1つの紙面でその年度の学校の取り組みとする重点がわかるようにすることが必要になる。

この『学校経営・運営ビジョン』を作成公表することは、年間の教育実践を統一的に推進するための指針となると共に、学校評価実践における情報公開の柱となる。作成にあたっては、校長のリーダーシップのもと学校内部の独善に陥ることのないよう児童生徒、保護者、地域の声を聞き反映することが重要となってくる。

(2) Do (実践) <『PDCA票』の活用>

『学校経営・運営ビジョン』で明らかにされた重点的な取り組みについては、日々の具体的な教育活動を通して計画・実践・評価されてこそ、真の学校運営改善につながっていく。そのために、日ごろの取り組みについて情報の発信・受信を意図的・計画的に行っていくことが必要であり、そのための枠組みとして『PDCA票』(8頁参照)の趣旨を取り入れて日々の教育実践を進めていくことが重要となる。これを活用することにより、日ごろの教育活動の一つ一つが教育目標達成や重点課題解決への取り組みを明確にしたものになり、教職員の意識の改革、資質の向上に結びつくと共に、学校と家庭・地域の双方向コミュニケーションのために有効に働いていくものとする。なお、実践にあたっては、最後に一度だけの評価をするのではなく、実践の過程での中間評価として「評価・調査票」(10頁参照)を活用するなどして多くの意見を集約し、より客観的な評価を行っていくことが大切となる。

(3) Check (評価) <『PDCA票』『評価・調査票』の活用>

日ごろの取り組みについて学校が自ら点検・評価を行うことになるが、教職員の自己評価を主体とし

つつ、総合的・客観的なものとするために積極的に児童生徒や保護者、地域住民の意見を取り入れるようにする。そして、一人一人の児童生徒の成長を願って学校・地域・家庭が一体となり、「協働」の場をつくるための学校評価であることをみんなが理解し合うことが重要となる。実施にあたっては、年間の見通しのもとに、だれが、いつ、どのような方法で、どのような項目で評価をし、その情報をどのように受信・発信するか、を自校化していく。

(4) Action (改善) <『実践・改善報告』の作成と公表>

Plan (計画) の『学校経営・運営ビジョン』と対をなすものとして、『実践・改善報告』(11頁及び14頁参照) というものを位置付ける。これは、1年間を振り返り、『学校経営・運営ビジョン』で示した内容に対しての「計画の達成状況」、さらには、次年度に向けての改善案等、ポイントを絞って記述し、公表するものである。年度途中のプロセスごとの評価結果を総括し、「今年度の成果や残された問題・課題は何か、さらに改善の見通しはどうか」を『実践・改善報告』にまとめて公表することは、先に示した『学校経営・運営ビジョン』に対しての結果責任をも果たすということで大変重要なこととなる。

学校評価は、日々の教育活動の質を変える取り組みそのものであるから、そのプロセスに決まった形がある訳ではない。10の学校があれば10のやり方があるはずで、うまくいっている学校の例をそのまま自分の学校に当てはめても十分な効果は期待できない。以下で、これまで述べてきた「学校評価システム」を機能させるための校内組織作り(「学校評価委員会」(後述))やそれぞれの段階について詳しく解説をするが、実践を積み重ね各学校の実態に合った学校評価システムが構築される上での参考として頂きたい。

3 学校評価委員会の組織化

学校全体で学校評価に取り組むことが重要であり、校長は学校評価委員会を編成する。

学校評価委員会は、各学校が、学校評価を進める上での牽引役であり調整役でもある。したがって、

学校経営・運営の中心である、校長、教頭、教務主任、そして、具体的計画に携わる立場の教職員の参加は必要であり、取り組む内容によっては、保護者、地域住民等からの意見聴取や委員会への参加等も考えられる。

(1) 学校評価委員会の位置付け

① 学校の特性を生かす学校評価委員会

学校評価委員会の機能を充実させるためには、校内の組織としてどう位置付ければよいか。

一般的には、校内組織は、学校の特性を考慮して設置されるべきであり、考慮すべき事は以下のような項目となる。

- 校種
- 学校規模
- 教職員や児童生徒の実態
- 地域特性
- 保護者や地域の実態

また、既存の校内組織との関係では、以下の可能性が考えられる。

- ◎ 既存の組織を生かす(委員会を増やさない)
- ◎ 学校評価委員会を新たに設置し、既存の組織との整合性を図る
- ◎ 学校評価委員会を新たに設置し、併せて既存の組織を整理統合する

② 学校評価委員会の組織化

現在、各学校に設けられている各種委員会等は、「校務運営委員会」を除いて、例えば「就学指導委員会」「学校保健委員会」「現職教育研究推進委員会」「生徒指導委員会」「内規検討委員会」等、ある特化した目的のために設けられており、それぞれ、学校の教育活動の一部を担っている場合がほとんどである。

これに対して、「学校評価」は、およそ学校の教育活動全体に関わる機能を持っている。学校評価委員会に想定される役割と機能から考えれば、学校評価委員会は、校長・教頭の学校経営・運営方針・計画をもとに、各種委員会・各部・各学年・各教科等の実践を統括する役割がある。各種委員会・各部・各学年・各教科が縦の組織であるならば、学校評価委員会は組織横断的でなければならない。このような観点に立ち、各学校の組織を複雑にしない方向を

目指すならば、学校評価委員会は、ほとんどの学校に組織されている「校務運営委員会」や「企画委員会」等と兼ねることができる。

(2) 学校評価委員会の役割と機能

① 『学校経営・運営ビジョン』の作成と公表

『学校経営・運営ビジョン』作成に当たっては、校長の経営・運営等に関する基本計画を踏まえて、各部・各学年・各教科・各チーム等の「重点項目実践計画」を作り上げることが柱となる。「重点項目」の実施主体は、各部・各学年・各教科・各チーム等であるが、学校評価委員会がリーダーシップをとって全体の調整を図ることが重要となる。特に、「重点項目は各担当者が現状を踏まえた創意溢れる内容かどうか」「設定した目標は具体的であるか、実現可能かどうか」「評価可能かどうか」等、十分に吟味しなければならない。

また、公表に当たっては、保護者等に主体的に参加してもらうためにも、『ビジョン』に基づき計画的・継続的に公表・説明することが必要となる。

② 重点項目の実践状況の把握と連絡調整

各重点項目の実践、中間評価実施、年度途中での改善、重点項目の評価等は、各担当者の責任において行われるが、校長や教頭の指導のもと評価方法や改善計画等について学校全体の調整にあたる。

③ 評価計画の立案と実施・分析

教育目標、重点項目に沿った評価項目の作成、実施、分析とそのための組織化を行う。『学校経営・運営ビジョン』の作成時に示した大まかな評価計画を、各担当者等との協議の上、詳細にわたって計画を策定していく。さらに、この計画に沿って評価を実施し、その結果を分析し、校長による総合的な評価実施のための資料を作成する。

また、評価や調査は関わったすべての人に迅速に結果を公表することが原則であり、その際、評価結果への対応(改善の見通し等)にもふれることが重要となる。

④ 「実践・改善報告」の作成と公表

重点項目を中心とする1年間の教育実践と評価結果を総括し、校長の総合的な評価を付して「実践・改善報告」にまとめ、結果を公表する。

⑤ 次年度計画作成準備

意図的な教育実践を積み上げ、評価を適正に行うと、次年度の実践項目が見えてくる。今年取り組みを生かして、次年度の計画を立てることが重要で、新年度は、新しい組織で計画が決定されることになるが、年度末の内に道筋を付けておくことが大切である。

⑥ 年度途中での柔軟な軌道修正機能

年度途中で、各担当者の実践の結果や、児童生徒・保護者等との情報発信・受信を密に行うことで、様々な問題が浮かび上がる場合が多い。年度当初の『学校経営・運営ビジョン』にないことでも、重要課題が浮かび上がれば、その解決に向けて、取り組みを強化することは当然のこととなる。『実践・改善報告』は『学校経営・運営ビジョン』に基づいて記述されるが、年度途中で起こった事柄を追加することもあり得る。

⑦ 柔軟な情報受信機能

「学校で今起きていること、保護者・地域住民が求めていること、児童生徒が困っていること等は何か」は、絶えず変化する。また、『評価・調査票』による情報収集のみでは十分と言えず、各種会合等での話題、学校評議員の意見等は勿論のこと、児童生徒・保護者・地域住民からの各種情報をキャッチできるように学校全体がアンテナを高くしておくことが重要となる。

⑧スピーディな情報発信機能(プロセスの発信)

学校では、様々な場面で、保護者からの意見や要望が学校に届く。それらをどう取り上げるかは大変重要であり、場合によっては、すぐに保護者に説明したり、改善計画を示したりすることが、相互理解を図る上では大切である。意見を取り入れ、校内で改善しても、年度末に結果を報告するだけでは、理解は得られないことが多い。「アンケートの結果、こういう意見があり、もっともであるのでこれからこういう取り組みを始めます。」というアナウンスがあって初めて、保護者が、学校の取り組みの過程に注目し、理解を示すとともに、それは新たな支援や連携の機会にもなると思われる。

4 『学校経営・運営ビジョン』の作成と公表

学校設置基準でいう「積極的な情報提供」の中心となるのが『学校経営・運営ビジョン』であり、このビジョンをもとに、教育目標具現のために学校全体が一丸となって統一的な教育活動の実践にあたっていく。

(1) 『学校経営・運営ビジョン』

『学校経営・運営ビジョン』に、どのような項目をどのような形で載せるかを考えることは、特色ある学校づくりのスタートにもなる。各学校が、創意溢れる計画を作り上げることが大切であるが、次のような内容は、共通して掲載されるものとする。学校の現状を分析し、前年度までの実践を踏まえて、今年度の経営ビジョンを明らかにすること、それを保護者、地域住民等に分かりやすく伝える事が大切になってくる。

学校経営・運営ビジョンに掲載する項目

必須項目

- 教育目標
- 目指す学校像
- 現状分析（前年度の実践を踏まえて校長が記述）
- 重点項目実践計画（担当者・教科、達成目標・期日等を記載）

推奨項目

- 学校評価に関わる組織(改革)・評価計画の概要
- 前年度評価のまとめ（現状分析の客観資料となるような）

「校長による現状分析」と「達成目標・期日等を明示した重点項目実践計画」は、学校の年度ごとの進化を実現するために大切な項目である。

また、ここでは評価計画の概要について策定し、具体的な評価項目等詳細の計画策定は実践をしながらの作業となる。

(2) 現状分析と経営・運営方針の表明

校長は、自校の経営・運営方針に関する明確なビジョンを教職員並びに学校評価委員会に説明する。

学校が今求められていることは、継続性を大切にしつつ、いかに発展を図るかという点であり、学校経営において、PDCAの螺旋を実現することである。教職員と学校施設設備、児童生徒、保護者、地

域の状況等を把握し、その長所を大切にしつつ、今年度教職員が重点的に行う必要がある内容を宣言することが必要となってくる。

最も大切なことは、教育目標と目指す姿の関連からの現状の分析である。確かな分析によって目指す姿と現状との落差を埋めるための重点的な取り組みが「重点項目」として設定されることになる。この現状分析にあつては、自己の、または前任者の前年度の学校経営・運営への深い洞察なしには、改善の道筋は見えてこない。その内容は、教職員がその必要性を認め、それぞれの分掌や授業で、基本方針に沿った教育活動を展開しようという意欲を喚起する内容でなければならない。

洞察の視点は、次の3点となってくる。

- 児童生徒は学校の教育活動に興味を持ち、積極的かつ主体的に参加し、満足できる成長を遂げているか。
- 保護者は学校の教育活動に興味を持ち、児童生徒の成長に満足しているか。
- 学校は、地域コミュニティの一員として機能しているか。

重点項目の内容には、次のようなことが考えられる。

- 学校の長所や特色を一層伸ばす取り組み
- 問題・課題解決のための取り組み

この二つについては、校内でのコミュニケーションを十分に図り、長所や特色、問題・課題を全職員が共有することが必要である。その際、調査の機能を持つ『評価・調査票』の活用が有効になってくる。

(3) 目標設定の重要性

重点項目の実践計画作成に当たっては、より多くの教職員の参加によって目標を設定することが望ましい。校長が示した重点項目について、各分掌においてより具体的な目標を設定する。この目標の連鎖が、教職員の活動のエネルギーにも、さらには協働体制の素地づくりにもなると期待される。

また目標は、努力することによって達成が可能なものにする。成功体験の積み重ねが新たな活動意欲を引き出すからである。

さらには、目標設定は、人を動機づけるまたとな

い機会でもある。教職員の意欲を高める目標設定の条件は、【目標設定への参加・目標の具体性・目標の適度の困難性】の3つである。

目標を設定したら、学校内の誰もが、活動の目標を理解し、進捗状況が管理でき、活動の出来栄をチェックできるよう学校がどのような活動をどのレベルまで実施していくのかを明らかにする。

目標設定のプロセスは次の6つのステップが考えられる。

目標設定の6ステップ	校長	評価委員会	分掌
現状分析、目指す姿、重点項目などの経営・運営の基本構想を策定し、職員会議、学校評価委員会等に公表する。	○		
学校評価委員会において目指す姿や重点項目について、校長の基本構想をより具体化する。		○	
各分掌の主任を中心に年度の具体的な部門別計画を作成すると共に、何を評価の項目とするか検討する。『学校経営・運営ビジョン』の作成			○
各分掌が作成した部門別計画を検討する。また各分掌のどの項目を学校全体の評価項目にするか検討する。		○	
各分掌の計画を調整し、双方の合意の基に、評価項目に加筆・修正する。		○	
職員会議、保護者会等を通じ、各分掌の活動計画や評価項目の情報を発信し、学校全体で共有化を図る。『学校経営・運営ビジョン』の公表説明	○		

(4) 『学校経営・運営ビジョン』の意義と用途

『学校経営・運営ビジョン』の意義は次の2点である。

- 年間教育計画の確認であり、統一的に教育実践をするための柱となる。
- 学校評価実践における情報公開の柱となる。

『学校経営・運営ビジョン』は、上記の意義を実現する資料として、年間を通じて、各分掌においても、各種会合においても活用されることが望まれる。これまでともすれば、場面や分掌において、統一を欠くこともあった「説明資料」が、『学校経営・運営ビジョン』をもとに、統一的に具体的に説明されるからである。

『学校経営・運営ビジョン』の用途のうち、情報公開に関しては、例えば、次のような活用法が考えられる。

- 前年度の総合的な評価結果と併せて学校要覧掲載やWebへの掲載を通し、学校としての説明責任を果たす。
- PTA総会、学校評議員等への学校説明資料と

して共通に使用する。

- 地域社会への学校説明資料として使用する。
- 来訪者への資料として、学校の教育活動を説明する。
- 学校内に常時掲示し、年間計画に基づく意図的・計画的活動であることを教職員が意識するとともに日々の教育活動実践の指針とする。

(5) 『学校経営・運営ビジョン』作成のポイント

『学校経営・運営ビジョン』は、基本的には、教職員は勿論、児童生徒や保護者、地域住民等に読んでもらうものとなる。学校の現状と目指す方向、今年度の取り組みが、具体的でコンパクトにまとまっている必要があり、載せる項目や全体のレイアウトを考えるに当たって、次のようなことに配慮すべきである。

- PDCAサイクルの実践の1つであるという意識化を図る。
- 児童生徒、保護者、地域住民等が知りたいこと、読みたいことは何か、に配慮する。
- 児童生徒、保護者、地域住民等が、主体的に学校に関わりたいと思う気持ちを喚起する内容を含むようにする。
- 評価基準と評価計画の概要が見えるようにする。
- 児童生徒、保護者が見やすいように、図やグラフを効果的に使用する。

(6) 『学校経営・運営ビジョン』の公表

教育活動その他の学校運営の状況について、保護者、地域住民、学校評議員等に対して積極的に情報を提供することが、学校が説明責任を果たし、地域に開かれた学校づくりを推進するためにも重要なことである。

公表するのは、『学校経営・運営ビジョン』であり、場、手段・方法としては次のようなものが考えられる。

- 【各種会合】・入学式 ・PTA総会や保護者会
 ・後援会や同窓会 ・学校評議員会
 ・小中、中高の連携の場
 ・健全育成会等
- 【各種通信】・学校便り ・学年 ・学級通信
 ・Web ・学校要覧 ・PTA会報

・市町村や県等の広報誌等

いずれの場合や方法にしても、伝達する対象(受信者)によっては内容をより簡略化するなどの工夫も考えられるが、公表するものは原則として『学校経営・運営ビジョン』そのものであることには変わりはない。それに耐えうる『ビジョン』を作成することが重要となってくる。

5 教育の実践

各学校では、一つ一つの教育活動が、教育目標や年度の重点と関連し、絶えざる改善を意識したものになっていたかどうかを吟味する必要がある。

ここでは、『学校経営・運営ビジョン』で明示した重点項目を実践したり、教科活動、学級経営等、各分掌やチーム、教師個々が教育活動を展開するに当たり、形式化を廃し、P D C Aサイクルの発想で実践をする方法を述べる。

(1) P D C Aサイクルの日常化と『P D C A票』

学校マネジメントの視点に立ち、教育活動や学校運営の改善・充実につなげるために、P D C Aサイクルを意識した教育実践をするための枠組み(フレーム)が、P D C A票である。『学校経営・運営ビジョン』のように全体に関わるものから、各教科、学級経営のような部門別に関わるものまで、いずれにおいてもこの趣旨が生かせるものである。

(2) P D C A票作成のねらい

本票は、次の3つのねらいのもとに作成した。

- 教育目標達成のための重点的な取り組みを具体的教育活動を通して計画・実践・評価する。
 - ・ 前年度の反省に基づいた本年度の重点事項
 - ・ 評価・調査票や日常の学校運営・教育活動の状況から解決を迫られる問題
 - ・ 評価・調査票や日常の学校運営・教育活動の状況から維持・発展させたい「よさ」
- 教育活動を展開する原動力とする。

目標達成への意欲となるよう校長のビジョンを受け、計画(P)の段階、特に「目指す姿(目標)」づくりの段階で各担当者が参加する。学校経営・運営への参画から生まれる意欲がP D C Aサイクルを回していく原動力になり、P D C Aサイクルの日常化が図られるとともに、教職員の意識の改

革、さらには資質の向上に結びついていく。しかも、このことは学級・学年経営、教科経営等教育活動のすべてにおいて重要なこととなってくる。

○ 双方向コミュニケーションを図る。

開かれた学校づくりの視点からも情報の発信・受信を意図的・計画的に行い、学校と家庭・地域双方向のコミュニケーションを図る必要がある。

(3) 『P D C A票』作成上の配慮と基本形

形式が重要ではなく、この趣旨を生かしたものの、自校で使いやすいものにすることが大切である。

課題	課題とともに、具体的な教育活動を記入する。	
現状	教師の日常の観察とともに、より多くの情報を収集し、客観的な事実に基づく現状認識に努める。特に現状の問題点とその原因の究明が重要となる。	
教育目標との関連	担当	担当者、部、委員会並びに担当責任者を記入する。
	目指す姿	取り組む活動の「目標」であるから、校長のビジョンを受けた担当者一人一人の目標であるとともに、達成可能な目標を設定することが重要である。また、可能な定量化できれば評価基準も設定しやすい。
計画(P)	具体的手立て	情報発信受信 児童生徒及び外部(地域・家庭)との情報発信・収集(説明・報告も含めて)について何を、どのような方法で、どこまでやるか具体的に計画する。
	実践の場	実践期間 活動がマンネリ化・形式化しないためにより具体的に想定することが実践に直結することになる。
評価基準	A(目指す姿) B C(現状) 次の評価基準参照 D	
実践(D)	実践	中間評価 評価基準に基づき中間評価を行う。中間評価であることからP段階の評価基準より具体的に設定する。
	改善	情報発信受信 さらに不足部分を補うため、また、実践への意欲の維持・発展のための連携であることを念頭に情報の収集・発信に努める。
		外部評価を得ることも連携の一つであるが、ここでは、評価結果をどう(内容・方

実践 (C)	部の評価をも取り入れることが必要である。その際の重要なことは、「評価してほしい内容」(次の改善に結びつけることと正しい評価を得るために)を明確にした評価とすることである。	情報発信受信	法・程度)発信するかるを明らかにする。同時に次の計画に向けた児童生徒や外部の思いや願いを収集する。
改善 (A)	評価結果や児童生徒及び外部の思い・願いを受けて、次の計画の大きな方向性を示す。	情報発信受信	次の計画を児童生徒や外部に理解いただくとともに、学校の思いや願いを伝える連携の場となる。

○ 「評価基準」

できるだけ客観的事実に基づくことと説明責任に耐えうるものにするのが重要である。可能な限り定量化による具体的な評価基準を設定し、4段階で評価する。

「問題・課題」の解決の場合	A	目指す姿(目標)を達成した状況
	B	十分でないが、目指す姿(目標)に近づいたことが見られる状況
	C	その問題の解決を必要とする現在の状況
	D	現在の状況より問題が大きくなった状況
「よさ」の維持・発展の場合	A	目指す姿(目標)を達成した状況
	B	十分ではないが、目指す姿(目標)に近づいたことが見られる状況
	C	「よさ」が見られる現在の状況
	D	現在の状況よりよさが小さくなった状況

6 評価

(1) 評価計画の策定

学校が自ら点検・評価を行う訳だから、教職員の自己評価があくまでも主体であり、より総合的・客観的なものとするために、積極的に児童生徒や保護者、地域住民等の意見を取り入れるべきである。評価計画を立てる際に、教職員や児童生徒・保護者・地域住民による評価を、学校評価全体の中にどう位置付け、いつ、どのような方法で、どのような項目について問うかを自校化する。

また、教職員評価を内部評価、児童生徒や保護者、地域住民、学校評議員等による評価を外部評価と捉え、この両者が有機的に結びつき、相乗的に学校改善に生かすためにも、学校評価計画に、「学校・家庭・地域間の情報の発信・受信計画」を盛り込み双方向コミュニケーションの確立に努めることも大切である。

① 重点的な計画と達成目標の設定

実践の部分は重点化し、重点化された項目については明確な目標を設定することが大切である。可能な限り数値目標を掲げ、その目標を学校関係者全員が共有することが大切である。数値目標設定の観点には、達成の程度だけではなく、「実践する回数や量、期日等」も考えられる。明確な「達成目標」があって、より客観的な評価を実施する事ができるのである。

② 評価基準の一例

評価の基準は、『PDCA票』で述べたように、「現在の状況」を「C」とし、目指す姿を「A」とする4段階評価を提案している。評価「C」には、マイナスのイメージがあるかと思うが、現状に甘んじない、教職員の創意工夫を具現化して絶えざる進化を目指し、児童生徒、保護者等の願いに応えるという考えからである。

③ 外部評価の意義

外部からの視点である外部評価は地域の期待に応え、地域から信頼される学校づくりを目指す上ではより客観的な資料として大きな意義がある。教職員による評価を中心としながらも、積極的に外部の評価を取り入れていくべきと考える。

④ 評価計画の概要

評価の実施主体は、「教職員」と「児童生徒・保護者・地域住民等」の別に分けて考える必要がある。また時期や結果への対応等についても明らかにしておきたい。

評価計画については次のような内容を盛り込むことが考えられる。

- 学校評価に関する基本的な考え方
- 評価実施のための組織(担当)
- 年間評価計画
- 内部評価と外部評価との関連
- 評価・調査の内容
- 報告・公表計画(『→実践・改善報告』へ)等

⑤ 評価時期

評価は、明確な目的を持って、計画的に行う。おおよそ、次の4つの類型が考えられる。

- 年度当初：現状分析
- 学期途中：軌道修正等の形成的評価

- 学年末：重点項目等に対する総括的評価
- 各種行事等毎：次年度改善に生かす

学校評価において中心となるのは、学年末における総括的評価で、これをもとに、校長は、『実践・改善報告』の記述を行う。この総括的な評価がより総合的になるために、教職員による各部門毎の評価が行われる。

⑥ 評価項目

評価する項目は、大きく分けて、『学校経営・運営ビジョン』に示された「重点項目」と「学校生活全般」の2つのカテゴリーになる。学校生活全般に関する内容は次の内容が考えられる。

授業、行事、施設設備、校則、児童会・生徒会活動、学級活動（ホームルーム活動）、総合的な学習の時間、部活動、安全管理（校外通学路、校内）、児童生徒観、保護者観、教師観、その他

(2) 『評価・調査票』の概念と利用

評価・調査票はいわゆる質問形式によるもので「評価」や「調査」に使用する。この評価票は、学校及び教職員が、子どもや家庭、地域の思いや願いを含めた自校の現状を正しく認識し(事前)、または、実践を振り返る(事中・事後)ためのもので、「維持・継続すべきよさ」「解決・改善すべき問題・課題」「取り組みの成果」等を明らかにすることをねらいとしている。

① 評価・調査票作成のポイント

次のような事柄に力点を置いて、『学校経営・運営ビジョン』との関連を図りながら作成する。

- 設問は、学校ができること、なすべきこと、伝えたいこと、理解してもらいたいこと等、学校の思いが伝わるものも含める。
- 形式化・形骸化を生まないためにも項目数は最小限にする。
- 自由な意見を収集するためにも自由記述欄を設ける。

② 評価・調査票の配慮事項

うまくいっている他校の実践例をもってきてそのまま自校に当てはめても成果が上がるとは限らない。

- 経営・運営や教育活動全般の評価か、重点的な取り組みの評価か。

- 事前、事中、事後のいずれに実施するのか。
- 達成度を見るのか変化を見るのか。

等、評価対象、時期、目的や学校の実態によっても異なるからである。自分の学校にあった評価票を作成することが重要であり、この設定のための力量が各学校に求められることになり、この評価項目設定のスタートラインは、明確な『学校経営・運営ビジョン』策定時になる。

さらには、次の2点についても是非配慮したい。

- 日常の観察眼や評価眼育成のため、設問は、できる限り事前に公開しておく。
- 結果は、特例を除いては全面公表を原則とし、速やかな公表を想定して作成する。

③ 評価・調査票の例

【評価・調査票（中学校用）の一例】

生徒用の一部

このアンケートは、みなさんの学校生活をよりよいものにするため、学校改善の資料にするものです。
A～Dの最もあてはまるものを○で囲んでください。どうしてもわからない質問は、○で囲まなくてかまいません。
この結果は、後日、整理して生徒のみなさんにお知らせします。

* A：あてはまる B：ややあてはまる
C：あまりあてはまらない D：あてはまらない

- 1 学校へ行くのが楽しい。
- 2 学校は教育目標や方針を生徒にわかりやすく伝えている。
- 3 本校には、受け継がれてきた伝統や校風がある。
- 4 先生方は生徒の意見をよく聞いてくれる。
- 5 知識を豊かにするために読書に親しむ時間が設けられている。
- 6 授業はわかりやすく充実している。

(以下略)

保護者用の一部

- 1 子どもは楽しく学校に通っている。
- 2 学校は地域や保護者の願いに応じている。
- 3 学校は教育目標や方針を保護者にわかりやすく伝えている
- 4 この学校は、いじめや暴力行為、不登校などの問題によく対処している。
- 5 子どもは授業がわかりやすいと言っている。
- 6 学習の評価は、テストの得点だけでなく、子どもの努力や授業に取り組む態度などを含めて行われている。

(中略)

- 15 学校は保護者との連絡や意思疎通をきめ細かく行っている
- 16 学校は保護者や地域の人々に対し、教育活動の説明や情報提供をきめ細かく行っている。
- 17 P T A活動は学校と連携して活発に行われている。

- 18 学校は、保護者が授業を参観する機会をよく設けている。
- 19 学校の施設・設備は生徒の生活や学習がしやすいように整備されている。
- 20 事故（交通事故を含む）や地震・火災などがおこった場合の具体的な対応について生徒・保護者に知らせている。
- ◇ この学校の教育のよい点・特色について、下の欄に書いてください。
-
- ◇ この学校の教育をよりよいものにするために、ご意見がありましたら下の欄に書いてください。
-
- ◇ このアンケートについて、お気付きの点がありましたら下の欄に書いてください。
-

教職員用の一部

このアンケートは、本校の教育が生徒や保護者・地域の願いや期待に適切に対応し、効果的な教育活動が展開されているかどうかを学校自らが点検し、学校改善の方策を明らかにするために行うものです。A～Dの最もあてはまるものを○で囲んでください。どうしても判断できない質問は、○で囲まなくてかまいません。

なお、回答は他校との比較ではなく、本校としての判断で行ってください。この結果は、後日、整理して教職員のみなさんにお知らせします。

* A：あてはまる B：ややあてはまる
 C：あまりあてはまらない D：あてはまらない

- 1 教育活動全般の評価を適宜行い、次の教育活動や次年度の教育計画に生かしている。
- 2 教育計画作成に当たっては、教職員の間で十分な検討を行っている。
- 3 生徒や保護者の願いを把握し、それに応える教育活動を行っている。
- 4 教育目標や方針を生徒や保護者にわかりやすく伝えている。
- 5 保護者や地域と連携した教育活動を適切に配置している。

(中略)

- 25 教育活動は校長のリーダーシップと教職員の共通理解のもとに組織的に行われている。
 - 26 教師は、保護者との連絡や意思疎通をきめ細かく行っている。
 - 27 保護者や中学校、地域の人々に対し、教育活動の説明や情報提供をきめ細かく行っている。
 - 28 P T A活動が活発化するよう学校全体で取り組んでいる。
 - 29 学校の施設・設備は生徒が生活や学習しやすいように整備され、長期的見通しのもとに充実が図られている。
 - 30 事故（交通事故を含む）や地震・火災などがおこった場合の具体的な対応について生徒・保護者に知らせている。
- (以下略)

7 『実践・改善報告』の作成と公表

1年間の取り組みを『実践・改善報告』にまとめ、

保護者等に発信する。『学校経営・運営ビジョン』の内容をもとに「重点実践項目評価、総合評価」及び「客観資料」を加える。

(1) 『実践・改善報告』

『実践・改善報告』には次のような内容を載せる。

- 教育目標
- 重点項目実践結果（担当者・教科、達成度、改善案等を記載）
- 総合的な評価の結果（本年度の実践を踏まえて校長が記述）
- 総合評価に関する児童生徒・保護者評価等の数値、分析結果

意図的な教育活動を展開し、評価実践を行ってきた学校では記載したい項目は多岐にわたると思われるがポイントを絞った記述が重要である。作成に当たっては、次の点はポイントとして押さえておきたい。

- 児童生徒、保護者が知りたいことは何か
- 学校がアピールしたいことは何か
- 学校（児童生徒）のどこが変容したのか、変容しなかった部分は何か（達成度）
- 次の対応はどうするのか（改善策）

(2) 評価と改善策

① 校長の役割と評価・改善のステップ

『学校経営・運営ビジョン』において、「現状分析」を校長が記述したように、1年間の教職員の取り組みを総括し次年度への展望を語るのは、校長の役割となる。

『実践・改善報告』における「計画の達成状況」の評価においては、「総合評価」は、重点項目の達成状況をもとに、校長が行い、各重点項目の評価は、各担当者（担当部署）及び学校評価委員会が行う。学校評価システムはP D C Aサイクルで回り、C Aは次のPに直結する重要な部分である、

C A（評価・改善）のステップは次のようになる。

評価・改善の5ステップ	校長	評価委員会	分掌
各分掌では、部門毎の活動について評価を実施し、部門毎の成果や残された問題を明らかにする。			○
各部門毎の評価結果を集計し、学校全体の問題や課題を明らかにする。		○	

校長は、年度の総括と次年度の基本方針の概要を作成し、職員会議や学校評価委員会において提示する。	○		
校長の総括と各分掌の評価を基に『実践・改善報告』を作成する。		○	
職員会議、保護者会等を通じて、評価結果と次年度の改善点の概要について情報を共有化する。	○		

② 評価・改善の視点

評価委員会の重点項目の評価や校長の総合評価を受けて評価結果を分析することが改善への第一歩である。その際の視点は次の5点になる。

- 目標は適切であったか。
- 内容は適切であったか。
- 方法は適切であったか。
- 評価計画は適切であったか。
- 情報発信・受信は適切であったか。

この結果、校長は、次のいずれかを選択することになる。

- ◎ このまま継続する。
- ◎ 見直しの上継続する。
- ◎ 廃止する。

現状維持、前例踏襲ではなく、教育目標や教育課程全体との関連、さらには、児童生徒や教職員の成就感等から総合的に判断する。

(3) 『実践・改善報告』の公表

校長が総括的な評価を行い、「今年度の成果や残された問題・課題は何か。さらに改善の見通しはどうか。」について『実践・改善報告』にまとめて公表することは説明責任とともに説明したことの結果に対する責任をも果たすことになる。

公表の場、手段、方法は、『学校経営・運営ビジョン』の公表の場合と同じである。

Ⅲ 研究のまとめ

学校評価研究チームの4名と研究直接参加者10名による学校評価研究協議会を10回実施し、さらには13名の間接参加者との情報発信・受信をしながら研究を推進してきた。学校評価の方法・手段としての評価・調査票及びPDCA票からスタートした研究であったが、協議及び試行を重ねていく内に学校評価システム構築のためには、学校設置基準に原点を求め「何を説明するのか、何を実践し評価するのか、

そして何を公表するのか」がクローズアップしてきた。『学校経営・運営ビジョン』『実践・改善報告』を中心とした学校評価システムの必要性がそこから生まれ、このことにより学校経営・運営に位置付けられた学校評価システムが見えてきた。

しかしながら、これはあくまでも基本形であり、これらを参考に各学校がいかに自校化を図るかが重要な問題である。

その際、前述した試行の結果浮かび上がった問題点に十分に配慮しながら、できるところから始めて一つ一つの実践を積み重ねていくことが重要と考える。

本研究は2年次を以て一応終了とするものの、次年度以降は研究の成果や課題をもとに当センターで行われる各種講座に取り入れていきたい。また今回提言した学校評価システムについては、各校の実践と学校経営の理論とをさらに加味して、改善し続ける事が大切であると考えている。

〈参考文献〉

本研究を進めるにあたり、以下の文献を参考にさせていただきました。

- 1) 学校評価の促進条件に関する開発的研究中間報告
木岡一明著 (国立教育政策研究所 平成13年)
- 2) 目標管理の知識と実務 猿谷雅治・市川彰著
(日本実業出版社 昭和54年)
- 3) 学校教育自己診断のまとめ
(大阪府教育委員会 平成13年)
- 4) 学校自己評価実施の手引き
(三重県総合教育センター 平成13年)
- 5) 現代の教育改革と学校の自己評価 矢尾板修著
(ぎょうせい 平成12年)
- 6) 学校評価の促進条件に関する開発的研究中間報告(2)
木岡一明著 (国立教育政策研究所 平成14年)
- 7) 講座資料「組織マネジメントの手法から学校自己評価を考える」 浅野良一著 (産業能率大学 平成14年)
- 8) 総合教育技術「最新教育基本用語」
(小学館 平成13年 平成14年)
- 9) 新しい学校評価と組織マネジメント
木岡一明著 (第一法規 平成15年)

学校評価システム (このシステムそのものが『PDCA票』の趣旨を生かしたものです。)

段階	時期	内 容	担 当	その他
計画	前年度末	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">『学校経営・運営ビジョン』</p> <p style="text-align: center;">学校の教育目標</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;">校長の経営理念</div> <div style="width: 45%;">現状分析</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;">地域における学校の役割</div> <div style="width: 45%;">課題の明確化</div> </div> <p style="text-align: center;">校長の経営・運営方針 (目指す姿と重点項目)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">部門別の重点項目実践計画</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;">目 標</p> <p style="font-size: small;">目指す姿であり、定量化できることが望ましい</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;">内 容</p> <p style="font-size: small;">より焦点を絞って具体的なものに</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">方 法</p> <p style="font-size: small;">具体的予立と実施期間等</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;">評価計画概要</p> <p style="font-size: x-small;">評価内容、組織、方法、実施者、実施時期等</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;">情報発信受信</p> <p style="font-size: x-small;">説明、啓蒙、公表、情報収集協力依頼等</p> </div> </div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">部門別計画 (詳細な評価計画を含む)</p>		

次年度『学校経営・運営ビジョン』の策定と新たな教育活動の展開

カリキュラム研究チーム

思考過程を重視したきめ細かな学習指導を 充実させるための工夫

思考過程を重視したきめ細かな学習指導を
充実させるための工夫

思考過程を重視したきめ細かな学習指導を充実させるための工夫

《目次》

第一章 「確かな学力」のための基本調査と結果概要	15
I 研究の趣旨	15
II 研究の概要	15
1 研究仮説の設定	15
2 研究の概要とプロセス	16
3 研究内容	17
第二章 思考過程を重視したきめ細かな学習指導の手立て	25
I 国語科における思考過程を重視した学習指導の手立て	25
1 はじめに	25
2 国語科における思考過程を重視した学習指導の手立て	25
3 具体的な手立て	25
4 まとめ	26
II 社会科における思考過程を重視した学習指導の手立て	26
1 はじめに	26
2 思考過程を重視した社会科学習指導の手立て	26
3 思考過程を重視した社会科学習指導の具体事例	26
4 課題設定のプロセスにおけるモデリングの事例	27
5 課題追究のプロセスにおけるモデリングの事例	27
6 おわりに	27
III 理科における思考過程を重視した学習指導の手立て	28
1 はじめに	28
2 演繹的な思考過程を重視した指導の視点	28

思考過程を重視したきめ細かな学習指導を充実させるための工夫

カリキュラム研究チーム

第一章 「確かな学力」のための基本調査と結果概要」

I 研究の趣旨

平成13年度教育課程実施状況調査や国際教育到達度評価学会（IEA）調査、OECD生徒の学習到達度調査（PISA）等の全国的・国際的な調査結果などによると、我が国の子どもの学力の現状として「覚えることや計算は得意だが、学習が受け身で、自分から調べ、判断し、自分なりの考えを持ち、それを表現するなどの問題解決する力が不十分である」、「学習習慣が十分に身に付いていない」ことなどの課題が指摘されている。

本県においても、「知識や技能に加え、子どもが目的意識を持って自ら積極的に学びに取り組もうとする意欲や、思考力、判断力、表現力までを含めた学力を身に付けさせる」ことが大きな課題となっている。また、子どもが陥りやすい学習は、結果主義、暗記主義、物量主義が中心であることが指摘されている。

これらの結果は、子どもが、学習を「答えの正誤の確認」、「答えを出す手続きや断片的な知識の習得」、「単純な反復による習熟」などと捉える傾向が強いことを示している。

しかし、こうした学習は、学習観、学習動機、学習方略（方法）などと関連し、学力の形成に影響を及ぼしているのではないかと考えた。

また、問題解決能力を身に付けさせるためには、思考過程を重視する学習を充実させる必要があるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、本県の中学生の実態を把握するために、問題解決能力の程度を測るための教科横断的な総合問題と学習観、学習動機、学習方略などを探るための学習意識調査を実施し、その分析を行った。

併せて、それらの分析から浮かび上がった課題を検討し、思考過程を重視した学習指導の手立てについて研究した。

II 研究の概要

1 研究仮説の設定

研究調査を行うに当たって、下の図に示した「学びの原動力」と「問題解決能力」、「教科学力」の構造図を設定し、この構造に沿った研究仮説と調査項目を設計した。

図1 学びの原動力と問題解決能力、教科学力の構造

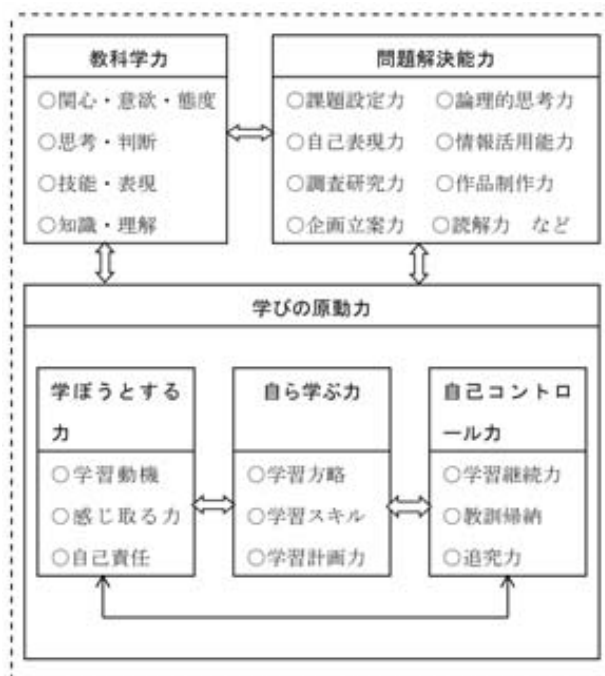


図1の中の「学びの原動力」は、子どもの学習意識や学習観、学習動機、学習スタイルや学習方略など見えない学力といった言葉で抱いていた認識を「学びの原動力」として、「学ぼうとする力」、「自ら学ぶ力」、「自己コントロール力」の3領域に整理したものである。これら3つの力は相互に関与し合い、複合的に形成されていく「確かな学力」の基底にあると考えた。そして、「学びの原動力」は、問題解決能力や教科学力に対して強い影響力を持つとともに、問題解決能力や教科学力の伸長・発達が、「学びの原動力」の質的変化・成長を促すという相互関連の構造モデルを示すものとして設定した。

問題解決能力については、様々な力が複雑に関係

する力ではあるが、具体的な視点を設定することによって子どもの問題解決能力を把握するための項目として設定した。これらの項目は、各教科において求められる学力に関係するものであり、問題解決能力の伸長・発達が、結果的に各教科の学力向上に寄与すると考えた。

2 調査の概要とプロセス

(1) 調査の概要

① 調査のねらい

ア 生徒の「問題解決能力」, 「学びの原動力」, 「教科学力」の現状を調査し、3つの力の関係を分析・検証する。

イ 「確かな学力」の向上に向けて、教科における具体的な学習指導に役立つ視点や手立てを提供する。

② 調査対象 県内中学校第3学年生徒(429名)

③ 調査時期 平成15年7月~10月

(各学校別に任意の日程で調査を実施した)

④ 調査内容と方法

ア 問題解決能力に関する調査

各教科を融合させた総合問題の実施を通して、問題解決能力の実態を調査した。

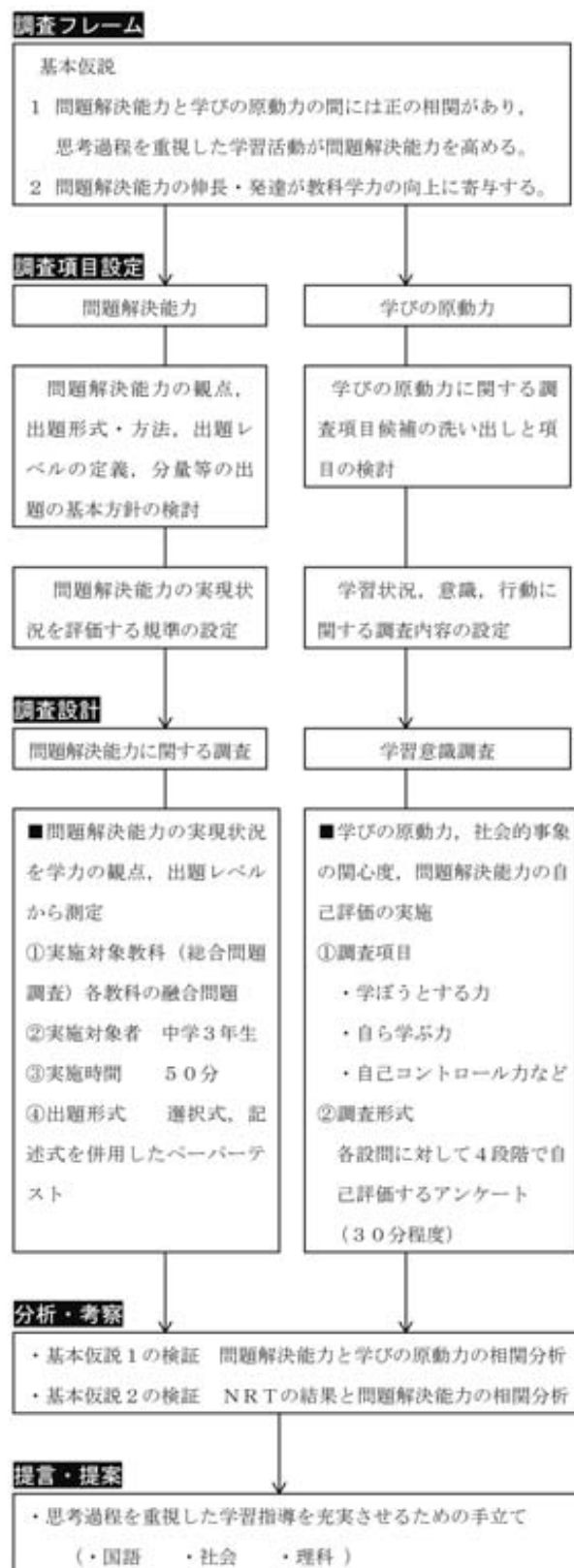
イ 学習意識に関する調査

学習観、学習動機、学習方略などの「学びの原動力」の自己評価や問題解決能力の自己評価、社会的事象の関心・社会参加に関する自己評価を、「とてもよくあてはまる」、「どちらかというにあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階に分けた選択肢の中から回答させた。

(2) 調査のプロセス

調査のプロセスは、図2に示したように調査フレーム、調査項目設定、調査設計、分析・考察、提言・提案に区分して行った。

図2 調査のプロセス



3 研究内容

(1) 総合問題調査による問題解決能力の現状把握

① 総合問題調査の出題の基本方針

教科横断的な総合問題調査は、各生徒の問題解決能力の程度を把握するとともに、今後の生徒の学習や学習指導の改善に資するための調査とした。

また、問題解決能力について、ペーパーテストで実態調査することが適当なものを出題した。

② 総合問題調査の目的

総合問題調査は、特定の教科の内容を生徒がどの程度習熟しているかを調べることを目的としていない。特定の知識は、その知識を応用できるかが重要であり、その習得のために、生徒がより広い概念理解や技能をどれだけ学習してきたかに依存している。

また、激しく変化する社会において個人が適応したり、課題に対処するために必要な問題解決能力は、教科横断的に発達し、生涯にわたって知識や技能を習得するための基礎となる力であると考えられる。

したがって、教科をまたぐ教科横断的な能力を測定することが本調査の主目的である。

③ 総合問題調査の問題の形式

調査問題は、4つの大問で構成されているが、文章、図、グラフ、表などの与えられた素材や条件のもとで、知識の単純な操作によって選択肢から選択させる問題と、様々な知識や技能等を組み合わせ、文章あるいは語句で答えさせる記述式の問題に大別される。

特に、生徒がこれまで身に付けた知識や技能、思考などをもとに、現在及び将来の社会生活に関する事柄などについて、いかに対処するかを文章あるいは語句で表現する力を見る問題に力点を置いている。

調査時間は、50分であるが、比較的簡単なレベルの問題だけでなく、高い思考力を要する問題を含むことによって、生徒の問題解決能力をより広範に測定することが可能になる問題にした。

④ 総合問題調査で測定する3つの側面

与えられた素材や条件の範囲の中で、適切に判断し、課題を解決する力の実態を測定するため、次の(1)～(3)の側面に焦点をあて評価した。

評価の3つの側面

(1) 価値ある情報の抽出

与えられた情報を吟味し、価値ある情報を正確に取り出したり、選別したりすること。

(2) 情報の特徴や構造の理解

これまで身につけた知識や技能、思考などをもとに、与えられた情報の原因推測、情報間の総合・対比や分類整理などにより、解釈したり推論したりすること。

(3) 情報と自己の経験との関連づけ

価値ある情報と自己の知識や考え方などと関連づけること。

⑤ 各大問の出題のねらい

各大問に示されている文章、グラフ、図、表などは、生徒自身が現在及び将来の社会生活に関する事柄であり、これらの価値ある情報について生徒に学び取らせ、再構成させたり、熟考させたりするための素材である。大問ごとの出題のねらいは、次のとおりである。

〈大問1の出題のねらい〉

「わが国における生産年齢人口の区分図」と「少子高齢化の進展と将来の予想のグラフ」を正確に読みとり、情報の取舍選択、比較、身近な事例との関連付けを通して、解釈させる問題である。

〈大問2の出題のねらい〉

「砂漠化」の進行について、アフリカのチャド湖の水位変化についての文章と図、年表を関連づけて思考し、解釈させる問題である。

〈大問3の出題のねらい〉

オゾン層についての文章から、化学的、物理的変化の概念やモンリオール議定書の一部を読みとり、情報を構造化し、解釈させる問題である。

〈大問4の出題のねらい〉

言語の構造的な違いと異文化理解についての説明文や史料を読解させ、それらと自己の考え方を結びつけ、自己表現させる問題である。

⑥ 総合問題調査の結果分析

総合問題調査の結果を学力層ごとに分析するために、各生徒の総合スコアを偏差値換算し、上位から7%（A層）、24%（B層）、38%（C層）、24%（D層）、7%（E層）の割合に準ずる形で5段階の問題解決能力レベルを設定した。さらに、A層をA1層（偏差値70以上）とA2層（偏差値69～60）に区分した。A1～Eの学力層における大問ごとの平均正答率及び総合平均正答率の結果は、次に示す表のとおりである。

表 総合問題調査の結果

	大問1	大問2	大問3	大問4	総合
A1層	93%	96%	86%	73%	84%
A2層	65%	84%	75%	57%	67%
A層総合	73%	88%	83%	56%	71%
B層	43%	85%	61%	47%	55%
C層	25%	73%	39%	27%	37%
D層	13%	54%	23%	10%	21%
E層	5%	19%	9%	4%	8%

総合問題調査は、特定の教科の内容に関する知識を生徒がどの程度習熟しているかを確かめるものではなく、問題解決能力の程度を調査したものである。全体として正答率が低い。大問2で評価した、素材（文章、グラフ、図、表など）を読み取り、与えられた情報の単純な操作によって導き出す力は、全体の平均正答率が約70%であり、ほとんどの生徒が身に付いている。しかし、大問1や大問4で評価した情報を正確に読み、具体的な事例と関連させたり、理解したことを的確に判断し、自己表現する力が不十分である。人が、情報を見たり、読んだりする場合、ある枠組みを通して解釈するが、その枠組みは、個人の知識や過去の経験によってできている。この枠組みを学習心理学では、スキーマと呼ぶ。

情報の持つ意味を理解するためには、その情報を色々な角度からながめ可能性を検討し、どれが妥当な考え方を論理的に決めなければならないが、そのときに活用するのがスキーマである。

しかし、場合によっては、中途半端なスキーマのせいで自分の知識に合わせて間違った解釈をする場

合がある。本調査結果でも、問題解決に当たって、自分の知識に合わせて情報を解釈したり、単なる思いこみで解答した生徒が多かった。スキーマを使いこなすためには、個々の情報をつなぎ合わせ、状況や文脈に合わせて、素早く的確に判断し、意味づけることが大切である。生徒は、各教科において新しい情報を理解する場合に、注意深く、合理的に（あるいは正確に）思考して、事実を把握し、解釈する学習活動を行っていく必要がある。

このことは、生徒の学習過程において、問題解決の結果よりもプロセス（思考過程）を重視することを意味する。そして、知識や理解状態をモニターするために、情報のもつ意味内容を自己説明させたり、失敗に対する柔軟な態度を育成したりする思考過程を重視する学習指導が大切である。このことがひいては、生徒の問題解決能力の育成につながるのではないかと考える。

（2）学習意識調査結果の概要

① 学習意識調査の目的

生徒たちが、全体としてどのような学習を行っているかを調査するためには、より広範な調査研究が必要である。

まず、学習観や学習動機は、学習方法を直接的に規定し、ひいては問題解決能力や学業成績に大きな影響を与えているという研究仮説を設定した。そして、「学びの原動力」となる、学習方法（学習方略、学習スキル）とその背後にある学習観、学習動機、目的感などを検討し、それらの「学びの原動力」と問題解決能力や学業成績との関連を調査分析することを目的とした。

② 学習意識調査の内容

生徒の学習意識の実態を客観的に把握するため、学習動機や学習スキル、学習方略などの「学びの原動力」を「学ぼうとする力」、「自ら学ぶ力」、「自己コントロール力」に分類した3つのカテゴリーに関する領域と「社会的事象の関心度」、「問題解決能力の自己評価」の領域について、次の図3に示したⅠ～Ⅶの下位項目の質問項目を設定した。

図3 学習意識調査の内容

I	学習動機に関する調査
	・学習の功利性（学習のメリット）や学習内容の重要性（学習することがどのような意味を持つか）をどう捉えているか。
II	学習スキルに関する調査
	・学び方の工夫や自助努力をして理解しようとしているか。
III	学習方略に関する調査
	・知識の構造化や関連づけを行うことを重視する学習を行っているか。
IV	思考過程に関する調査
	・学習において理解の役割を最大限利用し、思考過程（プロセス）を重視した学習を行っているか。
V	自己コントロール力に関する調査
	・自分の弱点を認識し、誤った知識を修正して次の課題解決に役立たせているか。
VI	社会的事象の関心度に関する調査
	・社会的な出来事についての関心をどの程度持っているか。
VII	問題解決能力の自己評価の調査
	・問題解決能力の伸長・発達の自己評価

③ 学習意識調査の結果の分析

学習意識調査結果について、「とてもよくはまる」及び「どちらかといえばあてはまる」と回答した者を肯定群、「あまりあてはまらない」及び「まったくあてはまらない」を否定群として分類するとともに、A1～Eの学力層ごとの回答結果についてグラフ化した。

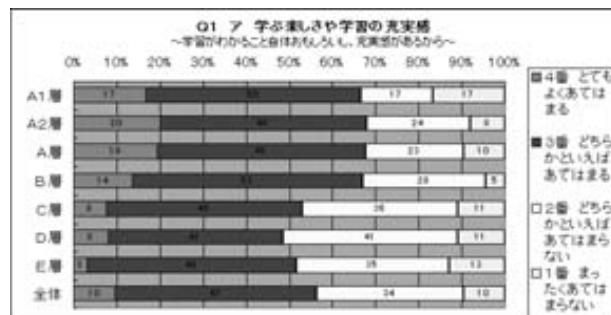
I 学習動機に関する調査

「学習の役立ち感」については、6割以上の生徒が肯定している反面、「テストや入試に左右され、仕方なしに学習」している生徒が多い。

また、Q1アの「学習の楽しさや学習の充実感」で「とてもよくあてはまる」と回答した生徒が極端に少ない。このことをA1～Eの学力層ごとに示したものが、次のグラフIである。

「とてもよくあてはまる」について学力層ごとに有意差があった。

グラフ I

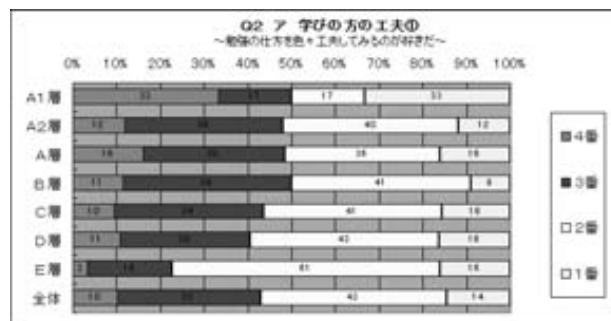


II 学習スキルに関する調査

「成績を上げるための自助努力」については、かなりの生徒が肯定しているが、グラフIIに示されているように、Q2アの「学び方の工夫」については、現在行っている学習方法についての改善・見直しを考えている生徒が少ない。

特に、見直しが必要と思われる学力が低い生徒に顕著であった。

グラフ II

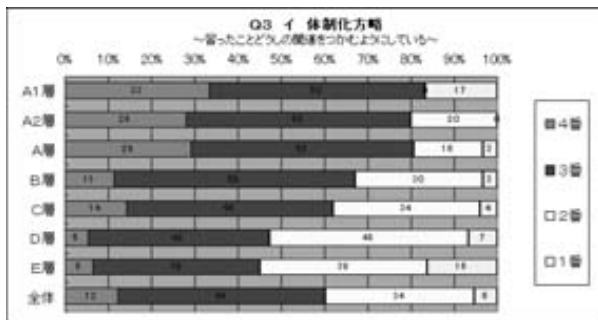


III 学習方略に関する調査

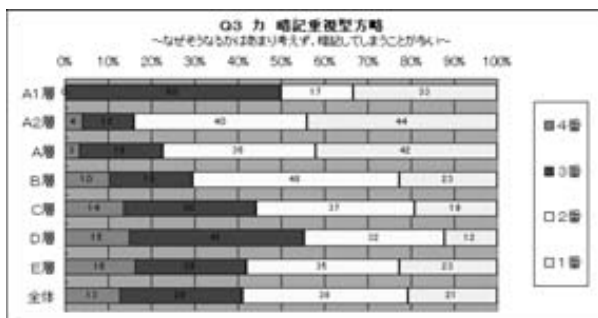
「理解することを重視して学習」する生徒は8割以上いるが、グラフIIIに示されているようにQ3イの「知識の構造化や関連づけ」について、「とてもよくあてはまる」が全体の1割程度の者しか肯定していない。

また、グラフIVに示すQ3カの「暗記重視型の学習」は全体としては少ないものの、学力層ごとに比較してみるとかなりの有意差が見られた。

グラフⅢ



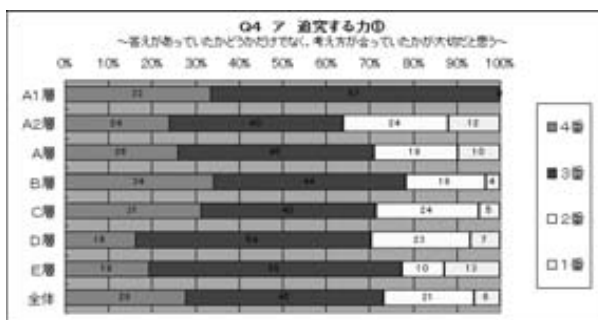
グラフⅣ



IV 思考過程に関する調査

Q4アの「追究する力」について、かなりの生徒は、追究しようという考えを持っているが、グラフⅤに示されているように、「答えより考え方を重視することについて」、A1層の全ての生徒が肯定している。

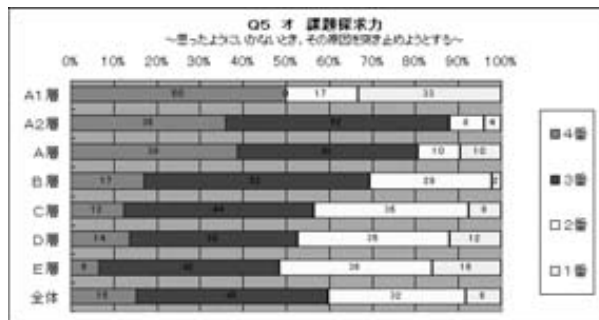
グラフⅤ



V 自己コントロール力に関する調査

「失敗を生かすこと（教訓帰納）」については、かなりの生徒が肯定しているが、グラフⅥに示されているとおりQ5オの「課題探求力」は、学力層ごとに比較すると有意差が見られた。

グラフⅥ

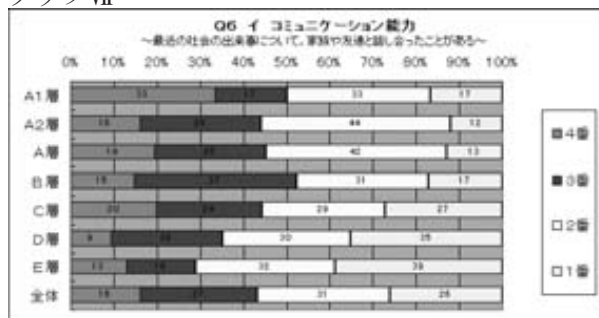


VI 社会的関心度に関する調査

Q6イの社会の出来事に関するコミュニケーション能力や社会貢献についての認識が全体的に低い。

社会の出来事に関するコミュニケーション能力は学力層間で有意差が見られた。

グラフⅦ

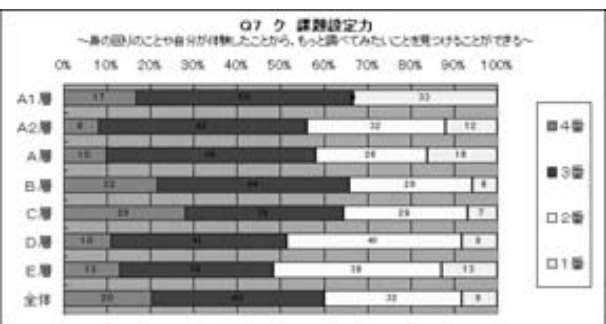
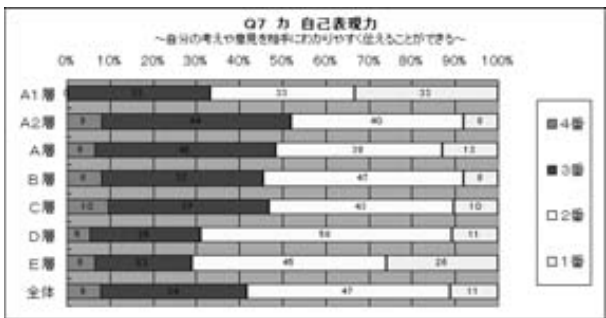
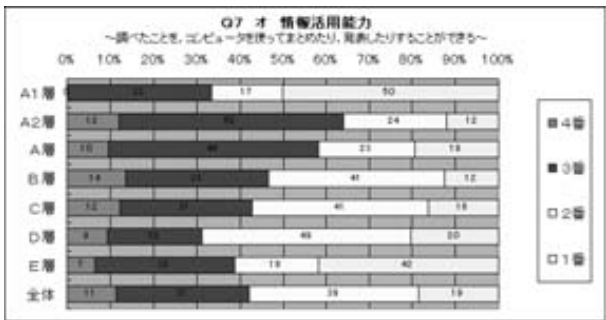
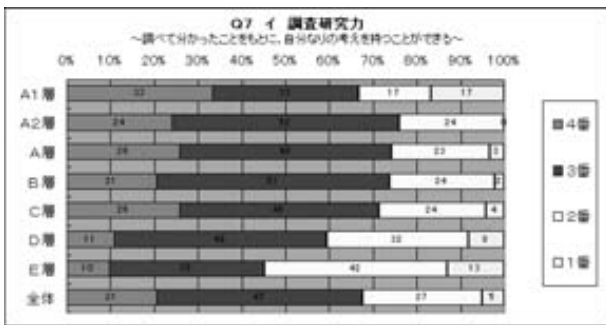
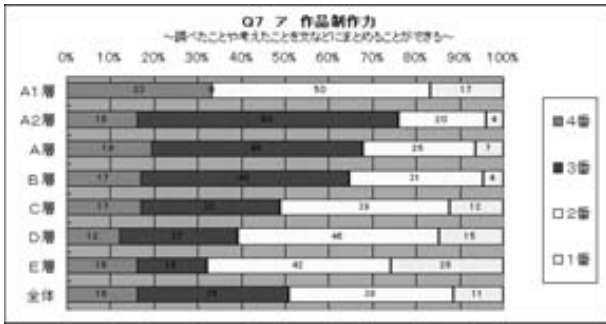


VII 問題解決能力の自己評価

Q7ウ「論理的思考力」やQ7オ「情報活用能力」、Q7カ「自己表現力」について、肯定群が少なかった。この結果は、総合問題調査結果と一致している。

また、「論理的思考力」、「情報活用能力」、「自己表現力」については、生徒自身も課題意識を持っており、問題解決能力の育成は、今後一層必要であることが明白になった。

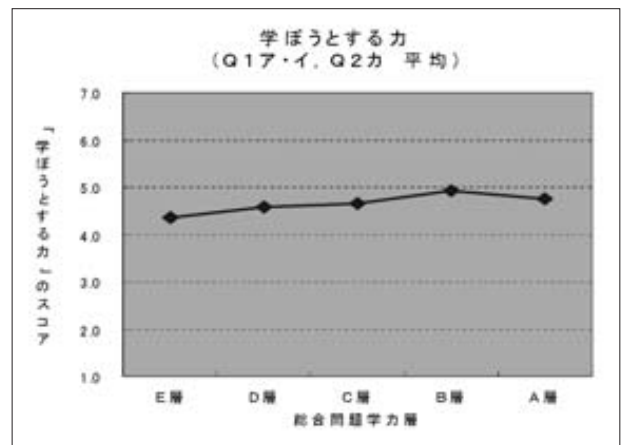
特に、学力層ごとに有意差が見られた次のグラフに示した、Q7ア「作品制作力」、Q7イ「調査研究力」、Q7オ「情報活用能力」、Q7カ「自己表現力」、Q7ク「課題設定力」については、教科横断的に育成する必要があると考える。



「自己コントロール力」の3つのカテゴリーに分類し、これらの「学びの原動力」について、総合問題調査結果でカッティングしたA層～E層間の学習意識の比較を行った。各グラフの縦軸のスコアは、「とてもよくあてはまる」は7点、「どちらかというあてはまる」は5点、「あまりあてはまらない」は3点、「まったくあてはまらない」は1点として得点化し、各学力層の平均値を算出した結果である。その中で有意差が顕著なものについて示したものが、グラフA～グラフEである。

グラフAの学ぼうとする力は、「学ぶ楽しさや学習の充実感」、「学習の役立ち観」、「自己責任（自助努力）」の項目について、A～E学力層の比較をしたものである。上位層と下位層の間でわずかではあるが、差異が見られた。

グラフA

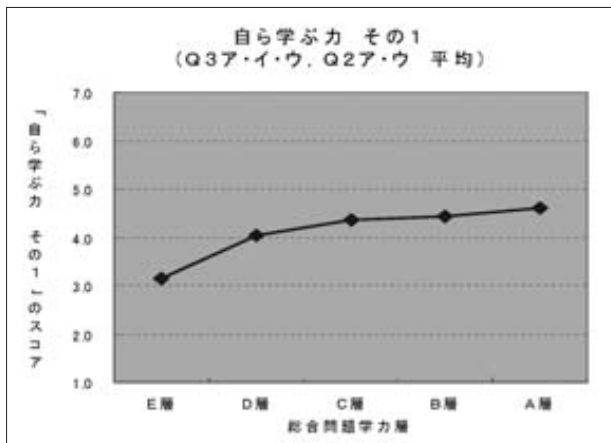


グラフBは、「自ら学ぶ力（学習方略、学習スキル）その1」について、Q3ア「理解重視型学習方略」、Q3イ「体制化方略」、Q3ウ「精緻化方略」、Q2ア、ウ「学び方の工夫」の項目を比較したものである。学力層間で極端な差異が見られ、学力が高いほど思考過程を重視した学習方略を身に付けていることが分かる。

(3) 問題解決能力と「学びの原動力」の関係

学習意識調査の結果を、生徒の「学びの原動力」として設定した「学ぼうとする力」、「自ら学ぶ力」、

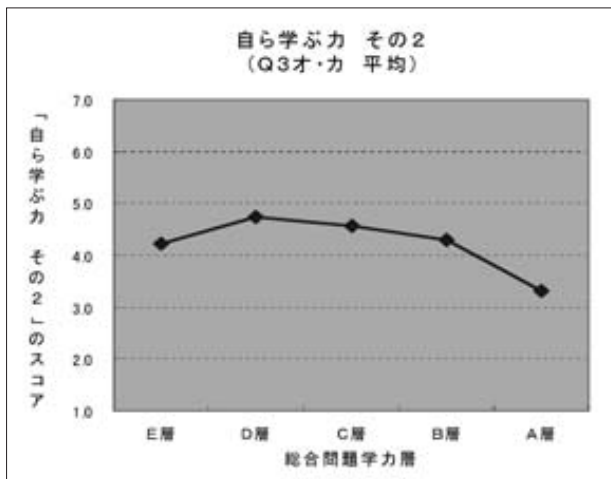
グラフB



グラフCは、グラフBとは表裏の関係にある「自ら学ぶ力その2」であるQ3オ「反復方略」とQ3カ「暗記重視型方略」について比較したものである。

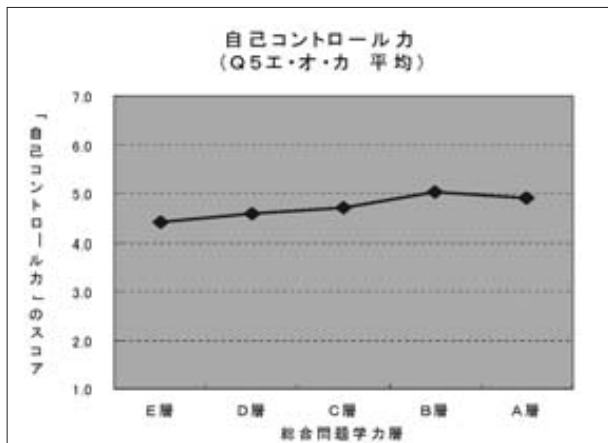
グラフCは、グラフBとは全く逆の傾向を示し、学力が低くなるほど、断片的な知識を覚えることやドリル（反復）型学習方略に陥っていることが分かる。ただ、E層が低いのは、学習全体において学習経験が希薄であることが影響していると思われる。

グラフC



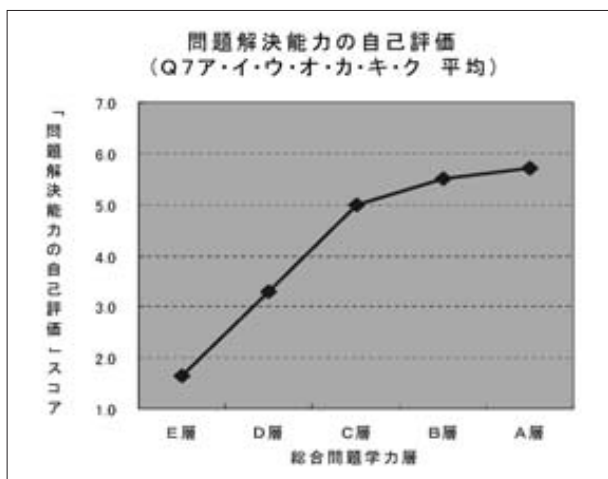
グラフDの「自己コントロール力」は、Q5エ「学習継続力」、Q5オ「課題探求力」、Q5カ「失敗を生かす力（教訓帰納）」の項目について、学力層間の比較を示したものである。極端な差異は見られないが、上位層になるに従って、課題に対して追究していく姿勢が見られる。

グラフD



グラフVの「問題解決能力の自己評価」については、「学びの原動力」の中に含めてはいない調査項目である。Q7ア「論理的思考力」、Q7イ「作品制作力」、Q7ウ「調査研究力」、Q7オ「情報活用能力」、Q7カ「課題設定能力」、Q7キ「自己表現力」の項目を自己評価させたものである。学力層間で極端な有意差が見られ、学力が高いほど問題解決に当たってのスキルや主体的に追究していく態度や能力が身に付いていることがわかる。

グラフE



「学びの原動力」として設定した3領域、下位項目が、問題解決能力に及ぼす影響について分析研究したが、その結果、「問題解決能力と学びの原動力の間には正の相関があり、思考過程を重視した学習が問題解決能力を高める」という基本仮説1が検証できた。

「学びの原動力」の3領域や下位項目はそれぞれ独立したものではなく、相互に関連しあい、相乗効

果を持って機能していることがうかがえる。

これらの領域がバランスよく育成されることにより、問題解決能力に対する影響力は大きくなることが期待される。たとえば、学習方略はなかなか変容しにくいものであることが指摘されているが、学習内容の興味や必要性を認識し動機づけられて学習しているほど、思考過程を重視した学習方略を生徒自身が採用するのではないかと考えられる。

また、授業改善や生徒の学習方略の改善により、「よくわかる」、「よくできる」ということになれば、自ずから「学習の役立ち感」などの動機が起こってくるのではないかと考える。

(4) 教科学力と「学びの原動力」の関係

教科学力と「学びの原動力」の関連を調査するため、問題解決能力と「学びの原動力」の関連性を調査した内容と同様の方法で分析した。

教科学力は、NRT（国語、社会、数学、理科、英語の5教科）の調査結果をもとにして、総合スコアを偏差値に換算し、上位から7%（L5層）、24%（L4層）、38%（L3層）、24%（L2層）、7%（L1層）の割合に準じて、5つの学力層に分けて、「学びの原動力」との関係性を調査分析した。

その結果は、グラフF～グラフIに示されているように「学びの原動力」を構成する「学ぼうとする力」、「自ら学ぶ力」及び「問題解決能力の自己評価」について、学力層間で有意差が見られた。

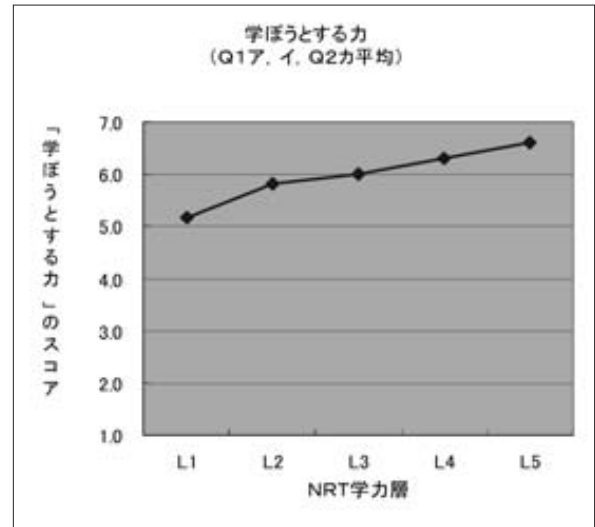
教科学力と「学びの原動力」の関係においても、問題解決能力と「学びの原動力」の関係性と同様に、『学びの原動力』の高い生徒ほど教科学力が高いという傾向を明らかにすることができた。

そして、「学ぼうとする力」や「自ら学ぶ力」などで構成される「学びの原動力」を育成することが、教科学力の向上につながるという学力の向上を目指す上での一つの視点を示すことができた。

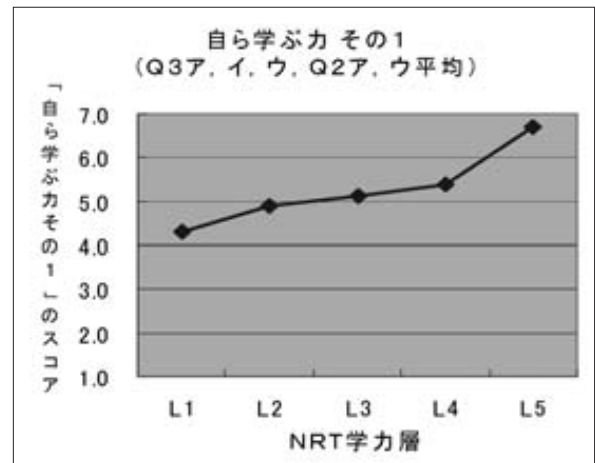
このことは、「学びの原動力」が、教科学力や問題解決能力に対して強い影響を及ぼしているとともに、教科学力や問題解決能力の伸長・発達が、「学びの原動力」の成長を促すという、相乗効果を持って機能していることを示している。学びの意義や目

的感、学習方略を充実させるとともに、思考過程を重視した学習指導の充実が問題解決能力や教科学力の向上の育成につながると考える。

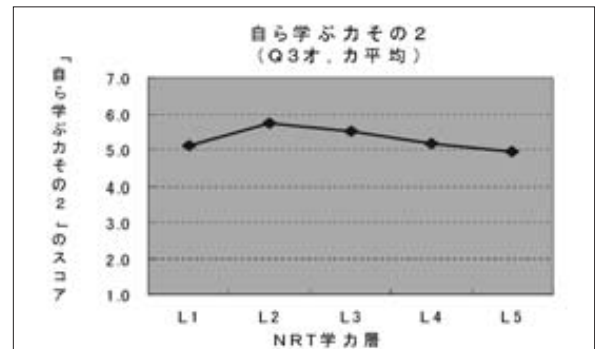
グラフF



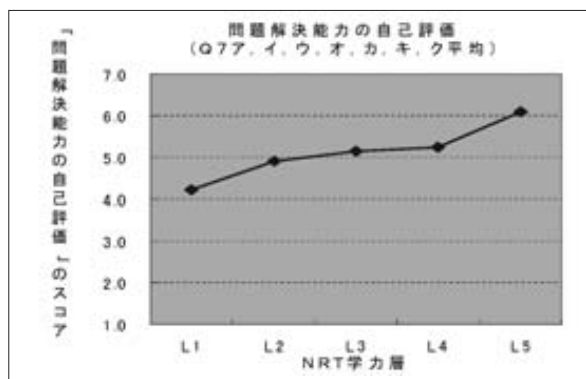
グラフG



グラフH



グラフ I



(5) 問題解決能力と教科学力の関係

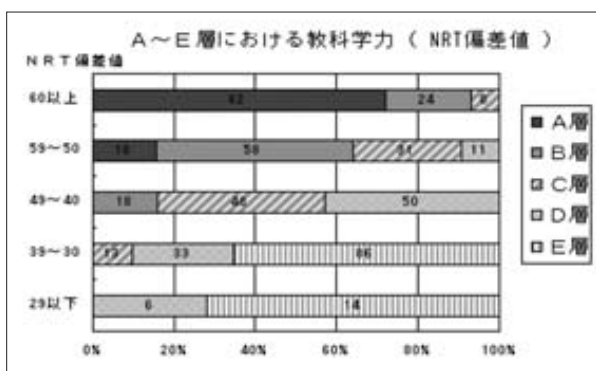
問題解決能力（総合問題の調査結果）と教科学力（NRTの調査結果）の相関分析を行い、問題解決能力の高低と教科学力の影響度について分析した。

次の表は、総合問題の調査結果（総合スコアの偏差値）で区分したA層～E層における教科学力（NRTの偏差値平均）の程度を示したものである。また、グラフ J は、A～E層における教科学力の関係を示したものである。

表やグラフ J に示した結果から、問題解決能力が教科学力に及ぼしている影響の強さを読み取ることができる。

総合問題調査結果の学力量	NRT総合スコアの偏差値平均
A 層	62.8
B 層	54.4
C 層	48.6
D 層	42.1
E 層	31.8

グラフ J



(6) 調査分析のまとめ

本調査は、「学びの原動力」と問題解決能力の関係や「学びの原動力」と教科学力の関係、問題解決能力と教科学力との関係を捉えることを目的に行ってきた。調査結果の分析から、これらの3つの力は、相互に関連しあい、相乗効果を持って機能していることが分かった。また、学習方略としての思考過程を重視した学習が、教科学力の向上や問題解決能力の育成につながることも明らかになった。

これらの調査分析の結果から、生徒たちの「学びの原動力」、「問題解決能力」、「教科学力」の3つの力をバランスよく育成することが、結果として「確かな学力」の向上につながるのではないかと考える。

以上の調査分析の結果を踏まえ、次章以降では、各教科における思考過程を重視した学習指導の具体例を提示する。

〈参考・引用文献〉

- 1) 生きるための知識と技能OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 国立教育政策研究所編 (ぎょうせい 2002年)
- 2) 認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導 市川伸一編著 (ブレーン出版 1998年)
- 3) 勉強方法が変わる本 心理学からのアドバイス 市川伸一著 (岩波ジュニア新書 2000年)
- 4) 学習と教育の心理学 市川伸一著 (岩波書店 1995年)
- 5) クリティカル進化論 道田泰司・宮元博章著 (北大路書房 2002年)
- 6) 認知心理学4 思考 市川伸一編 (東京大学出版 1996年)
- 7) 認知心理学を知る〈第3版〉市川伸一・伊東裕司編著 (ブレーン出版 1987年)
- 8) 豊かな学力の確かな育成に向けて ベネッセ教育総研編集

第二章 思考過程を重視したきめ細かな学習指導の手立て

I 国語科における思考過程を重視した学習指導の手立て

1 はじめに

総合問題調査や学習実態調査の分析結果を踏まえ、国語科における論理的な思考過程を重視した読解力と表現力の育成のための指導の手立てについて考察する。

2 国語科における思考過程を重視した学習指導の手立ての設定

- ① 論理的な文章の読解と表現指導に応用できる「型」の習得指導
- ② 漢語の組立の理解を通して語彙力を向上させるための指導
- ③ 批判的読みの指導

3 具体的な手立て

教科書教材の「魚を育てる海」(光村図書・1年)を使って、具体的な指導の実際について提示する。この教材文は、「はじめ・なか1・なか2・なか3・まとめ・むすび」の文章構成になっており、具体的事実と考察、結論とがよく結びつき論理的な文章の読解指導に適していると考えられる。そこで、論理的な文章の読解と表現指導に応用できる「型」の習得指導を中心に、漢語の組立を応用した語彙指導や批判的読みで自分の考えを深め、表現させる指導を計画した。論理的な文章の読解指導については、日本言語技術教育学会会長の市毛勝雄氏が提唱している「型」の指導法が有効と考える。

読解指導の「型」の指導では、特に、「具体的事実」(なか1, 2, 3)から、「まとめ」の部分が重要である。いくつかの具体的事実から共通する性質を導き出すための帰納的な思考が要求されるからである。「なか」の具体的事実に一貫性があり、「まとめ」が共通性を正しく帰納しているか、まとめとむすびの関係は正しく発展しているかなどを検討することが大切である。

次に、出された意味段落のキーワードを以下のような表にまとめることで、文章の論理的展開の「型」が明確に理解されると考える。

<文章構成>

文章構成 (段落の役割)	意味 段落	形 式 段 落	重要語句 (キーワード)
はじめ	一	1~2	襟裳砂漠
なか1	二	3~5	森と海の関係(森が消え、海が死んだ)
なか2	三	6~10	海の生物を守る森の役割
なか3	四	11~13	海の生物を育てる森の役割
まとめ	五	14~15	海の生物と森の結びつき
むすび	六	16	自然のバランス

これまでの授業では、教材文の正確な読みとりと主眼がおかれ、批判的読みの指導については、あまり実践されてこなかった。批判的とは、「じっくり慎重に検討する」ということである。書かれている主張や根拠が妥当か、論理的に筋が通っているか、別の考えはないかなどを考えながら読み、腑に落ちるところまで理解する読み方である。言い換えれば、知識受容型から知識創造型への転換である。具体的な指導例では、教材文としての新聞の投書記事を批判的に検討し自分の考えを深めさせる。さらに、説明文の読解で学んだ論理的展開の「型」で自分の考えを書かせる学習に発展させる。

全体の指導計画は次の表の通りである。

<学年 中学校1学年>

指導目標

- 説明文の文章構成を理解させる。
- 意味段落から重要語句(キーワード)を抜き出させる。
- 自分の意見を確かなものにして論理的な文章を書かせる。

指導計画 (全5時間)

- 第1時 ○題名やリード文から内容を推察させる。
○範読を聞き、音読の練習をさせる。(範読、音読練習、斉読)
○形式段落に番号をつけさせる。
○話し合いながら6つの意味段落に分けさせる。
- 第2時 ○全文を斉読させる。
○各意味段落のキーワードを、取り出させる。
○難解な漢語については、漢語の組立に関する知識を応用して意味を推測させる。
- 第3時 ○文章構成を確認させる。「はじめ(序論)・なか(具体的事実)・まとめ(考察)・むすび(結論)」
○ノートに構成をまとめさせる。
○全文の要旨をまとめ、添削を受けさせる。
○全文を斉読させる。
- 第4時 ○資料を批判的に読み、考えを深めさせる。
- 第5時 ○400字「はじめ・なか1・なか2・まとめ・むすび」の5段落構成で自分の考えを書かせる。

4 まとめ

論理的思考力や表現力をさらに高めるために、これまで述べてきた思考過程を重視した学習指導の三つの手立てを関連させたり、繰り返し指導したりすることが必要である。

(参考・引用文献)

- 1) 説明文教材の授業改革論 市毛勝雄著 (明治図書 1997年)
- 2) 作文の授業改革論 市毛勝雄著 (明治図書 1997年)
- 3) 文章理解の心理学 大村彰道監修 (北大路書房 2001年)

Ⅱ 社会科における思考過程を重視した学習指導の手立て

1 はじめに

社会科における思考過程を重視した学習の手立てとして三つの考え方を示し、それらの関連を図った指導事例を提示する。

2 思考過程を重視した社会科学習指導の手立て

(1) 資料活用能力(技能)の計画的・系統的指導

思考過程において資料活用能力(技能)は必要不可欠な能力であり、その能力を計画的、系統的に育成していくことが重要であると考ええる。

(2) 問題解決的な学習の段階的指導

意味のある問題解決的な学習を展開していくためには、この学習の意義と方法を段階的に指導し、習熟させていくことが必要であると考ええる。

(3) 問題解決的な学習についてのモデルの提示

(1)、(2)の学習の成果を生かし、単元全体を通した問題解決的な学習を実施する。その過程でどのような方法で学習を展開していくのかというモデルを提示(モデリング)し、思考過程を重視したきめ細かな学習指導を行い、問題解決能力を高めていく。

3 思考過程を重視した社会科学習指導の具体事例

(1) 単元名「身近な地域の調査」

～地理的な見方・考え方の育成をめざして～

(2) 具体的な指導事例の構想

前単元における指導

- 1 資料活用能力の育成
- 2 段階的な問題解決的学習の展開



「身近な地域の調査」

3 問題解決的な学習のモデリング

- 思考過程を重視したきめ細かな指導事例の提示
- 主体的な学習の展開 ○地理的な見方・考え方の育成



次単元における指導

- ・調査の視点や方法の習熟、応用
- ・問題解決能力の伸長 ・地理的な見方・考え方の発展

4 課題設定のプロセスにおけるモデリングの事例

【ねらい】 地形図の活用を通して、自らの力で地域の諸事象の中から地域的特色を追究するための地理的事象を見出し、課題を設定することができる。

＜新旧(約30年前)の地形図の比較＞



【地理的事象を見出す手立て】

- ◇ 時間軸で地域の変容をとらえる。
- ◇ 「○○ができた」「□□がなくなった」等の視点をもとに漠然とした事象の中から意味のある事象をとらえることができる。

※ 全体(市内)との比較を通して空間的な広がりにおける傾向性をとらえ、地理的事象化を図るなどの手法も提示する。

【モデリングの流れ】 課題設定のプロセスにおいて

- (1) 現在と過去及び地域と全体の比較という視点からビニルハウスに注目し、地理的事象として見出す過程を提示する。
- (2) ビニルハウスの出現という事象に意味を見出し、地域的特色をとらえる地理的事象となることをとらえさせる。
- (3) この地域で、「ビニルハウスが多く見られるのはなぜか」という視点で学習課題を設定する。

5 課題追究のプロセスにおけるモデリングの事例

【ねらい】 確かな根拠に基づいて事実を整理し、それをもとに地理的事象の持つ意味をとらえることができる。

【調査活動の視点】

◇ 「環境条件」「他地域との結び付き」「人々の営み」との関連を押さえ、その視点に立って調査、追究を進める。

◇ 事実の把握や社会的事象の意味の発見において思考過程を大切にす。

(比較, 批判的思考, 帰納的推論 等)

【モデリングの流れ】 課題追究のプロセスにおいて

(1) 事実の把握において批判的思考を大切にす。

○ この事実は正しい根拠に基づいているか

例: 「市内でも比較的雪が少なく、温暖」という情報を得たが、本当にそういえるのか、根拠は何か。

批判的思考: 事象を多面的にとらえて、正しい推論と根拠をもとに物事を正確に理解するための思考

(2) 個々の事実をもとに、一般的な傾向性を見つけ、法則性を導き出す。(帰納的推論)

○ 個々の事実から地理的事象の意味を見いだす

例: ハウス栽培には「収入の安定と日本人の食料の確保に貢献する」という意味があることをとらえる。

○ 概念の形成

例: 地域のハウス栽培における事実→地理的事象の意味の発見を通して→概念的知識(近郊農業, 輸送園芸農業等)を獲得する。

※ 課題追究のプロセスにおいて、考え方をきめ細かに指導していくことが大切である。

6 おわりに

以上、問題解決能力の育成を図る三つの考え方とモデリングを中心とした指導事例を示した。これらを計画的に指導し継続していくことによって、問題解決能力が高まり、「確かな学力」の向上につながっていくと考える。

〈参考・引用文献〉

- 1) 中学校社会科のリニューアルと授業デザイン 澁澤文隆編 (明治図書 2002年)
- 2) 新地理授業を拓く・創る 澁澤文隆編 (古今書院 2002年)
- 3) おもしろ思考のラボラトリー 森敏昭編著 (北大路書房 2003年)
- 4) 勉強力をつける-認知心理学からの発想 梶田正巳著 (ちくま新書 1998年)

Ⅲ 理科における思考過程を重視した学習指導の手立て

1 はじめに

本研究の調査結果から、理科教育における課題として、学習内容と日常生活との関わりを深めることや自己表現力、問題解決能力の育成の必要性が明らかになった。

理科の学習指導において、問題解決能力を育成するため、帰納的な思考過程を重視した学習（発見的な問題解決学習：以後発見学習と表記）を中心に授業がなされてきたが、問題点の一つとして体系化、構造化された知識を身に付けさせることが十分にされていないという指摘がなされている。

そこで、「先行オーガナイザ」を用いた「有意味受容学習」を単元のはじめに位置づけ、一般的、抽象的な知識を身に付けさせることで、その後の発見学習や補充・発展学習を充実させることができると考えた。

また、このような演繹的な思考過程を重視した学習を取り入れることで、問題解決能力や自己表現力が高まり、日常生活との関連を深めることができると考えた。

※「先行オーガナイザ」は、学習に先立って提示される一般的、抽象的で、包括的な情報である。

2 演繹的な思考過程を重視した指導の視点

有意味受容学習→発見学習→補充・発展学習という流れで、児童生徒に思考過程を重視した学習を行なわせ、問題解決能力を高める指導の視点は次のとおりである。

(1) 有意味受容学習の流れと指導の視点

学習の流れ



① 課題把握、動機付けの視点

単元全体を見通した課題把握をさせる。単元を学習する目的や学習して何を解明するのかなどを明確に押さえ、知的好奇心を刺激する動機付けをすることが大切である。

② 先行オーガナイザを与える視点

先行オーガナイザは、学習指導要領に示されている「内容」を用いたり、言葉だけではなく演示実験や、図、モデル、資料なども有効である。

③ 学習内容の確認の視点

先行オーガナイザは、その後の発見学習や発展学習の根底となるので、内容を正しく、確実に定着させるため、検証実験等の学習活動を行う。また、具体的な図で表すなど、構造的に概念を捉えさせて、スキーマの形成を図る。

(2) 発見学習における指導の視点

① 有意味受容学習で概念形成が図られているので、「見通しをもった観察実験」ができるように、計画の時間を確保して探究の仕方についての吟味を十分に行わせる。

② ティームティーチングにより、個別指導、グループ指導を十分に行う。

③ 自ら問題を発見し、解決するための情報を収集・処理し、結論を導き出す力を育成する。

④ レポートなどにまとめる活動を通して、思考してきた道筋を振り返らせ、表現力を養う。

(3) 補充・発展学習における指導の視点

① 生徒の習熟度、興味・関心に応じて少人数指導による補充・発展学習を設定し、個に応じたきめ細かな学習を行う。

② 有意味受容学習により生じた余剰時間を利用し、体感や実感を持たせる活動を行う。

③ 既存の知識と発見学習によって得た知識と組み合わせ、自然を総合的に見たり考えたりする力を育成する。

④ ポスターセッション、クロスセッション等の活動を行うことにより表現力の育成を図る。また、学習成果の比較・検討を行って、事象に固有の性質や類似点、規則性を見いだす力を養う。

〈参考・引用文献〉

- 1) 教えの復権をめざす理科授業 川上昭吾著
(東洋館出版社 2003年)

情報活用研究チーム

教育用コンテンツを活用した 授業実践モデルの開発と研究

教育用コンテンツを活用した
授業実践モデルの開発と研究

教育用コンテンツを活用した授業実践モデルの開発と研究

《目次》

I	研究の趣旨	29
II	研究の概要	29
1	授業実践モデルの開発	30
(1)	開発手順	30
(2)	開発された授業実践モデル	31
(3)	授業実践のまとめ	37
(4)	アンケート集計結果(参考資料)	39
2	教育用コンテンツの整備	41
(1)	推奨webサイトの集約, 公開	41
(2)	地域コンテンツの教材化	41
III	研究のまとめ	42

教育用コンテンツを活用した授業実践モデルの開発と研究

情報活用研究チーム

I 研究の趣旨

平成11年10月に策定されたミレニアムプロジェクト『教育の情報化』においては、平成17年度末までに、「すべての学校」の「すべての教室」の「すべての授業」において、「すべての教員」がコンピュータやインターネットを活用できるような状況を実現することを目標として掲げている。そして、この目標に向かって様々な施策を展開していく目的については、コンピュータやインターネットなどの「新しい道具」を使うことによって、これまでも行ってきた「教科書」を用いた「各教科の授業」をすべての子供達にとって「わかるもの」にするということが述べられている。

一方、本県の現状は、平成14年の文科省の『学校における情報教育の実態等に関する調査』によると、ITを活用して授業を実施している教員の割合は、小学校68.8%、中学校49.1%、高校34.3%、特殊学校46.6%という結果となっており、ミレニアムプロジェクトの「すべての教員」という目標数字にはまだまだ及ばない現状にある。

また、平成14年度に当センターで実施した『福島県の情報教育の実態等に関する調査』において、先生方から希望の多かったインターネットで提供して欲しい教育情報に関する回答は、下記の通りであった。

	小学校	中学校	高校
ITを活用した教科の授業実践モデル	○	○	○
ITを活用した総合学習の授業実践モデル	○	○	○
地域素材	○		
評価基準		○	
教科「情報」の教材			○

※○は回答の多かったもの

これらのことを踏まえ、14年度研究では、福島県独自の「地域資料」の収集及び12教科の授業実践事例「教材レシピ」の開発を行ったが、授業で活用しやすくするための地域資料の分類や、各校種・各教科における幅広い授業実践事例をさらに充実させることが課題として残った。

そこで、今年度については、各校種・各教科における効果的なIT活用方法を授業実践を通して研究し、ITを活用したわかる授業を行う上でより参考となるような授業実践モデルを開発することにした。

II 研究の概要

県内において、ITを活用して授業を実施している教員の割合が、100%に遠く及ばない理由としては、「ITをうまく活用して授業を実践する方法がわからない」「教育用コンテンツやWebサイト等の情報がまだまだ不足している」などといったことが考えられた。

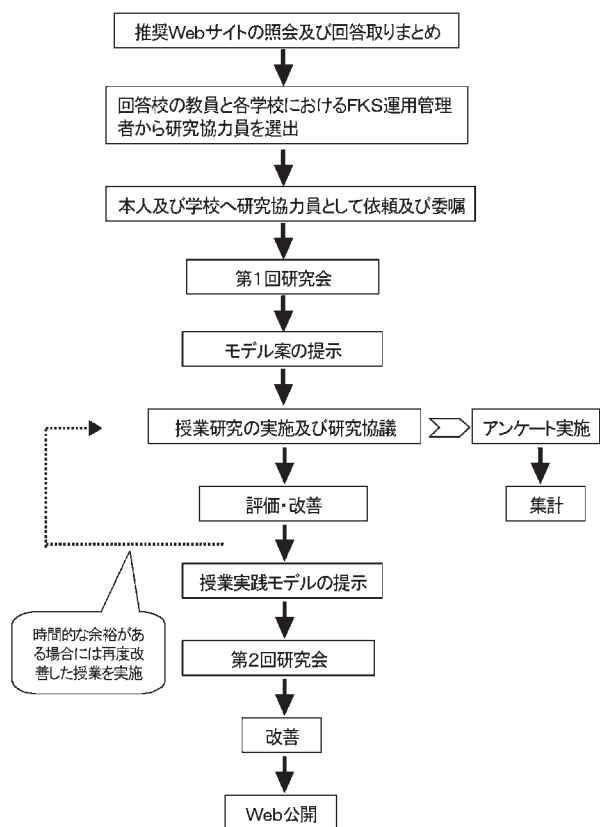
そこで、授業実践モデルについては、県内全ての教員が、ITを活用した授業を実施するのに参考にできるようにと考え、全ての校種、全ての教科におけるモデルの開発を目標とした。また、活用方法については、多数の方法があることも考えられたため、1単元1指導案に限定せず、1単元複数指導案も考慮しながら開発を行った。

さらに、授業実践モデルの開発と同時に授業で活用できるWebサイトなどの、手軽に利用できる教育用コンテンツの集約、分類、整備を行い、このことを通して各教科における効果的なIT活用方法の把握に努めるとともに、これら整備されたコンテンツを利用したモデル開発も視野にいれながら行った。

1 授業実践モデルの開発

(1) 開発手順

開発手順としては、以下のような手順で授業実践モデルの開発を行った。



授業実践モデルの開発においては、各教科におけるモデルの提案と実際に学校で実践してくれる先生方の協力が不可欠なため、年度初めに事業の一つとして行った「授業で活用できる推奨Webサイト」を集約した際の回答者及びふくしま教育総合ネットワーク（以下FKS）を利用している各学校の運用主任の中から、校種・教科のバランスを考えた上で35人の研究協力員を選出して依頼した。

選出の理由は、推奨Webサイトの回答者やFKS運用主任であれば、日頃よりITを活用した授業を実施している可能性が高いため、参考となる授業実践モデルを開発してもらえないのではないかと考えたからである。

また、研究協力員の内訳は、以下の通りである。

【校種内訳】

小学校	13名
中学校	12名
高等学校	6名
盲・聾・養護学校	4名

【教科内訳】

国語	3名
社会・地歴公民	6名
算数・数学	5名
理科	5名
保健体育	2名
英語	3名
技術家庭	3名
美術	1名
農業	1名
工業	1名
商業	1名
養護	3名
その他	1名

この研究協力員は、県内各地から選出したため、たびたび研究会を重ねることは困難であった。そのため、研究会は2回だけとし、35人の研究協力員と情報活用研究チームのメンバー4人をメーリングリスト^{*1}に登録し連絡事項やモデル開発上の意見等については、メール上で全員が共有して研究を進めていくことにした。

第1回研究会では、モデル開発基準及び開発までの方法等について説明を行い、共通認識の基に開発を行うこととし、第2回研究会では、授業研究を実施した研究協力員の授業実践モデルの紹介（中間報告）と授業実践モデルの形式等について協議を行った。

① モデル案の提示，検討

モデル案については、単元、テーマ、活用方法を、各研究協力員が提案し、事前にメールで情報活用研究チームに送付することにした。この送付されたモデル案を、情報活用研究チーム指導主事が、教科書、学習指導要領等から内容やIT活用上の問題点を検討した。

② 授業研究の実施，協議

授業研究については、平成16年2月末日までに、最低1回実施してもらうこととし、実施教科は、中学校・高校では、研究協力員の専門教科、小学校や

*1 メーリングリスト インターネット上で特定のメンバーに一斉同報電子メールを送るシステム。

盲・聾・養護学校においては、担当している教科の中から選択してもらった。

授業研究日には、センターから指導主事が訪問し授業参観するとともに、ビデオ撮影を行った。

授業研究後には、センター指導主事が、IT活用に関して評価をするとともに、改善点等について協議を行った。また、研究協力員に時間的余裕がある場合は、改善案で再度授業研究を実施してもらうことにした。

なお、授業実践モデルに関しては、センターと研究協力員とが協議を重ねた上で、完成することにした。

授業参観における観点や項目については、以下の通りである。

- 単元全体の流れ、目標
- IT活用の効果
- 授業における児童生徒の反応（主体的に活動しているか）
- ITをどの様に活用しているか

③ アンケートの実施

対象児童生徒に対して、下記のような項目でアンケートを実施した（主な項目と集計結果については後述する）。今回の授業研究は全校種にわたるために、小学校版と中学校・高校版の2種類を用意し、小学校については、記述を少なくして選択式に、中学校・高校については、記述式で答えるようにした。

(2) 開発された授業実践モデル

14年度は「教材レシピ」の形式で開発を行ったが、今年度については、単元全体の計画を示し、「どの単元」の「どの場面」において、「どんな方法」でITを活用したのかが把握できるように形式の改善を図った。

また、どのように授業展開したのかがよりわかるように、授業風景を撮影したビデオをクリップビデオとしてはり付けることにした。

昨年度の教材レシピ形式と授業実践モデル形式を以下に示す。

教材レシピ形式



福島教材レシピ

単元名(タイトル)					
校 種	教科	学年	時間		
授業の概要					
単元の目標					
情報教育の目標					
活用コンテンツ					
実践のポイント					

● 学習の流れ

学習段階	児童・生徒の学習活動	指導上の留意点(※詳細の観点)
導 入		
展 開		
結 束		

授業実践モデル形式

授業実践モデル

- 1 学年
- 2 教科・単元名
- 3 単元目標
- 4 単元計画

指導計画	児童・生徒の活動	指導上の留意点

5 IT活用の目標

6 活用コンテンツ

【単元計画】

単元（小単元）の時間配分を記述し、それぞれの時間の児童・生徒の活動と指導上の留意点について、簡単に記述をした。

また、ITを活用した時間帯については、「IT活用」と記述するようにした。

【IT活用の目標】

IT活用のねらいや期待できる効果等について記述した。

【活用コンテンツ】

授業に活用したコンテンツがわかるようにURL^{*1}やソフト名等を記述した。

【クリップビデオ】

- ・肖像権に配慮するようにした。
- ・授業のポイントとなる部分を抜粋、編集して、おおよそ90秒以内にまとめた。
- ・どの学校においても参照が可能なようにMPEG 1^{*2}に変換した。

開発された授業実践モデル一覧とモデル紹介（小・中・高1校ずつ）を以下に示す。

教科	学年	単元名	分類	学校名	氏名
総合学習	5年生	自分の町を見直そう	①	福島市立福島第四小学校	富田 元久
体育	5年生	跳び箱運動	②③	福島市立三河台小学校	高木 正英
算数	6年生	直方体と立方体	②	福島市立森合小学校	羽染 聡
国語	6年生	言葉の由来	①	福島市立松川小学校	三浦 正彦
総合学習	6年生	「少年A」について考えよう	①⑤	国見町立大木戸小学校	吉田 聡
体育	6年生	病気の予防	①	伊達町立東小学校	青柳 俊宏
総合学習	4年生	安積疎水映画製作プロジェクト	⑥	郡山市立芳山小学校	角田 雅仁
社会	4年生	昔のくらし	①	郡山市立朝日ヶ丘小学校	長壁 秀和
総合学習	6年生	学校紹介のコマーシャルをつくろう	⑥	泉崎村立泉崎第一小学校	小野 浩司
特別活動	3年生	正しく手をあらおう	②	喜多方市立第一小学校	小野 明彦
理科	4年生	もののあたたまりかた	②	喜多方市立第一小学校	酒井 康雄
社会	5年生	わたしたちの生活と情報	①⑤	喜多方市立第二小学校	佐藤 明
社会	2年生	日本の自然環境	②	福島市立北信中学校	島田 祥司
数学	3年生	三平方の定理	②	福島市立茂庭中学校	永倉 久
技術・家庭	2年生	エネルギー変換とその利用動きを伝えるしくみ	②	桑折町立醸芳中学校	福地 淳一
選択	1年生	「平面図形」	①⑤	岩代町立小浜中学校	三津間勝彦
技術・家庭	2年生	わたしたちの消費と環境	①②	岩代町立岩代中学校	千代田幸子
国語	3年生	わたしのアルバム	①	郡山市立御館中学校	二瓶 英俊
社会	1年生	身近な地域を調べよう	①⑤	郡山市立郡山第三中学校	大橋 克全
英語	3年生	Reading Plus2 The Fall of Freddie the Leaf	①②	郡山市立安積中学校	二瓶 浩治

*1 URL Uniform Resource Locatorの略。インターネットのサービスの所在地を表記する方法。アクセス方式、ドメイン名、パス名を並べて表記する。

*2 MPEG 1 MPEGはデジタル動画を圧縮する技術。MPEG 1は再生品質がVTR並みをいわれている。

理科	3年生	自然と人間	①⑤	小野町立浮金中学校	金子 伸之
社会	2年生	世界からみた日本の産業地域	①	小野町立浮金中学校	吉田 泰作
技術・家庭	1年生	コンピュータの機能を利用してTシャツデザインを製作しよう	⑥	会津若松市立一箕中学校	小野寺光喜
農業	3年生	造園樹木の手入れと管理	①	県立安達東高等学校	斎藤 隆一
数学	3年生	ベクトル	②	県立須賀川桐陽高等学校	水野 隆文
工業	2年生	溶接	①②	県立白河実業高等学校	遠藤 進一
理科	3年生	植物の生活	①	県立坂下高等学校	高橋 宏之
英語	1年生	分詞	②	県立平商業高等学校	佐藤 珠恵
社会	中学部2年	鎌倉仏教	②	県立盲学校	遠藤 宣雄
家庭	高等部2年	献立と調理～お弁当の献立～	①②	県立須賀川養護学校	斎藤 成子
自立活動	小学部	本校のともだちと話そう～TV会議システムを使って～	④	県立須賀川養護学校医大分校	佐々木孝幸
自立活動	高等部2年	2年修学旅行のオリジナルアルバムをつくらう	⑤	県立郡山養護学校	丹野 勝彦

分類項目 ①調べ型 ②シミュレーション型 ③自主学習型
④意見交換型 ⑤発表型 ⑥複合型

授業実践モデル①（小学校）

国見町立大木戸小学校 吉田 聡

1 小学校6年

2 総合的な学習「少年Aについて考えよう」

3 単元目標

自由の大切さを理解し、規律ある行動をしようとする心情を育てる。

4 単元計画

- | | |
|--|--------|
| (1) 少年犯罪に対する社会の動きや過去における少年犯罪を調べ、情報を収集する。 | ・・・1時間 |
| (2) 収集した情報から考えられることを意見としてまとめる。 | ・・・1時間 |
| (3) 道徳新聞を作成し、友達に情報を発信し、紙上での意見交流を行う。 | ・・・1時間 |
| (4) 友達と意見の交流を行い、考えを深める。 | ・・・1時間 |
| (5) 保護者や先生に自分の考えを発信し、感想を求める。 | ・・・1時間 |

指導計画	児童・生徒の活動	指導上の留意点
1時間	1 インターネットで少年犯罪について調べ、情報を集める。(※IT活用)	・少年犯罪の新聞記事を提示し、社会事象についての関心を高める。提示した以外にも少年犯罪がないかどうか投げかける。 ・少年犯罪の事実や少年犯罪に対する周囲の考え、意見を収集させる。
1時間	2 「こんな考えあったよシート」に発見したことを整理する。(※IT活用)	・情報をうのみにせず、自分の考えと違う情報に触れたときに、「こんな考えあったよシート」に記入させ、自分の考えとどこが違うのかはつきりさせるようにする。 ・インターネット上の出典・URLを明らか

		にさせ、情報の共有に役立たせる。 ・多くの少年犯罪があることを知り、どうしてこのような事件が起こるのか疑問を持たせるように投げかける。
1時間	3 前時までに得られた情報から「道德新聞」を作成する。(※IT活用) 4 自分なりの情報を発信し、周囲の児童の考えを集める。	・「こんな考えあったよシート」をもとに道德新聞を作成することを通して、情報を整理させる。 ・短時間で整理できるよう道德新聞サンプルを提示し、作成のイメージを持たせる。 ・友達の道德新聞を読み、自分の感じたことを付箋紙に書いて貼り付けるように指示する。 ・友達の考えのよさを認めさせるとともに、自分の考えとの違いを明らかにしながら、意見をしっかり持てるよう投げかける。
1時間	5 「近頃の少年犯罪についてどう思うか」ということについて意見を交流し合う。 ・自分はどう思うか。 ・友達はどんな考えか。 ・違いは何か。 ・どんな感想を持ったか。 6 感想シートに授業での感想をまとめる。	・前時までに作成した「こんな考えあったよシート」、道德新聞、付箋紙などから、観点に沿って意見を交流させる。 ・教師は、児童と反対の立場になって意見交流に参加し、児童の考えを深められるようにする。 ・授業を振り返り、自分の感想や考えを書かせる。
1時間	7 保護者や先生に自分の考えを発信し、学習のまとめをする。(※IT活用)	・自分の両親やお世話になった先生に電子メール等で学習したことや自分の考えの変容がわかるように発信させる。 ・事前に保護者や先生にはメールが届く旨を知らせて、児童への励ましをお願いしておく。

5 IT活用の目標

- ・ITを活用した活動を通して意欲を持って調べ、様々な考えの中から自分の判断材料となる情報を主体的に選択し、考えを構築できるようにする。
- ・情報を、インターネットを利用して効率的に検索できるようにする。
- ・新聞等の作成に当たっては、利用素材の出典を明らかにして自分の考えを書く態度を養う。

6 活用コンテンツ

各新聞社サイト

授業実践モデル②（中学校）

小野町立浮金中学校 金子 伸之

1 中学校3年

2 理科「自然と人間」

3 単元目標

自然環境のつり合いと人間生活とのかかわりあいについて考察し、自然環境を保全することの重要性を認識できるようにする。

4 単元計画

- | | |
|-------------------------|------------|
| (1) 「自然と人間の関わりについて調べよう」 | ・・・ 1 時間 |
| (2) グループごとのテーマによる調べ学習 | } ・・・ 4 時間 |
| (3) グループ内討議 | |
| (4) 発表の準備 | |
| (5) 発表 | ・・・ 1 時間 |
| (6) 感想や考えをまとめる | ・・・ 1 時間 |

指導計画	児童・生徒の活動	指導上の留意点
1 時間	1 テーマ確認 「自然と人間の関わりについて調べよう」 ・自然が壊されていく現状 ・自然を守る努力の現状	・テーマが大きくなりすぎないように、2つの観点から調べ学習をさせる。 ・自然環境に興味を持ち、自分のテーマを考えて計画を立てることができるように援助する。
	2 大グループ、小グループの編成	・2つの観点から大グループに分け、またそのグループの中で2～3人のグループをつくり、全員発表を基本とする。
	3 調べ学習 ・それぞれのテーマについての例を調べ、小テーマの見通しを持つ	・この時間を使って自分たちの小テーマについて詳しく考えるようにする。
	4 グループ内のテーマの決定 ・グループ内での確認と情報交換	・グループの中でさらに詳細なテーマについて考える。 ・テーマが決まらなかったり自分が伝えたいことが決まらない生徒はリーダーを中心に話し合いを行って方向性を見極めさせる。
4 時間	5 調べ学習（※IT活用） ・インターネットの利用	・必ず調べたことは保存、ファイリング、メモをすることを確認する。
	6 グループ内討議	・グループ内で必ず、進行状況を確認して、発表のための見通しを持たせる。
	7 発表の準備 ・資料の整理 ・プレゼンテーションの作成	・自分の調べたことをファイルやプレゼンテーションにまとめさせる。 ・グループリーダーが一人一人のプレゼンテーション等を確認して、助言ができるようにする。
1 時間	8 発表をする（※IT活用） (1) 発表時の注意点を聞く ・発表の方法と時間（5分+質疑1分） ・発表の評価についての方法 (2) グループごとの発表を聞く (3) 他の発表の評価をする (4) 教師からの感想と評価を聞く	・時間を計る係を交互に行わせる。 ・小グループと教師4人で審査を行う。 ・自分の調べたことをわかりやすく発表するとともに、他人の発表をきちんと聞き取り、評価できるようにする。 ・環境問題や保全活動について、科学的に分析して発表できるようにする。
	9 発表を聞いての感想や考えをまとめる ・感想 ・自然を残すために必要なこと ・私たちがすぐにできること	・人間の生活が自然界とのつり合いの中のどの部分に影響を与えているか考えることができるようにする。 ・自然環境の保全に意欲的に取り組もうとする態度が育成されるように支援していく。

5 IT活用の目標

- ・テーマ設定にあたり，生徒の多様なニーズに応えられるようにするために，ネットや新聞，図書館の文献等の活用を促すようにする。また，インターネット情報の信憑性を確かめるため，他の文献等を参考にしながら検証するように指導することで必要な情報を主体的に選択できる能力を育てる。
- ・発表時にプレゼンテーションの内容や技能などの評価をお互いに行うことによって，技能・表現力を高める。
- ・グループリーダーを設定し，テーマの決定・プレゼンテーションの作成等において，つまづきを克服し，自分たちで課題を解決できる能力・態度を養う。

6 活用コンテンツ

インターネット上のWebサイト

授業実践モデル③（高等学校）

福島県立平商業高等学校 佐藤 珠恵

1 高校1年

2 英語分詞

3 単元目標

- ・名詞を修飾する現在分詞・過去分詞の用法を正しく理解する。
- ・各文型（S＋V＋C（分詞），S＋V＋O＋C（分詞）等）の分詞の用法を理解する。
- ・分詞構文の文型，用法，表現を学ぶ。

4 単元計画

- | | | |
|----------------------------|-----|-----|
| (1) 名詞を修飾する現在分詞・過去分詞 | ・・・ | 2時間 |
| (2) S＋V＋C（分詞） | } | ・・・ |
| (3) S＋V（知覚動詞・使役動詞）＋O＋C（分詞） | | |
| (4) 分詞構文の形と意味 | ・・・ | 2時間 |
| (5) 分詞構文の受動態・完了形など | } | ・・・ |
| (6) その他の分詞構文 | | |

指導計画	児童・生徒の活動	指導上の留意点
2時間	1 導入（※IT活用） ・分詞とは何か，名詞を修飾する現在・過去分詞を学ぶ。	○名詞を修飾する際の，分詞の前置修飾・後置修飾の区別，現在分詞・過去分詞の意味の違いを確実に定着させる。
3時間	2 S＋V＋C（分詞）	○分詞を補語にとる文型とその意味を理解させる。
	3 S＋V（知覚動詞・使役動詞）＋O＋C（分詞）	○不定詞で学んだ知覚動詞と使役動詞を復習し，分詞を補語にとる場合との違い，意味を理解させる。
2時間	4 分詞構文の形と意味 ・分詞構文の基本的な形と意味について学ぶ。	○分詞構文の基本的な用法を理解させ，分詞構文を作れるようになり訳せるようにする。

2時間	5 分詞構文の受動態・完了形	○受動態・完了形の復習を行い，その分詞構文について理解させる。
	6 その他の分詞構文 ・分詞構文を使った慣用表現を学ぶ。 ・付帯状況を表す分詞構文を学ぶ。	○定着させたい各慣用表現については例文を示し，確実に理解させ使えるようにする。 ○付帯状況の意味を正しく理解させ，また現在分詞と過去分詞をとる場合の違いが分かるようにする。

5 IT活用の目標

・文法事項を視覚的に説明することで生徒の理解を容易にし，イメージを持ちづらい文法をより分かりやすく提示する。

・マルチメディアボード・生徒用モニターを利用し，あらかじめ用意したプレゼンテーションを使って説明することで，授業の効率化・スピードアップを図る。

6 活用コンテンツ（使用機材・ソフト）

マルチメディアボード生徒用モニター

パワーポイントメディアサイト

(3) 授業実践のまとめ

授業研究を通してみてITを活用した授業形態を6つの型に分類した。以下，6つの形態と，授業研究を教科ごとに分類したものが表1である。

① 調べ型

テーマ等について調べまとめる時に，インターネット等を利用する形態

② シミュレーション型

空間図形や実際に目にし難い現象などの学習等に動画やシミュレーション等を利用する形態

③ 自主学習型

ネットワーク上に蓄積されたコンテンツ等を個別学習などに利用する形態

④ 意見交換型

教科書に載ってないような専門的な分野について，大学教授などの意見を聞いたり，遠隔地の生徒や他校の生徒との意見交換にTV会議システムやメール等を利用する形態

⑤ 発表型

調べてまとめたことをクラスや外部に発表するときに，プレゼンテーションソフトやWebページ等を利用する形態

⑥ 複合型

デジタル機器を使用したり，上記①～⑤が総合的に組み込まれている形態

表1 教科ごとの分類

教科 型	国 語	社会 ・ 地歴 公民	算 数 ・ 数 学	理 科	保 健 体 育	英 語	技 術 ・ 家 庭	農 業	工 業	自 立 活 動	総 合 学 習	特 別 活 動
調 べ 型	3	4	1	2	1	1	2	1	1		2	
シミュレーション型		2	3	1	1	2	3		1			1
自主学習型					1							
意見交換型										1		
発 表 型		2	1	1						1	1	
複 合 型							1					2

これら6つの形態について、授業研究や協議を通して確認できた効果と授業実施上の配慮事項についてまとめると次のようになる。

型	確認できた効果	授業実施上の配慮事項
調べ型	<ul style="list-style-type: none"> ○「多くの情報」「最新の情報」「詳細な情報」「具体的な情報」は興味関心や授業に対する意欲をより高めることができた。 ○調べたいことが短時間で探し出すことができ、個々の児童生徒のペースでまとめさせることができた。 ○児童生徒が興味をもった多様なテーマ設定に対応できた。 ○主体性が育成できた。 ○課題設定力、調査研究力、企画立案力の育成につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○下記の点に配慮することで、時間の短縮になり、円滑に授業を展開できる。 <ul style="list-style-type: none"> ・検索キーワードの絞り込み ・リンク一覧、お気に入りへの登録 ・調べたことをまとめるワークシートの作成 ○インターネットからの情報は全て正しいと限らないので、複数のサイトから情報を得たり、文献と照らし合わせるような指導が必要である。 ○情報から自分なりの考えを持つ指導が必要である。 ○テーマを身近な事柄と関連付けることで、児童生徒がより関心を高めることができる。 ○調べることへの動機づけと焦点化が必要である。 ○調べるだけでなく、考察する時間を十分にとる必要がある。 ○テーマによりグループ化することで、パソコンの操作が苦手な生徒にも意欲を喚起できる。 ○調べた結果、資料が多すぎたり、児童生徒にとっては理解しにくいものもあるので、資料を限定して活用することが大切である。 ○児童生徒のスキルについて把握しておくことが必要である（教科間連携）。
シミュレーション型	<ul style="list-style-type: none"> ○以下について効果が確認できた。 <ul style="list-style-type: none"> ・空間図形等の概念理解 ・実習などの作業工程の確認 ・時間的、季節的に直接観察できないような事物現象の確認 ・自然災害や歴史的背景の提示 ○児童生徒操作用のパソコンを用意しておくことにより、わからないことを何度でも確認でき、理解を深めることができた。 ○シミュレーションによる計算と、手計算を併用することで個々の能力に対応できた。 ○有効なWebサイト等を活用することにより、ソフト開発等の手間が省け、コスト削減にもつながった。 ○ノートパソコンにWebサイトのコンテンツをダウンロードしたり、キャッシュ^{*1}をかけた状態で教室にもちこめば、LANが繋がっていない教室でも利用が可能となった。 ○養護学校における活用では、学習障害の改善につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○Webによっては使用許諾が必要なものがある。 ○Webサイトの有効性を事前に検証しておく必要がある。

*1 キャッシュ Webブラウザが一度読み込んだWebページを一時的に保存し、表示を高速にするしくみ。

型	確認できた効果	授業実施上の配慮事項
自主学習型	○自分のペースで学習に取り組ませることができた。	○実技を伴う教科で活用する場合、留意点のみに集中して全体的な動きに思いが至らなくなってケガをする危険性があることも注意して進める必要がある。
意見交換型	○養護学校等においてTV会議システムなどを利用した交流授業では下記の効果があった。 ・対人関係の不安や緊張の緩和 ・自立活動の支援 ・自己表現の確立	○相手方へ、意志が伝わる話し方を指導したり、フリップなどを活用すると互いの意志が伝わりやすい。 ○緊張を和らげるため、児童生徒に絶えず話しかけを行う必要がある。 ○時間調整や機器設定など事前の準備と動作確認が大切である。
発表型	○自主的活動の支援や学習についての意欲の向上につながった。 ○調べ上げたことをまとめ上げる力の育成につながった。 ○伝え合う力、技能、表現力の育成につながった。	○情報の信憑性や著作権への配慮を指導する必要がある。 ○クラスメイト等から意見・評価を聞いた後に、再考察の時間を持つ必要もある。 ○掲示板等を利用して外へ発信した場合、児童生徒を中傷するような意見が書き込まれることもありうるので、保護者や地域の方だけに発信するなどの配慮が必要である。 ○個々の生徒のIT活用能力に対応するために、グループ編成といったことも考慮する必要がある。
複合型	○情報活用能力の育成につながった。 ○多様な表現力の育成につながった。	○クラス全員が意欲的に参加できるような授業計画の組み立てに配慮する必要がある。 ○個々の児童生徒のスキルについて、把握しておく必要がある。

完成した授業実践モデルについては、校種や教科で検索しやすいように分類し、著作権の確認を行った上で、センターのWebページから公開する予定である。

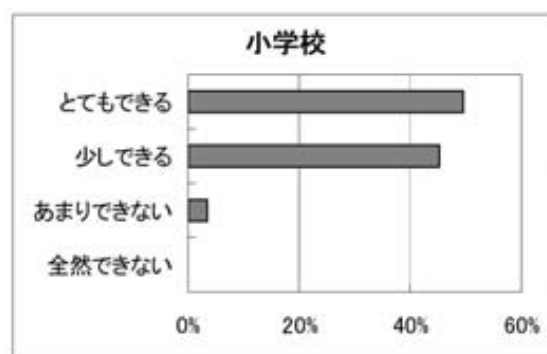
(4) アンケート集計結果（参考資料）

① 生徒アンケートより

今回、授業研究対象児童生徒数は、小学校368人、中学校254人、高校122人であった（盲・聾・養護学校については、小・中・高に含）。これらの児童生徒については、ITを活用した授業がどのようなものかイメージできる児童生徒と考えてよい。

アンケートの中で、コンピュータを活用した授業について聞いてみた。これについて、児童生徒がどのように思っているかは、参考になると考えられるので、以下に集計結果を示す。

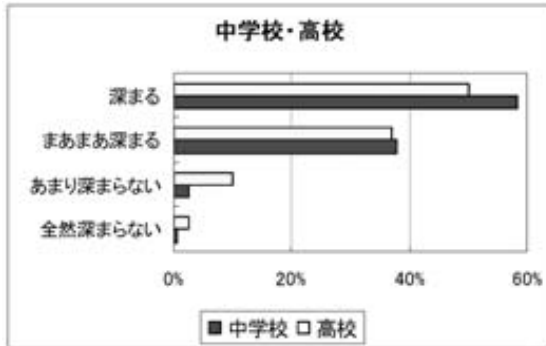
a コンピュータを使うと一生懸命学習できますか？



授業研究対象児童の9割以上が、コンピュータを活用すると授業が一生懸命できると答えている。一生懸命できる理由は、「コンピュータを使うとわからないことが調べられるから」との回答が最も多かった。また、できない理由では「コンピュータの操作がわからないから」と

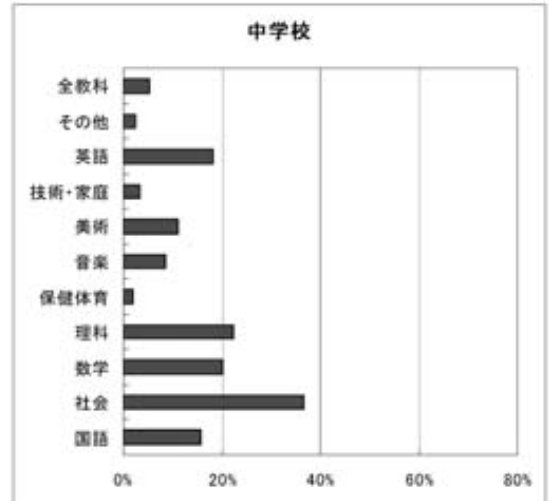
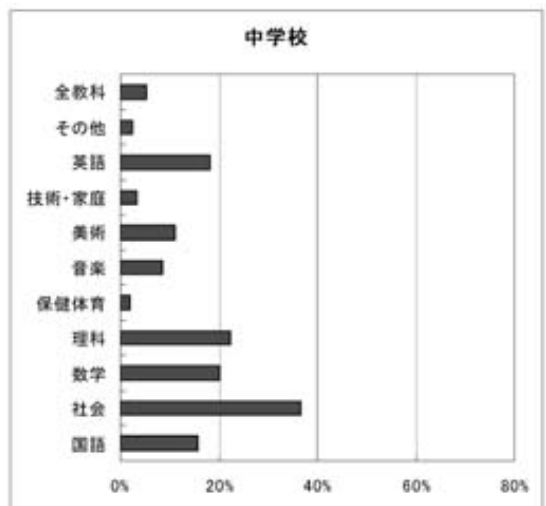
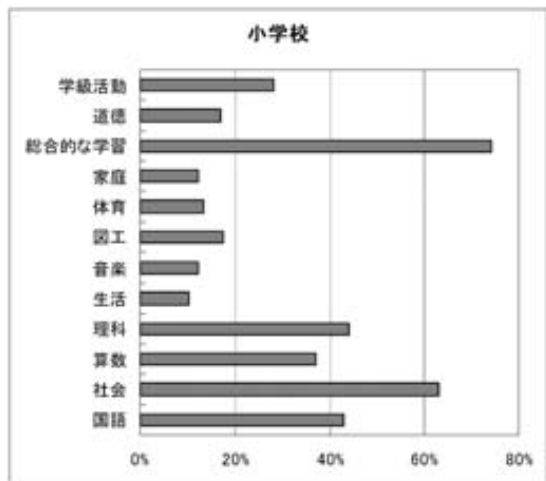
の回答が最も多かった。

- b コンピュータを利用した授業を受けると理解が深まると思いますか？



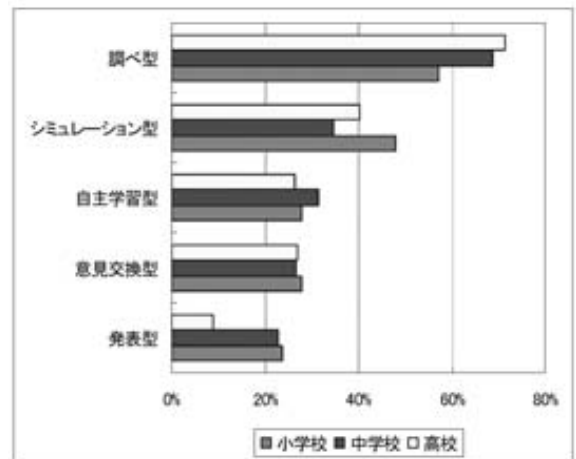
中学校・高校の生徒の8割以上が、コンピュータで理解が深まると考えている。

- c ITを活用した授業で行って欲しい教科は何ですか？



中学校・高校においては、回答方法を記述式にしたため、小学校に比べると回答数が少なかったが、全校種で社会（地歴・公民）の希望が多かった。これは、統計資料から産業や地理的特色の考察を行うなどの学習が多いためと考えられる。また、小学校の国語が、他の校種に比べて希望が多いのは、3年生からテーマについて課題解決型の学習が増えることが影響していると考えられる。

- d ITを活用した授業形態で行って欲しいのは何ですか？

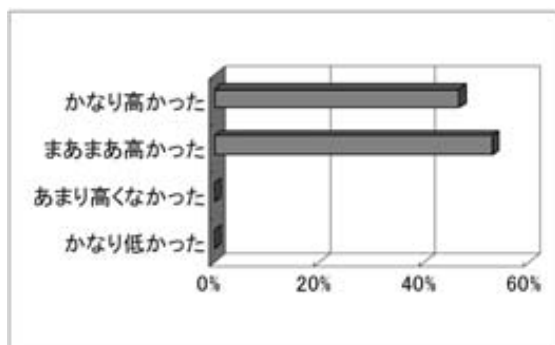


授業形態の希望としては、3校種ともに調べ学習にIT活用を希望している児童生徒が多かった。また、シミュレーションに対する希望も多かったが、これは、授業にアニメーションや動画を取り入れて欲しいと思っている児童生徒が多いことを示している。

② 研究協力員のアンケートより

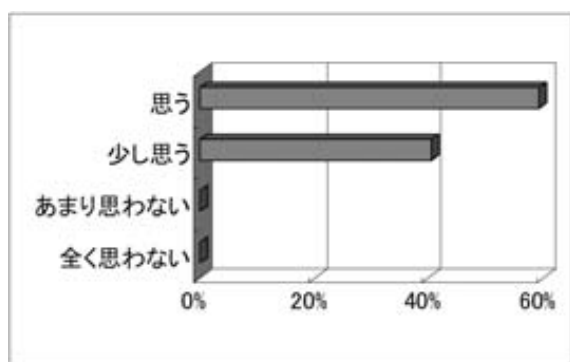
I Tを活用した授業を行う上で、今後参考になると思われる回答結果について、次に示す。

- a 普段の授業に比べて、実際にI Tを活用した授業に対する生徒の興味・関心・意欲は高かったと思いますか？



興味関心・意欲が高かった理由としては、コンピュータを活用した視覚的教材で、イメージがふくらんだためという理由が多かった。

- b 教育用コンテンツは、生徒自ら学ぼうとする意欲の向上に有効だと思いますか？



教育用コンテンツについては、研究協力員全員が意欲の向上に有効であると答えている。

2 教育用コンテンツの整備

(1) 推奨Webサイトの集約、公開

FKS参加校359校の中から、利用率の高い243校を抽出して、照会を行い、「教科の学習に活用できるWebサイト」を収集した。収集したWebサイトについては、宗教的、政治的、商用的な

色彩の濃いもの及び生徒に害を与えると考えられるものは除くという採択基準に従って1件ずつ検証を行った。

採択されたWebサイトについては、各教科と総合的な学習及びその他に分類するとともに、それぞれのWebサイトには、どのようなサイトかがわかるように簡単な説明をつけた。さらに、トップページにはサイト作成までの経緯と追加募集のコメントをいれ、メールで集約することにした。

これによって、約800件のWebサイトを公開できた。

<http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/web/index.html>

教育センターWebページで公開している推奨Webサイト

推奨Webサイト

学級	国語	算数	理科	社会	英語	音楽	体育	美術	総合
小学校	国語	算数	理科	社会	英語	音楽	体育	美術	総合
中学校	国語	数学	理科	歴史・地理	英語	音楽	体育	美術	総合
高等学校	国語	数学	理科	歴史・地理	英語	音楽	体育	美術	総合
職業・専門学校	国語	数学	理科	歴史・地理	英語	音楽	体育	美術	総合
総合学習	国語	数学	理科	歴史・地理	英語	音楽	体育	美術	総合
総合学習(その他)	国語	数学	理科	歴史・地理	英語	音楽	体育	美術	総合
その他	国語	数学	理科	歴史・地理	英語	音楽	体育	美術	総合

このWebサイト集約は、県内の先生方より推薦いただいたものを確認の上で集約しました。掲載された各サイトは、必ずしも最新の情報とは限りません。また、リンク切れ等の場合は、お知らせいたします。

Webサイト集約 E-mail



中学校

国語	名称	コメント	対象
1	●岡山県情報教育センター	教育用コンテンツ集約が、使いやすいよう集約されています。活用して頂きたいと思います。	1年
2	●広島県立中央総合センター	県立の内部、授業や学習の中心の、学習にまつわる情報、行事について紹介しています。	1年
3	●広島県立	県立学習に、活用されたサイトを集約しています。	1年
4	●岡山県立総合センター	岡山県立総合センターの内部が紹介されています。	1年
5	●広島県立総合センター	県立の内部、授業や学習の中心の、学習にまつわる情報、行事について紹介しています。	1年
6	●広島県立総合センター	県立の内部、授業や学習の中心の、学習にまつわる情報、行事について紹介しています。	1年
7	●広島県立総合センター	県立の内部、授業や学習の中心の、学習にまつわる情報、行事について紹介しています。	1年
8	●広島県立総合センター	県立の内部、授業や学習の中心の、学習にまつわる情報、行事について紹介しています。	1年
9	●広島県立	県立の内部、授業や学習の中心の、学習にまつわる情報、行事について紹介しています。	1年
10	●岡山県立総合センター	岡山県立総合センターの内部が紹介されています。	1年

(2) 地域コンテンツの教材化

Webサイトで公開*済みの14年度までに収集した資料(印刷物13,000頁、画像35,000点、映像4,900分)を、利用者が検索がしやすいようにするためにカテゴリー及び校種・教科ごとに分類を行った。

カテゴリーごとの分類については、教科書や

*1 Webサイトで公開 <http://www.db.fks.ed.jp/index.html>

副読本等の学習内容と提供資料を照らし合わせ、以下の7つのカテゴリーを決定し、このカテゴリーで検索できるように教育センターが分類を行った。

【7つのカテゴリー】

「施設」、「自然・風景」、「産業」、「歴史」
「民俗・文化」、「災害」、「その他」

校種・教科ごとの分類については、資料数が膨大なため、ボランティアの協力を得て分類することにした。ボランティアについては、公募することも検討したが、県に登録されている教育ボランティア*1の中から教員免許を有する4人の方に協力していただくことにした。期間は、6月～12月までの週1、2回程度の割合で、分類してもらった。分類方法については、資料をパソコンに表示し、活用できると考えられる校種、教科を資料一覧に記入してもらうという方法で行ってもらった。

今回分類したものについては、サムネール*2一覧を作り替えて、公開する予定である。既に公開されたものについては、モニター（研究協力員）による評価・改善を行ってきた。

カテゴリー及び校種・教科における分類イメージ



Ⅲ 研究のまとめ

昨年度の課題をふまえ、今年度の研究については、各校種・教科におけるモデルが開発できるように、研究協力員の先生方とともにITを活用した授業実践モデルの開発を行ってきた。その結果、32例の授業実践モデルを開発、整備することができた。また、県内の先生方やボランティアの方々の協力により、推奨Webサイト等の教育用コンテンツの分類・整備もできた。

今後は、これら整備された各種コンテンツを参考にITを活用した授業がさらに推進されていくことが望まれる。しかしながら授業研究で各研究協力校を訪問する中で、学校によってIT環境にかなり差があることや「ITを活用した授業は準備が大変である」と思っている先生が少なくないという学校の実態に直面することが多かった。

2005年までに、県内の全ての教員がITを活用した授業を実践できるようにするという目標に近づくためには、先生方がITを活用することで、わかりやすい授業の設計や展開が楽になるという環境にしていくことが大切である。そのためには、授業に役立つソフトや活用できるWebサイトについて、今後も継続して整備・拡充を図るとともに、県内に広くPRしていく必要があると考えている。

さらには、センターでの研修と連携して、「手間がかからず」「コストがかからず」「環境に左右されない」「是非やってみたい」と思うような授業モデルを拡充し提示していく必要があると考えている。

〈参考・引用文献〉

- 1) 「ミレニアムプロジェクト」により転機を迎えた「学校教育の情報化」 (文部省学習情報課 平成12年)
- 2) ITで築く確かな学力～その実現と定着のための視点と方策～ (初等中等教育におけるITの活用の推進に関する検討会議報告書 平成14年)

*1 教育ボランティア 県内の地域センター(教育事務所)のコーディネーター(指導主事等)が中心となって、人材募集、発掘、登録されたボランティア。
*2 サムネール 画像の縮小見本。

教育調査チーム

「ふくしまの学習意識」に関する調査研究

「ふくしまの学習意識」に関する調査研究

「ふくしまの学習意識」に関する調査研究

《目 次》

I 研究の趣旨	43
II 研究の概要	43
1 調査研究内容	43
2 調査研究方法	43
3 調査研究の実際	43
4 調査研究結果	44
III 研究のまとめ	53
1 児童生徒の生活状況について	53
2 児童生徒の学習に関する意識について	53
3 保護者の子ども観について	54
4 保護者の教育行政に対する要望について	54
5 まとめ	54

「ふくしまの学習意識」に関する調査研究

教育調査チーム

I 研究の趣旨

平成13年12月に公表された、経済協力開発機構(OECD)の「生徒の学習到達度調査(PISA)」の結果によると、日本の15歳の子どもが、国語・数学・理科の宿題や自分の勉強をする時間は、1日約25分間であり、調査に参加した32か国中最低で、先進国の中で突出して短かった。この結果をふまえ、文部科学省は、「確かな学力向上のための2002アピール『学びのすすめ』」で、一人一人の児童・生徒に「確かな学力」を身に付けさせることの重要性を述べるとともに、学びへの意欲や学ぶ習慣を十分身に付けさせる必要性を指摘している。本県においても、「第5次長期総合教育計画」及び「うつくしま教育改革プログラム」を策定し、本県としての教育改革推進に向けた施策を明らかにしている。その中で、「教育は家庭を原点として、地域や学校が一体となって社会全体が担うもの」という教育改革に対する基本的な考え方が示されている。「皆で教育を支える」という視点からも、家庭の教育力の現状を把握する必要性が生じている。そこで、「ふくしまの学習意識」に関する調査(少なくとも5年間の経年調査)を行い、本県における児童・生徒の生活状況、及び学習に関する意識を探り、その実態を把握することによって課題を明確にし、今後の教育施策に生かす基礎資料を得ることを目的として、調査研究を進めることにした。

II 研究の概要

1 調査研究内容

- (1) 生活状況の観点から、①生活時間帯②基本的な生活習慣③学習時間④学習内容⑤余暇利用⑥家族との関わりの6項目
- (2) 学習に関する意識の観点から、①得意な教科②コンピュータの利用③自己向上の願い④将来の目

標の4項目

- (3) 保護者の子ども観の観点から、①生活時間帯②余暇利用③子どもへの関わり④希望する進路⑤家庭学習の様子⑥子どもの学習への期待の6項目
- (4) 保護者の教育行政に対する要望の観点から、①学習環境②人間性・社会性の育成③学校・家庭・地域の連携の3項目

上記4観点19項目の調査内容から、本県における児童・生徒の生活状況及び学習に関する意識、保護者の子ども観、保護者の教育行政に対する要望を把握する。

2 調査研究方法

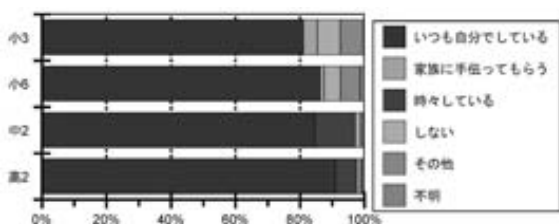
子どもの発達段階や在籍児童・生徒数における信頼区間の幅(0.08)をふまえ、調査対象と必要標本数を小学校第3学年児童・同保護者1,110件、小学校第6学年児童・同保護者1,110件(質問項目数64)、中学校第2学年生徒・同保護者1,188件(質問項目数64)、県立学校第2学年生徒・同保護者1,200件(質問項目数73)と設定し、生活・学習状況に関する調査対象者の生活圏(従来の教育事務所単位)毎の意識を反映させるために、地域性等の社会的条件を考慮して、小中学校各21校及び県立学校20校を抽出した。調査方法は、経年調査をふまえアンケートによる回答で行うことにした。

3 調査研究の実際

- ◇4月 調査計画の具体案作成
- ◇5月 「ふくしまの学習意識」調査計画作成
- ◇6月 調査内容・項目の作成
- ◇7月 各関係機関での調査内容の説明及び協力依頼、調査要項等の発送
- ◇8月 調査協力校からの問い合わせに対する対応
- ◇9月 調査協力校でのアンケート実施(9月1日～9月8日)とアンケート用紙の回収

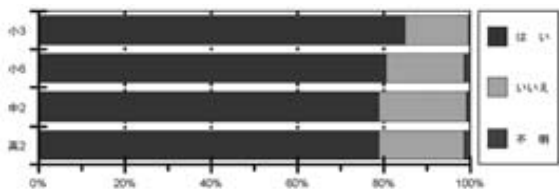
朝食は、校種が進むにつれ「きちんと食べる」割合が減少し、「時々食べる」「食べない」が増加している。

イ. 登校前の歯磨きや洗顔



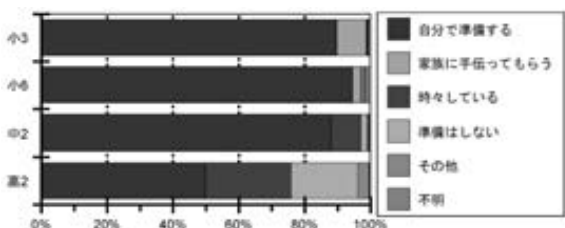
歯磨きや洗顔は、どの校種とも「いつも自分でしている」が一番多い。中学2年生と高校2年生は「時々している」、小学生は「しない」の割合も、全体から見ると決して少なくはない。

ウ. トイレ



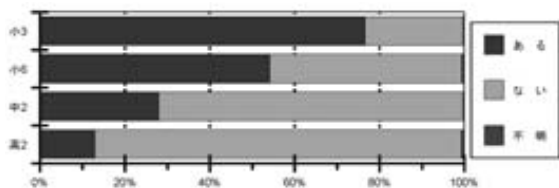
登校前にトイレを済ませていると回答したのは、全体的に80%程度である。

エ. 教科書や学習用具の準備



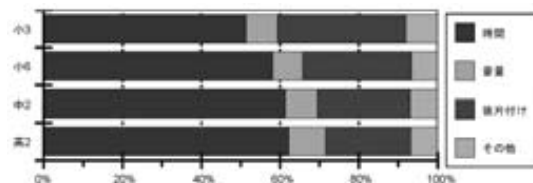
教科書や学習用具の準備は、小学3年生が89.7%、小学6年生が94.6%、中学2年生が88.1%、高校2年生が49.8%「いつも自分で準備している」と回答している。「準備しない」は、高校2年生が20.4%であった。

オ. テレビを見たり、テレビゲームをしたりする時の約束の有無



テレビを見たり、テレビゲームをしたりする時の約束の割合は、校種が進むにつれ減少している。

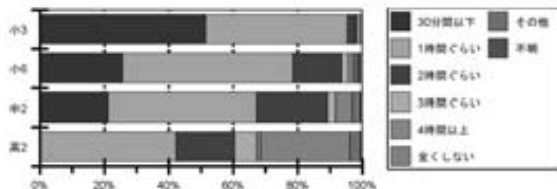
カ. 約束の内容(複数回答)



約束の内容では、どの校種も「時間の約束」が一番多い。次いで「後片付けの約束」となっている。「その他」の回答では、子どもの健康や学習に支障がでないよう約束している家庭が、多いように思われる。

③ 学習時間

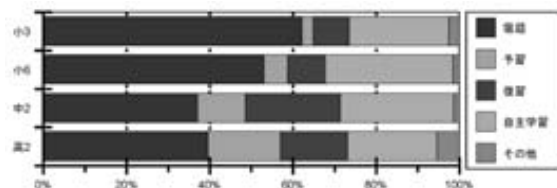
ア. 家庭での学習時間



家庭での学習時間で一番多かったのは、小学3年生が「30分間以下」の51.5%、小学6年生と中学2年生、高校2年生が「1時間ぐらいいらい」で、それぞれ52.8%、46.2%、42.3%であった。高校2年生は「全くしない」と回答したのが、27.8%であった。

④ 学習内容

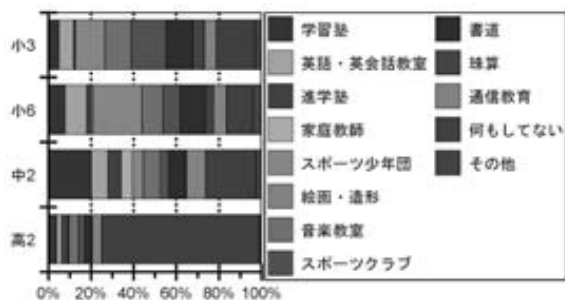
ア. 家庭学習の内容(複数回答)



家庭学習の内容では、どの校種とも「宿題」が一番多かった。校種が進むにつれ「予習」が増加している。中学2年生は「復習」が42.2%と他の校種に比べて多い。「自主学習」としては、問題集やテスト勉強、受験勉強等があった。

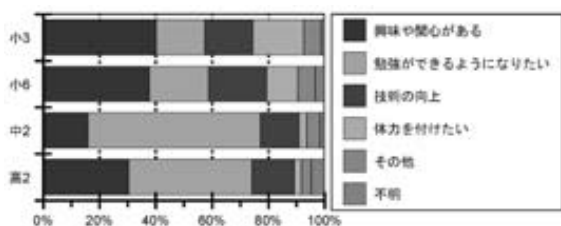
⑤ 余暇利用

ア. 習い事の有無と種類(複数回答)



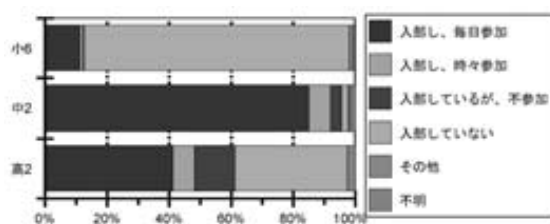
習い事は、小学3年生では73.1%、小学6年生では80.9%、中学2年生では69.5%、高校2年生では24.3%が何かの習い事をしている。「スポーツ少年団」や「スポーツクラブ」に入っている割合が、小学3年生では44.6%、小学6年生では48.3%であるが、全ての校種で、学習に関する習い事が多い。高校2年生は、「何もしていない」の割合が75.7%と他の校種に比べてとても多い。

イ. 習い事をする理由



習い事をしている児童生徒が、習い事をする理由として、小学3年生と小学6年生は「興味や関心があるから」が一番多く、中学2年生と高校2年生は「勉強ができるようになりたいから」が一番多かった。特に、中学2年生は61.2%が回答していた。

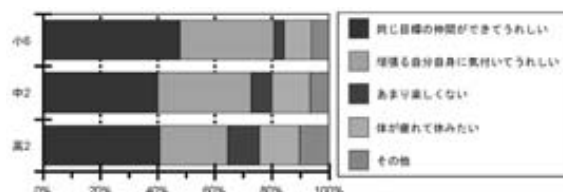
ウ. 部活動への入部と参加



「部活動に入部して、毎回参加している」のは、小学6年生では11.2%、中学2年生では85.0%、高校2年生では41.2%であった。

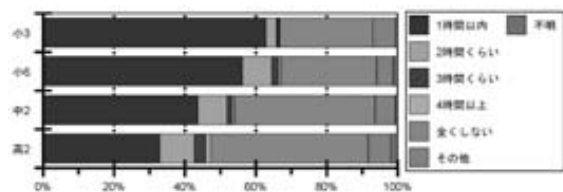
高校2年生では、習い事をしていない生徒が75.7%いたが、「入部していない」割合が36.4%であった。なお、小学校には、一年間を通して活動する部活動がない学校が多いこともあり、小学6年生は「入部していない」の割合が、85.6%と高くなっている。

エ. 部活動をして感じていること(複数回答)



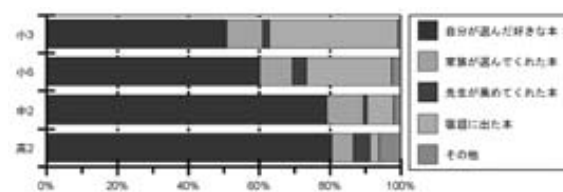
部活動をして感じていることとして、「同じ目標に向かってがんばる仲間ができてうれしい」と回答しているのが、どの校種も一番多い。次いで「目標に向かってがんばる自分自身に気づいてうれしい」と回答している。「活動することがあまり楽しくない」と「体が疲れて休みたい」を合わせると、中学2年生では30.8%、高校2年生では32.3%であった。

オ. 読書をする時間



1日あたりの読書をする時間は、「1時間以内」の割合が、校種が進むにつれ減少している。「全くしない」の割合は、校種が進むにつれ増加している。

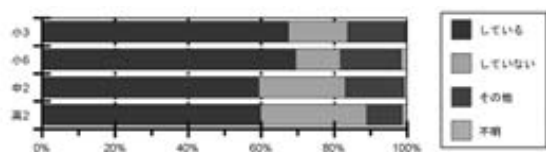
カ. 読書をする様子(複数回答)



読書をする様子では、どの校種とも「自分が好きな本を選択」が一番多い。小学校では、「宿題に読書」を出している割合が多い。

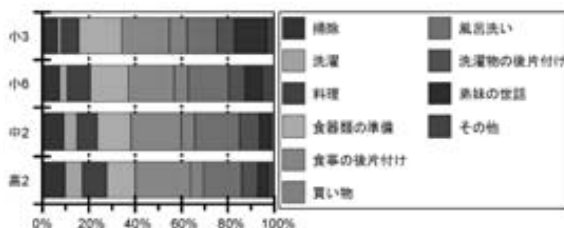
⑥ 家族との関わり

ア. 家庭での手伝いの有無



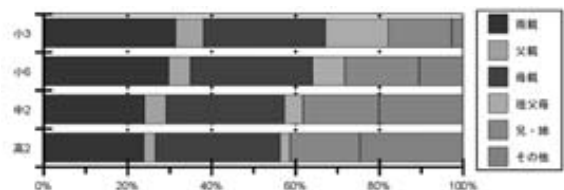
手伝いの有無は、小学3年生の67.3%、小学6年生の69.5%、中学2年生の59.3%、高校2年生の59.8%が、「している」と回答している。「その他」の回答として、小学3年生の15.8%、小学6年生の16.5%、中学2年生の15.8%、高校2年生の9.6%が、頼まれた時や時々していると回答している。

イ. 手伝いの内容(複数回答)



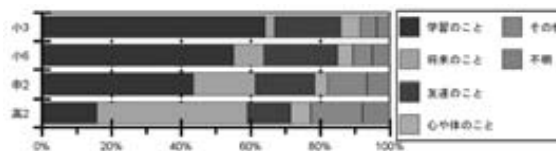
手伝いの内容では、どの校種とも「食事に関する手伝い」が一番多い。次いで「お風呂洗い」の割合が多くなっている。小学3年生では「弟妹の世話」が、34.5%あった。

ウ. 困った時に相談する人(複数回答)



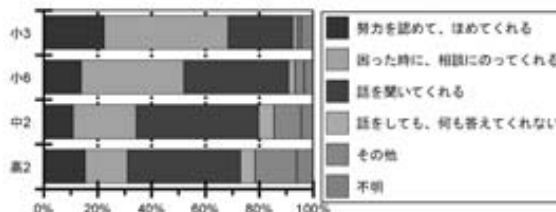
困った時に相談する人は、どの校種とも「両親」「母親」「兄・姉」の割合が多い。「父親」と「母親」の割合を比較すると、「母親」の割合が多い。小学3年生では「祖父母」が22.7%であった。「その他」の自由記述では、校種が進むにつれ、相談相手に「友達」の割合が増加している。「教員」と回答したのは、複数回答による総回答者数3,522名中13名であった。また、どの校種とも「いない」「しない」と回答している児童生徒がいた。

エ. 相談内容



相談内容では、小学3年生の64.0%、小学6年生の55.1%、中学2年生の43.5%が「学習のこと」で、一番多い。高校2年生では、「将来のこと」が43.4%で、一番多い。校種が進むにつれ、「学習のこと」が減少し、「将来のこと」が増加している。

オ. 家族の学習に対する関わり

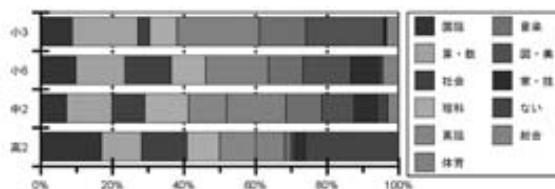


家族の学習に対する関わりでは、小学3年生では「困った時に相談にのってくれる」が46.1%で一番多く、「話を聞いてくれる」が、小学6年生では38.8%、中学2年生では45.4%、高校2年生では41.9%で、一番多い。

(2) 子どもの学習に関する意識調査結果

① 得意な教科

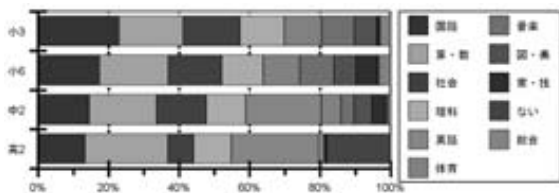
ア. 得意教科(複数回答)



得意教科のベスト3は、小学3年生では「体育」「図工」「算数」、小学6年生では「体育」「算数」「図工」、中学2年生では「体育」「数学」「理科」、高校2年生では「国語」「社会」「数学」であった。「理科」を除いて、校種が進むにつれ得意教科の割合が減少しているが、特に「数学」「理科」「英語」「保健体育」「音楽」「美術」「家庭」の各教科は、高等学校で減少している。また、高等学校での「ない」という回答が24.3%であった。
※ 高校2年生の各専門教科、商業3.9%、工業1.3%、農業1.1%、水産0.7%は、校種

間の比較ができないため一覧表から除いて考察した。

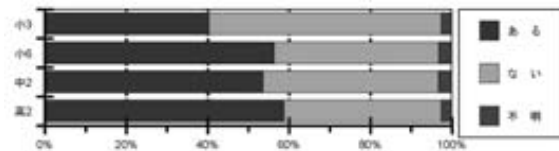
イ. 得意になりたい教科(複数回答)



得意になりたい教科ベスト3は、小学3年生では「国語」「算数」「社会」、小学6年生では「算数」「国語」「社会」、中学2年生では「英語」「数学」「国語」、高校2年生では「英語」「数学」「国語」であった。得意になりたい教科として、小学3年生と小学6年生は「国語」「算数」「社会」「理科」、中学2年生と高校2年生は「国語」「数学」「社会」「理科」「英語」が、他の教科を上回っている。高校2年生は、苦手教科と得意になりたい教科の割合が、ほぼ同じような傾向を示している。
 ※ 高校2年生の各専門教科、商業4.8%、工業2.1%、農業0.3%、水産0.3%は、校種間の比較ができないため一覧表から除いて考察した。

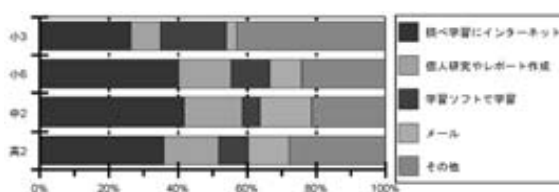
② コンピュータの利用

ア. 自宅に自分が利用できるコンピュータの有無



自宅で自分が利用できるコンピュータは、小学3年生では40.4%、小学6年生では56.3%、中学2年生では53.6%、高校2年生では58.7%が「ある」と回答している。

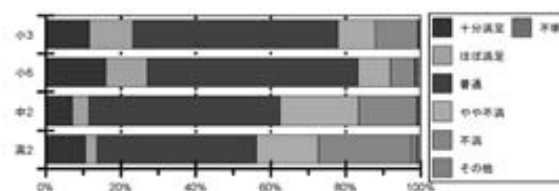
イ. 自宅でのコンピュータの利用(複数回答)



自宅でのコンピュータの利用の状況は、小学3年生は「利用していない」「ゲーム」「絵描き」等の自由記述が多かった。小学6年生以上では「調べ学習でのインターネットの利用」が、一番多かった。

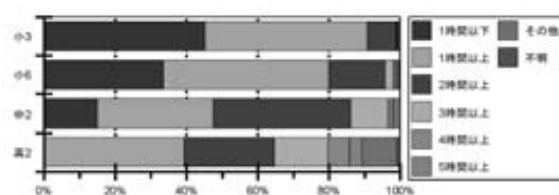
③ 自己向上への願い

ア. 現在の学習時間の満足度



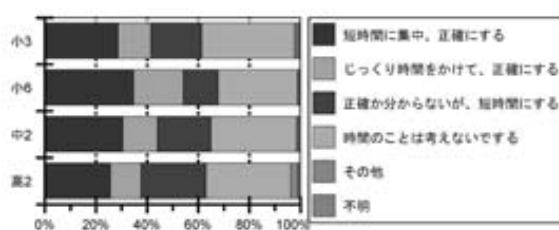
現在の学習時間の満足度は、それぞれの校種とも「普通」が一番多い。中学2年生と高校2年生では、「やや不満」「不満」の割合が多い。

イ. 家庭で学習したい時間



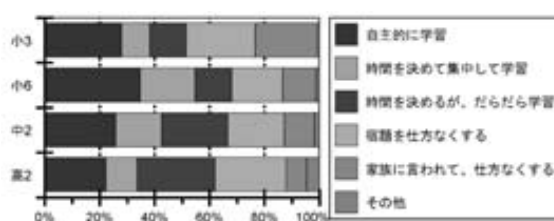
自己向上の意識を見ると、家庭で学習したい時間は、校種が進むにつれ多くの時間を希望している。特に高校2年生では、「4時間以上」が6.1%、「5時間以上」が3.5%であった。

ウ. 宿題が出た場合の取り組み



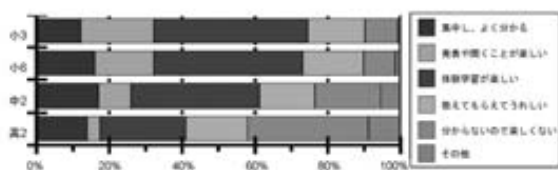
宿題が出た場合の取り組みでは、「時間のことは考えないです」が、全体的に多かった。

エ. 家庭学習の取り組み(複数回答)



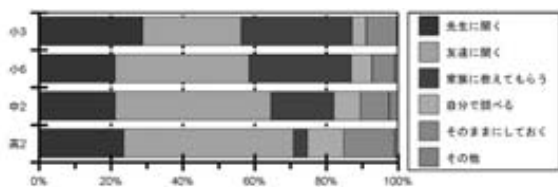
家庭学習の取り組みで、「自主的・自立的に学習している」割合は、校種が進むにつれ減少している。しかし、「時間を決めるがだらだら学習してしまう」割合は、校種が進むにつれ増加している。

オ. 学校の授業に対する意識(複数回答)



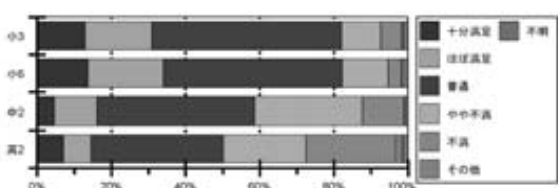
学校の授業に対する意識では、小学3年生と小学6年生、中学2年生が「教室の外で行う体験学習が楽しい」に一番多く回答している。高校2年生は「分からないことがあるのであまり楽しくない」の回答が一番多い。校種が進むにつれ授業形態に差があることがうかがえる。

カ. 授業が分からない時の対応(複数回答)



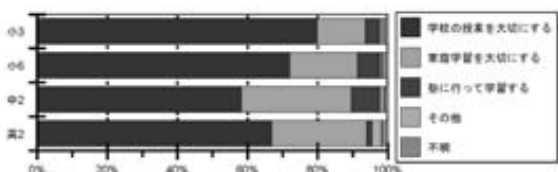
授業内容が分からない時の対応では、小学3年生では「家族に聞く」が一番多いが、小学6年生と中学2年生、高校2年生では「友達に聞く」が一番多い。「家族に教えてもらう」割合は、校種が進むにつれて減少し、「友達に聞く」「自分で調べる」の割合は、校種が進むにつれて増加している。

キ. 自分の学習の仕方に対する満足度



自分の学習の仕方に対する満足度は、どの校種も「普通」が一番多い。「やや不満」と「不満」を合わせると、中学2年生では40.3%、高校2年生では46.5%となった。

ク. 勉強をできるようにするための意識

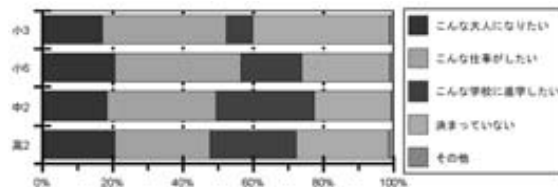


勉強をできるようにするためには、どの校種とも「学校の授業を大切にす」という回

答が一番多かった。中学2年生の31.5%と高校2年生の27.3%は「家庭学習を大切にす」と回答している。

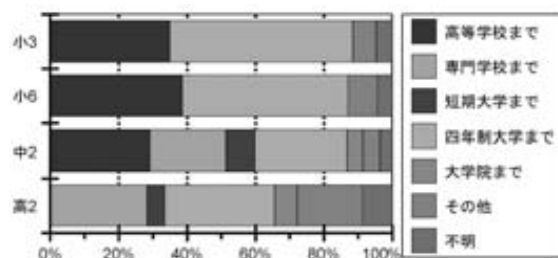
④ 将来の目標

ア. 将来の目標、職業(複数回答)



将来の目標では、具体的な職業を記述して「こんな仕事をしてみたいという目標がある」と回答したのが、小学6年生以上のどの校種とも一番多かった。小学3年生でも、38.9%が回答していたが、43.0%は「まだ将来の目標が決まっていない」と回答していた。「こんな学校に進学したいという目標」は、中学2年生の37.3%が一番多かった。希望職業については、校種が進むにつれ、より具体的な職業が記述されていた。

イ. 進学目標

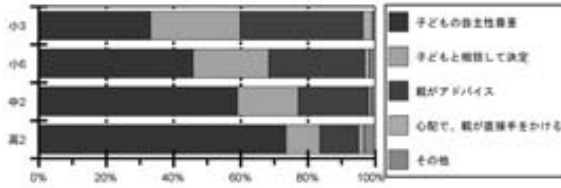


進学目標では、「四年制大学まで」と回答したのが、小学3年生での53.5%、小学6年生での48.5%、高校2年生での32.3%で一番多かったが、中学2年生では29.1%が「高等学校まで」と回答したのが一番多かった。中学2年生の22.3%と高校2年生の28.4%が、「専門学校まで」と回答していた。「その他」の自由記述では、高校2年生は「就職」という記述が多かった。全体的にみると、大学進学を希望する児童生徒が多い。

(3) 保護者の子ども観に関する意識調査結果

① 生活時間帯

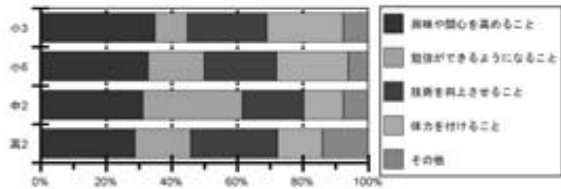
ア. 子どもの生活時間帯の過ごし方(複数回答)



子どもの生活時間帯の過ごし方は、校種が進むにつれ「生活時間帯の過ごし方は、子どもの自主性に任せている」が増加し、「子どもと相談して、生活時間帯の過ごし方を決めている」と「親がアドバイスして、子どもに守らせている」が減少している。

② 余暇利用

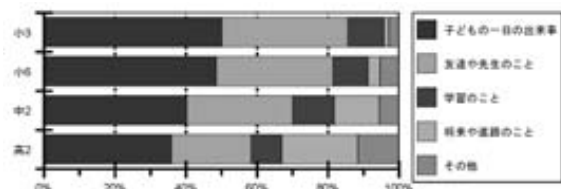
ア. 習い事に対する期待(複数回答)



習い事に対する期待では、どの校種も「習い事に対する興味や関心を高めること」という回答が、一番多かった。小学生の「習い事をする理由」と保護者の「習い事に対する期待」は、ほぼ同じ傾向を示したが、中・高校生で一番回答が多かった「勉強ができるようになりたい」と保護者の一番回答が多かった「興味や関心を高めること」という回答に意識のずれをうかがうことができた。校種間による比較では、中学2年生の保護者の「勉強ができるようになること」という回答が、他の校種に比べて割合が高かった。

③ 子どもへの関わり

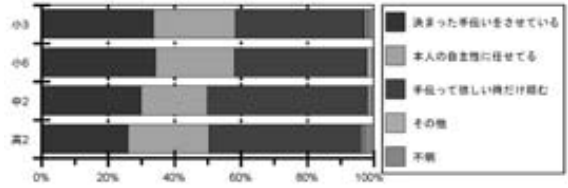
ア. 子どもとの会話の内容(複数回答)



子どもとの会話の内容では、どの校種も「子どもの1日の出来事」が一番多く、次いで「友達や先生のこと」の回答が多かった。「将来や進路のこと」については、中学2年生は21.8%、高校2年生は34.4%であった。

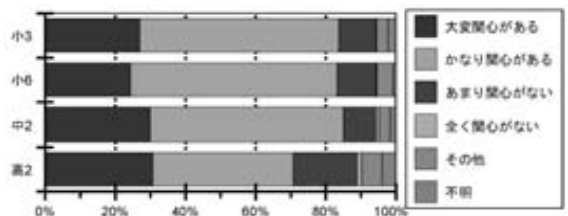
「その他」の自由記述では、校種が進むにつれ「社会的事象」の話題が増加している。

イ. 子どもの手伝いの有無と内容



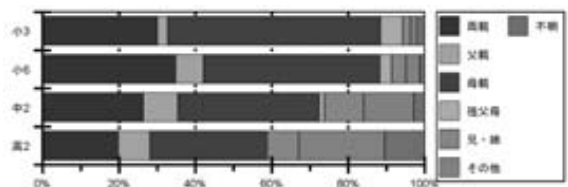
子どもの手伝いでは、どの校種とも「手伝ってほしい時だけ頼む」と回答した割合が、一番多かった。次いで「決まった手伝いをさせている」の回答が多かった。手伝いの内容は、子どもの回答とほぼ同じであった。

ウ. 子どもの学習に対する関心



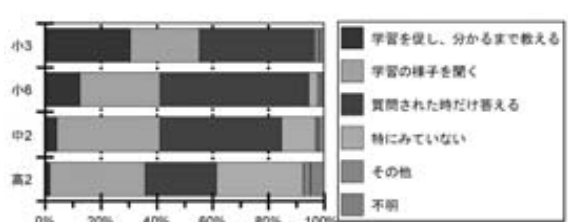
子どもの学習に対する関心は、どの校種も「かなり関心がある」と回答した割合が、一番多かった。次いで「大変関心がある」の回答が多かった。

エ. 子どもの学習をみている人



子どもの学習をみている人では、どの校種とも「母親」が一番多い。中学2年生までは、次いで「両親」と回答している。「その他」の自由記述で、高校2年生の22.4%が「家族は教えられない」「友達に教えてもらう」等と回答している。

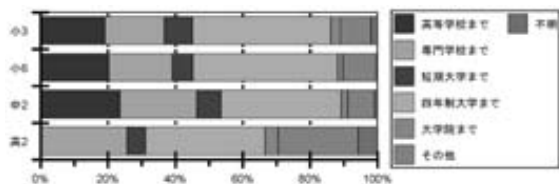
オ. 子どもの学習への支援



子どもの学習への支援では、中学2年生までは「子どもに質問された時だけ答える」の回答が一番多いが、高校2年生では「子どもに学習の様子を聞く」の回答が一番多い。校種が進むにつれ「子どもに学習を促し、分かるまで教える」という回答が減少し、「特にみていない」という回答が増加している。

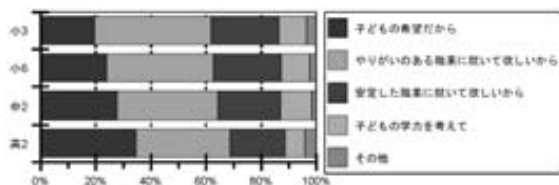
④ 希望する進路

ア. 子どもの進学先の希望



子どもの進学先の希望では、どの校種も「四年制大学まで」の回答が一番多い。次いで中学2年生までは「高等学校まで」の回答が多かった。「専門学校まで」の回答は、校種が進むにつれ増加している。「その他」の自由記述では、「本人の希望」を優先させたいという記述が多かった。

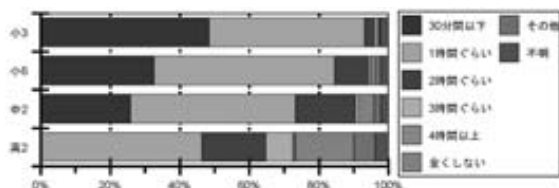
イ. 進学させたい理由(複数回答)



進学させたい理由は、中学2年生までは「子どもにやりがいのある職業に就いてほしいから」という回答が一番多く、高校2年生では「子どもの希望がそこにあるから」という回答が一番多かった。

⑤ 家庭学習の様子

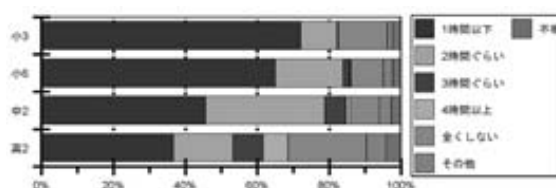
ア. 子どもの平日の学習時間



子どもの平日の学習時間は、小学3年生では「30分間以下」が一番多く、小学6年生と中学2年生、高校2年生は「1時間ぐらいい」が一番多かった。校種が進むにつれ学習時間

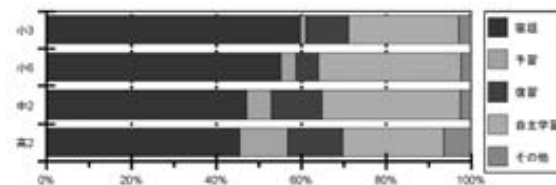
は、「1時間以下」の割合が減少し、「2時間以上」の割合が増加している。「全くしない」という回答が、高校2年生では16.8%あった。

イ. 子どもの休日の学習時間



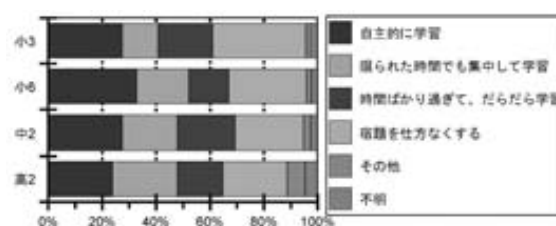
子どもの休日の学習時間は、「1時間以下」の回答がどの校種とも一番多いが、その割合は、校種が進むにつれ減少している。「3時間以上」学習している割合は、中学2年生では7.0%、高校2年生では15.3%であった。「全くしない」という回答が、高校2年生では21.8%あった。

ウ. 家庭学習の内容(複数回答)



家庭学習の内容では、どの校種も「宿題」の割合が一番多く、次いで「自主学習」と回答している。校種が進むにつれ「予習」の割合が増加している

エ. 子どもの家庭学習に対する取り組み姿

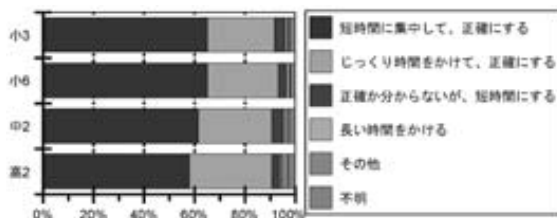


子どもの家庭学習に対する取り組み姿で一番多いのは、小学3年生が「宿題が出るので、仕方なくしている」、小学6年生と中学2年生が「自分から進んで、自主的に家庭学習に取り組んでいる」、高校2年生が「限られた時間の中でも、集中して取り組んでいる」という回答であった。小・中学校の児童生徒と保護者の家庭学習に対する取り組み姿は、ほぼ一致しているが、高校2年生は、「時間は決めるが、だらだら学習してしまう」という

生徒の一番多い回答と保護者の「限られた時間の中でも、集中して取り組んでいる」という一番多い回答に、両者の意識のずれがうかがえた。

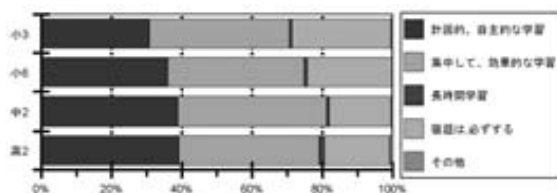
⑥ 子どもの学習への期待

ア. 宿題をする時の期待する姿



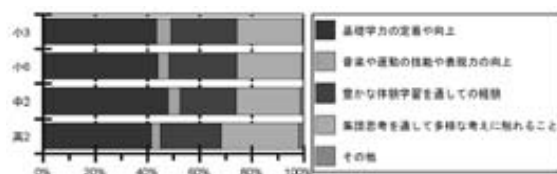
宿題をする時の期待する姿では、どの校種も「短時間に集中して、正確にする」との回答が一番多く、次いで「じっくり時間をかけて、正確にする」と回答している。どの保護者も、「正確さ」を重視していることがうかがえる。

イ. 子どもの家庭学習に対する取り組みへの期待(複数回答)



子どもの家庭学習に対する取り組みへの期待では、どの校種も「集中して、効果的な学習をしてほしい」、「計画的、自主的に学習してほしい」という回答が多く、「長時間学習して欲しい」という回答は少なかった。「宿題は、必ずして欲しい」という回答はあまり多くなく、宿題よりも自主的な学習を期待していることがうかがえる。

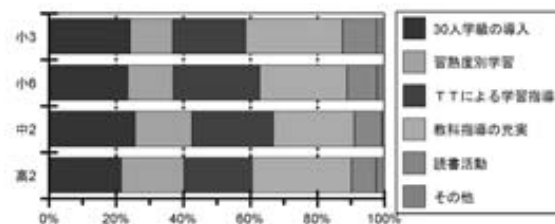
ウ. 学校に対しての期待(複数回答)



学校に対しての期待では、どの校種も「基礎学力の定着や向上」という回答が一番多かった。次いで「豊かな体験活動を通しての経験」「集団思考を通して多様な考え方に触れること」への期待が多かった。

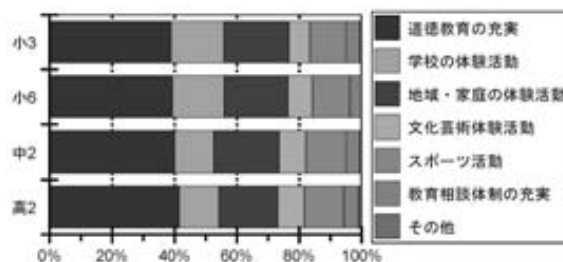
(4) 教育行政(福島県・各市町村・各学校)に対する要望

① 学習環境に対する期待(複数回答)



教育行政に対する要望の中で、学習環境に対する期待は、保護者が学校に対して「基礎学力の定着や向上」が一番期待していることから、「教科指導の充実」「TTによる学習指導」「習熟度別学習」を期待している保護者が多い。「その他」の自由記述にも、「学力の向上」「個別指導の充実」の記述があった。

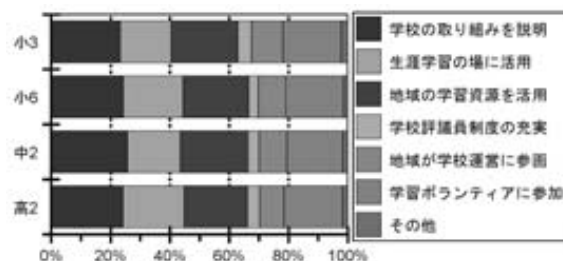
② 人間性や社会性の育成で大切なこと(複数回答)



教育行政に対する要望の中で、人間性や社会性の育成で大切なことは、どの校種も「道徳教育の充実」という回答が一番多かった。次いで「地域や家庭の体験活動」という回答が多く、地域教育や家庭教育の大切さも重視されていた。

③ 学校・家庭・地域の連携で大切なこと

(複数回答)



教育行政に対する要望の中で、学校・家庭・地域の連携で大切なことは、どの校種も「保護者や地域住民に学校を開いて、学校の取り組みを説明すること」という回答が一番多かった。次いで、どの校種とも「学校を生涯学習の場と

して活用」「学校が地域の学習資源を活用」「保護者や地域住民が学習ボランティアに参加」という回答が多く、学校を開いて、学校・家庭・地域が、相互に交流できる場や機会を望んでいることがうかがえる。

Ⅲ 研究のまとめ

今回の「ふくしまの学習意識」に関する調査研究は、本県における児童生徒の生活状況及び学習に関する意識を探り、その実態を把握することによって、課題を明確にし、今後の教育施策に生かす基礎資料を得ることを目的として行った。その結果、本県の子ども像の一端、本県における児童生徒の生活状況及び学習に関する意識、保護者の子ども観、保護者の教育行政に対する要望として、次のことが明らかになった。

1. 児童生徒の生活状況について

家庭内での様子を見た時、基本的な生活習慣としての歯磨きや洗顔、朝食をきちんと摂ることは、家庭での習慣付けによってか、よく身に付いている。ただ、睡眠については、校種が進むにつれ就寝時刻がおよそ1時間ずつ遅くなり、睡眠時間もおよそ1時間ずつ少なくなっていくという睡眠不足の傾向も見られた。

家庭での手伝いについては、それをしている児童生徒が59.3%～69.5%いたことから、家族の一員としての役割を果たして生活している児童生徒の姿が想像される。

困った時に相談する人は、家族の中で母親の占める割合が全体的に多い。校種が進むにつれ、父親の関わりが少なく上に一層少なくなっており、友達等の家族以外に相談相手を求める傾向が見られた。相談内容としては、校種が進むにつれて「学習のこと」から「将来のこと」へ変化しているのが特徴的である。

家庭の外での姿としては、目的意識をもって部活動や習い事をし、自己を高めようとしている児童生徒の姿が見える一方、何もしていない児童生徒が比

較的多く、特に高校生の数値が高い。高校2年生に対して行ったアルバイトについての調査では、生徒が推測する親の考え「社会体験を積めるので賛成」「本人の自由に任せる」と、親の実際の考え「社会体験が積めるのでいい」「本人の意志に任せる」がほぼ同じ割合を示していた。

読書については、どの校種とも「自分で選んだ好きな本を読んでいる」割合が一番多いが、「全く読まない」の割合が26.2%～44.5%あった。

2. 児童生徒の学習に関する意識について

家庭での学習時間は、小学3年生は「30分間以下」、小学6年生と中学2年生、高校2年生は「1時間ぐらい」が、一番多い回答であった。「全くしない」と回答したのが、高校2年生では27.8%あった。文部科学省が全国の高校3年生を対象に行った「勉強に対する意識調査」(平成14年11月実施)で、学校外の学習時間は、41.0%が「全く、またはほとんどしない」と回答していた。本県の高校生の方が、「全くしない」の割合が少ない様子が見られる。

宿題については、「時間のことは考えないです」という回答が比較的多かった。やらなくてはならないという意識があるようだ。予習や復習等の家庭学習への取り組みでは、小学生は「自主的に学習」している割合が高いが、中学・高校生になると「時間を決めるが、だらだら学習してしまう」という割合が増えている。家庭学習に関する意識として、現在の自分自身の学習時間や学習の仕方に対する不満は、小学生よりも中学・高校生の割合が高い。

学校の授業に対する意識として、中学生までは「教室外の体験学習が楽しい」、高校2年生は「分からないことがあるのであまり楽しくない」という回答が一番多かった。授業が分からない時の対応として、小学3年生は「家族に教えてもらう」、小学6年生以上は「友達に聞く」という回答が一番多かったが、一方「そのままにしておく」の割合が、小学生では10.7%～13.6%、中学生では13.0%、高校生では22.1%あった。

まとめとして、勉強ができるようにするための意識について見てみると、どの校種とも学校における

授業の大切さを感じている。

以上の様子から、児童生徒の学習に関する意識に応えた授業や家庭学習への支援の大切さが感じられる。

3. 保護者の子ども観について

子どもの生活への保護者の関わりでは、子どもの生活時間帯の過ごし方に関するデータから、校種が進むにつれ保護者は、家庭生活における児童生徒の自主性や自立性を尊重して子どもの生活を見守っている様子がうかがえる。子どもとの会話内容では、どの校種とも「子どもの1日の出来事」が一番多く、保護者の関心の在り所をよく示している。

子どもの学習に対しては、どの校種とも関心が高い。子どもの家庭学習に母親が中心となって関わり、必要に応じて支援を行っている様子がうかがえる。子どもの家庭学習への取り組みでは、概ね、宿題を含めて「自主的に学習している」という姿が保護者の目に映り、家庭学習については「集中して効果的な学習」「計画的、自主的な学習」という姿を期待している割合が多かった。宿題も「短時間に集中して、正確にする」への期待が多い。

学校に対しての期待では「基礎学力の定着や向上」が一番多く、基礎学力の定着や向上への願いの高さがうかがえた。

子どもの進学先の希望では、どの校種とも「四年制大学まで」が一番多い。進学させたい理由としては、中学生までは「やりがいのある職業に就いて欲しいから」、高校生では「子どもの希望がそこにあるから」という回答がそれぞれ一番多かった。

習い事に関する意識では、小学生までは児童と保護者の意識は「興味や関心があるから」で、ほぼ同じ傾向であったが、中学生と高校生では「勉強ができるようになりたい」という生徒の意識と「興味や関心を高めて欲しい」という保護者の意識とに差があった。

4. 保護者の教育行政に対する要望について

保護者の教育行政に対する要望として、学習環境に対しては、「教科指導の充実」「30人学級編制の

導入」「TTによる学習指導」への期待が大きい。また、人間性・社会性の育成では、どの校種とも「道徳教育の充実」を期待している。さらに、学校・家庭・地域の連携については、「保護者や地域住民に学校を開いて、学校の取り組みを説明すること」の大切さを感じている保護者が多かった。保護者の声として、自由記述欄に回答した290名中62名の回答が寄せられた、児童生徒の教育に直接関わる教員の人間性や指導力の向上への願いが多かった。

5. まとめ

(1) 成果

児童生徒とその保護者（5,076名）の協力を得て、本県における児童生徒の生活状況及び学習に関する意識を数値的に捉え、本県の子どもの像の一端を垣間見ることができた。

経年調査の初年度である今年度の基礎データをまとめたことによって、本県の児童生徒と保護者の意識の傾向性を把握することができ、来年度以降の調査結果と比較検討していく土台作りをすることができた。

(2) 今後の課題

経年調査によって、本県の児童生徒と保護者の意識をさらに明らかにするとともに、その変化の様子を分析していきたい。その成果が、教育施策に生かせる基礎資料となるようにしていきたい。

今回の調査分析結果から調査内容における質問項目の精査を行うことによって、質問項目の見直しを図り、より児童生徒や保護者の実態に迫る調査分析を行っていきたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 教育調査法 松原治郎編 (有斐閣双書 1989年)
- 2) 教育研究のための調査票の設計と事例 藤原藤祐著 (ぎょうせい 昭和53年)
- 3) 福島県教育センター研究紀要 Vol. 25 (福島県教育センター 平成7年度)

情報教育チーム

情報機器やネットワークを活用した新たな 学習形態に関する基礎研究

—eラーニングの利用に関して—

情報機器やネットワークを活用した新たな
学習形態に関する基礎研究

情報機器やネットワークを活用した新たな学習形態に関する基礎研究 －eラーニングの利用に関して－

《目次》

I	研究の趣旨	55
II	研究の概要	55
1	平成15年度『福島県の情報教育の実態等に関する調査』による eラーニングに関する意識調査	55
2	eラーニングを学校教育へ導入するための基礎研究	55
3	eラーニング教材作成とeラーニングの有効性に関する実践研究	55
III	研究の結果	55
1	eラーニングに関する意識調査	55
2	eラーニングの環境	56
3	eラーニング用教材の作成方法	57
4	授業実践	59
IV	研究のまとめ	60
1	研究の成果	60
2	今後の課題	60

情報機器やネットワークを活用した新たな学習形態に関する基礎研究

－ eラーニングの利用に関して－

情報教育チーム

I 研究の趣旨

近年、福島県内の各学校においては、インターネットや校内LANなどのネットワーク環境の整備が急速に進んできている。

最近、企業内教育などの分野では、従来の集合研修における移動に伴う時間や経費などの問題を解消するために、移動の必要がなく個人のペースで学習できるという利点を生かした、eラーニングやWBT(Web Based Training)が導入され始めている。

学校においては、「学校インターネット」や「Eスクエア・アドバンス」等のプロジェクトとして、その導入や実践がなされているものの、一般的に利用されている状態ではない。ただ、今後一層ネットワーク環境が整備充実されるに伴い、ネットワークの活用方法の一つとして、eラーニングが学校教育へ導入されていくものと考えられる。

情報教育チームとしては、ネットワークの有効な活用方法であるeラーニングについて、教材作成方法をはじめとする基礎的な研究の必要性を感じ、本年度先行的に取り組んだ。

II 研究の概要

本年度の研究は、学校教育における今後のeラーニングの活用方法やその有効性についての基礎的な研究であり、下記に示すような内容に焦点化して行った。

1 平成15年度『福島県の情報教育の実態等に関する調査』によるeラーニングに関する意識調査

(1) 実施時期 平成15年5月

(2) 対象 福島県内国公立の小中高養護学校全校

2 eラーニングを学校教育へ導入するための基礎研究

(1) 学校教育へのeラーニング導入に関する先行研究等の文献調査

(2) eラーニング教材作成のための基礎調査

3 eラーニング教材作成方法とeラーニングの有

効性に関する実践研究

研究を進める上での、eラーニングの定義は次の通りである。

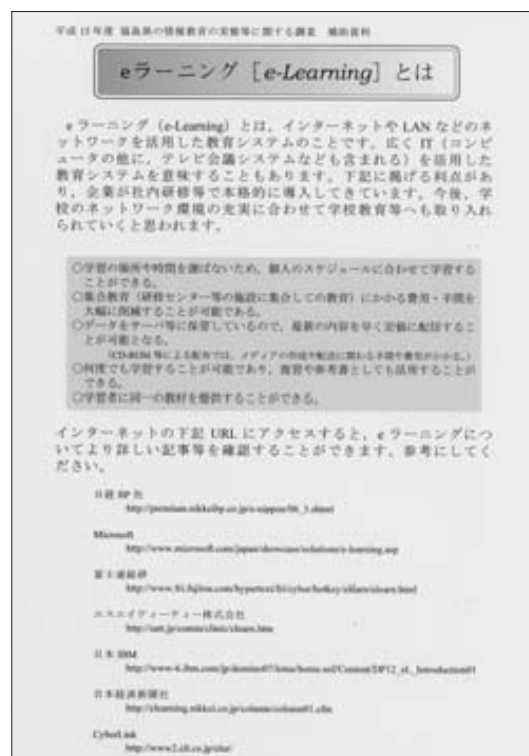
「eラーニングとは、情報技術(IT)によるコミュニケーション・ネットワーク等を使った主体的な学習である。ここでは、コンテンツが学習目的に従い編集されており、学習者とコンテンツ提供者の間にインタラクティブ性が提供されていることが必要である。ここでいうインタラクティブ性とは、学習者が自らの意志で参加する機会が与えられ、人またはコンピュータから学習を進めていく上での適切なインストラクションが適時与えられるものである。」(eラーニング白書による)

III 研究の結果

1 eラーニングに関する意識調査

(1) 調査の目的

情報教育チームでは、福島県内の情報教育の実態

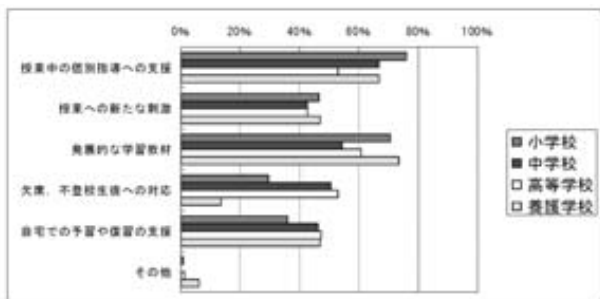


アンケートに添付して配布した補助資料

調査のために毎年アンケートを実施している。本年度は、学校におけるeラーニングへの期待や利用上の留意点などを調査するため、例年実施している内容に「eラーニングに関する意識調査」を追加した。その際、eラーニングに関する説明資料を添付し、アンケートに答えやすくなるよう配慮した。

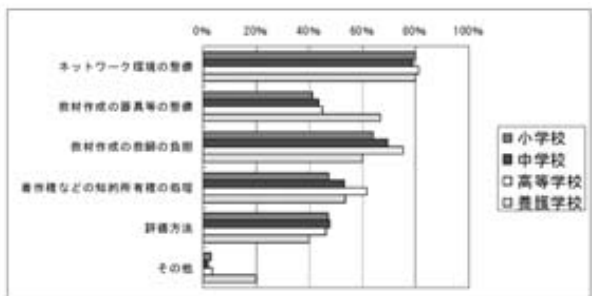
(2) アンケートの内容と調査結果

① eラーニングを学校教育に導入した場合、その効果として期待することは何ですか。(複数回答可)



eラーニングが、多くの先生方に認知されていないながらも、個別指導や発展的な学習教材としての活用に大きな期待が寄せられていると考えられる。

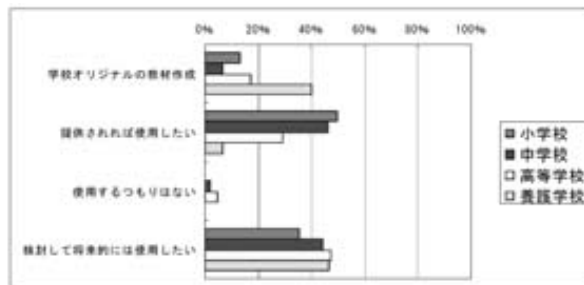
② eラーニングを学校教育へ導入する場合、特に留意すべきことは何ですか。(複数回答可)



全校種で、ネットワーク環境の整備という回答が約8割という高い数字になった。これは、eラーニングを利用するには、校内LANやインターネット等の環境整備を更に充実させる必要があることを示している。

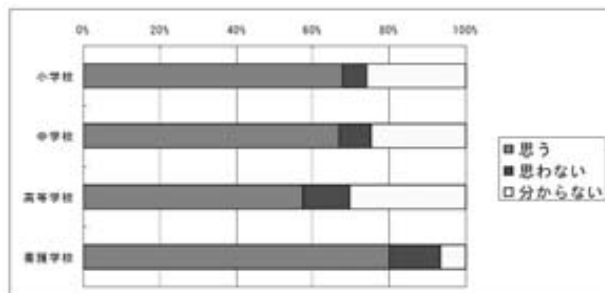
また、著作権等の知的所有権の処理に対して、教師側に不安があることが分かった。

③ eラーニングをどのような形態で使用したいと思いますか。



eラーニングに期待する数字が高かった反面、まだ具体的なイメージがつかめないためか、その使用形態については回答が少なかったようである。そこで、教育センターとしては、eラーニングを活用した学習形態の基礎研究を積み重ね、効果の期待される点を明らかにしていくことが重要になると思われる。

④ eラーニング用の教材作成や、授業での活用に関する研修講座が教育センターで開設されれば参加したいと思いますか。



研修講座に参加したいと思うという回答が多いことから、多くの先生方が研修の機会を望んでいることが分かる。これは、いまだはっきりとイメージできないeラーニングについて、より具体的にその可能性を掌握したいという学校の期待からきているものと考えられる。特に養護学校からの参加希望が高いことから、より複雑な教育課題をかかえる特別支援教育における、eラーニングという新しい学習形態への期待の大きさを感ずることができる。

2 eラーニングの環境

教材の提供者(教師など)は、ネットワーク内の

Webサーバ内に教材用データを配置する。学習者は、ネットワークに接続されているコンピュータからInternet ExplorerなどのWebブラウザを用い、Webサーバから提供された各種教材データを閲覧し学習する。

また、学習者の学習履歴や解答などを記録・累積するためには、CGI(Common Gateway Interface)やASP(Active Server Pages)などのシステムやプログラムの設定等が必要である。

本研究では、これらの機能を利用し、インターネットより安定した教材提供ができるネットワーク環境として校内LANを想定し、教材作成等の検討を行った。

3 eラーニング用教材の作成方法

次のような条件を想定して、eラーニング用教材の作成を行った。情報教育チームのスタッフ5名のうち2名の専門が中学校理科ということもあり、対象生徒を中学生、対象教科を理科とした。学習形態は、アンケートの結果からeラーニングへの期待として最も多かった、授業中の個別学習への支援とした。学習場面は、既習内容を確認する復習の場面とした。

今回作成した教材は、単なる説明資料を各自が閲覧するといったものから一歩進め、アニメーションを用いたスライドの説明資料に、説明をしている教師の映像と音声と同時に配信するといったものである。この教材は、学習者が画面上の教師から説明を受けているような感覚を持ち、意欲的に学習に取り組めるものと期待して制作した。具体的な教材は、下の画面のように右側のメインの部分には説明用スライドを、左側の上部には教師の説明用の動画を、左側の下部には目次を表示する構成とした。



(1) 作成に使用した主なアプリケーション

教材の作成には下記のアプリケーションソフトウェアを用いた。

Webページ作成

Macromedia Dreamweaver MX

Macromedia Fireworks MX

説明用教材作成

Microsoft PowerPoint 2002

CyberLink StreamAuthor 2.5J

機器説明用回転画像作成

Digital Spice

(2) 説明用教材の作成手順

① 説明用スライドの作成

PowerPointで説明用スライド（アニメーションは手動に設定）を作成する。



② 説明用VTRの録画



説明用教材に使用する動画データを録画する。データのデジタル化を容易にするために、デジタルビデオカメラを使用して録画した。

③ 動画データのキャプチャー

デジタルビデオカメラから、パソコンに動画データを取り込む。今回は、Pixe DVを用いたが、他のソフトウェアでも可能である。



④ 動画の編集とMPEGデータへの変換



キャプチャーしたデータを、説明用教材に使用する部分毎に編集してMPEG1のデータへ変換し、それぞれをファイルとして保存する。

⑤ StreamAuthorによるデータの合成と編集



使用したStreamAuthorは、eラーニング用のストリーミング・コンテンツ作成用ソフトウェアで、動画・音声・テキストを連動させたコンテンツを作成することができる。ここでは、左上に説明用の動画の画面を、右側の大きなウィンドウにスライドを表示する形のコンテンツを作成した。上図は、動画とスライドの表示のタイミング等を合わせている編集用の画面である。下図は、編集用画面の下部に表示されているタイムラインウィンドウである。

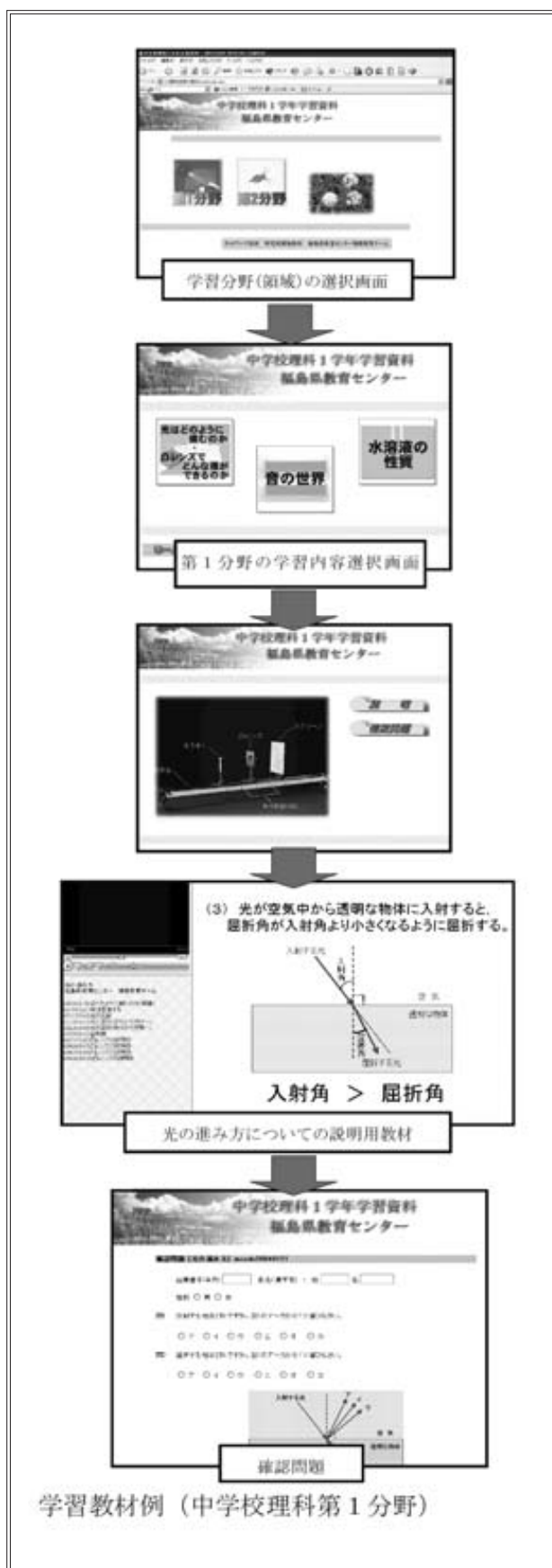


アニメーションの実行位置が、白いラインで表示されている。動画をプレビューして確認しながら、このラインをドラックして、アニメーション実行の位置（時間）を変更する。

編集作業終了後、プレビュー画面で確認し、配信用のデータ（ネットワークの環境に合わせてサイズを選択可能）へ変換すると、説明用教材のデータが完成する。

(3) 作成した教材

作成したeラーニング用教材は下図のような構成になっている。



(4) 学習記録累積の方法

各学習者の解答の情報はWindows系ServerのASPシステムを使用し、CSV形式で保存されるようにプログラミングした。なお、ASPシステム用のプログラムはVBScriptを使用して作成した。CSV形式で保存されたファイルは、Excel等のアプリケーションソフトウェアを使用して開き、データを活用することが可能となる。Access等のデータベース用のファイルにも保存できるが、学校での利用を想定し、特別なデータベース用のソフトウェアを使用せずに開くことができる、CSV形式のファイルで保存することにした。

4 授業実践

(1) 授業実施校(授業者)

福島市立福島第二中学校(佐藤貴弘 教諭)

(2) 実施教科・学年・教室

理科・第1学年・コンピュータ室

(3) 実践教材

試用のために作成したeラーニング用学習教材

- 第一分野「光の進み方」 —
- 第二分野「顕微鏡の操作方法」 —

(4) 実施時期

平成16年1月

(5) 機器構成と環境

Server用Computer 1台 [OS: WindowsNT]

生徒用Computer40台 [OS: Windows98]

(6) 授業概要



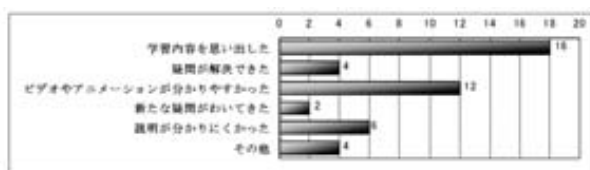
1・2学期に学習した内容の復習の時間として位置づけた。始めに学習教材の使用方法を説明し、その後は、自学自習の個別学習をさせた。説明用教材を使用する際には、音声ヘッドホンで聴き

とらせ、他の生徒の学習の妨げにならないよう配慮した。学習の最後には、確認問題を解答させ、学習内容の定着を確認した。学習後の確認問題の正答率の平均は70パーセントを上回った。

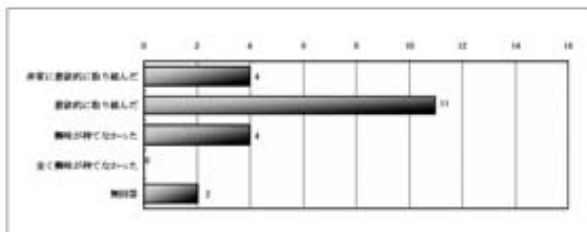
(7) 実践後のアンケートから

授業実践後、1クラス(24名)に対してアンケート調査を実施した。結果は下記のようにになっている。なお、回答者は欠席生徒3名を除く21名であった。

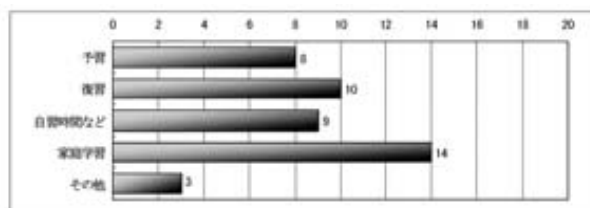
- ① 今日の学習にあてはまるものを選びなさい。
(複数回答可)



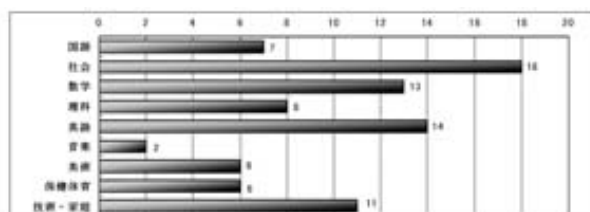
- ② 普段の授業と比べて今日の授業はどうでしたか？



- ③ 今日のような教材はどんな時に使いたいですか？
(複数回答可)



- ④ 今日のような教材で学習したい教科は？
(複数回答可)



IV 研究のまとめ

1 研究の成果

福島県内の各学校においては、eラーニングに関する認識はまだ低いながらも、個別指導・発展的な学習教材としての活用に大きな期待を寄せていることが分かった。

eラーニングを用いた自習型の個別学習には、個々の学習者が意欲的に取り組み、学習内容の定着に対して有効であることが確認できた。

校内LANの活用により、Serverへ学習記録の累積が可能となる。このことから、昼休みや放課後などの様々な時間に児童生徒が自学自習を行い、その記録を教師が活用できるものと期待できる。

2 今後の課題

eラーニングの実施には、県内各学校の校内のネットワークやコンピュータの環境が、まだ十分とは言えず、今後の整備の進展に期待したい。

また、教材作成のためのソフトウェアには、高価なものもあり各学校ごとの購入は難しい。フリーソフトが活用できないか等、今後も検討が必要である。

教材作成のためには、教材作成者(教師など)に一定のコンピュータリテラシーが要求される。今後も専門研修等を通じて、教職員のリテラシーの向上を図っていきたい。

eラーニングを支えるネットワークやソフトウェアは常に進化し続けており、継続的な研究が必要である。

〈参考文献・Webサイト〉

- 1) eラーニング白書
先進学習基盤協議会(ALIC) 編著(オーム社, 2002年)
- 2) 福島県教育センター <http://www.center.fks.ed.jp/>
- 3) CyberLink <http://www2.cli.co.jp/>
- 4) Microsoft <http://www.microsoft.com/japan/>
- 5) 富士通 <http://jp.fujitsu.com/>

教育相談チーム

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究

—学級（ホームルーム）活動を中心に—

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究
—学級（ホームルーム）活動を中心に—

《目次》

I 研究の趣旨	61
II 研究の概要	61
1 「生きる力」の捉え方と研究手法	61
2 研究計画	61
3 研究の実際	61
III 研究のまとめ	73
1 授業実践プログラムの有効性についての考察	73
2 研究手法についての考察	73
3 成果と課題	74

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究

～学級（ホームルーム）活動を中心に～

教育相談チーム

I 研究の趣旨

「生きる力」の育成は、学校教育の最重要課題の一つである。しかしながら、「生きる力」を育成するためのカリキュラムの編成は未だ十分とは言い難い。そこで、本研究では、各校種における「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発を学級（ホームルーム）活動を中心に進め、県内各学校に提示することを目的として行う。

II 研究の概要

1 「生きる力」の捉え方と研究方法

本研究では、「生きる力」を社会性＝自己肯定感、他者とかかわるスキルと捉える。また、「生きる力」を育てるための教育相談的手法として、グループ・エンカウンター、ソーシャル・スキル・トレーニング、アサーション・トレーニング、ピア・サポート等の手法を用いる。

2 研究計画

(1) 研究実施期間

1年間を一区切りの研究とし、平成15年度より3年間継続して行う。

(2) 研究の方針

学校の授業に反映する実践的研究を行い、研究成果はWebページに授業実践プログラムとして掲示し広く普及していく。

(3) 研究の内容（平成15年度）

平成15年度は、小学校低学年、中学校第1学年、高等学校第1学年において、プログラムを開発する。

(4) 研究体制

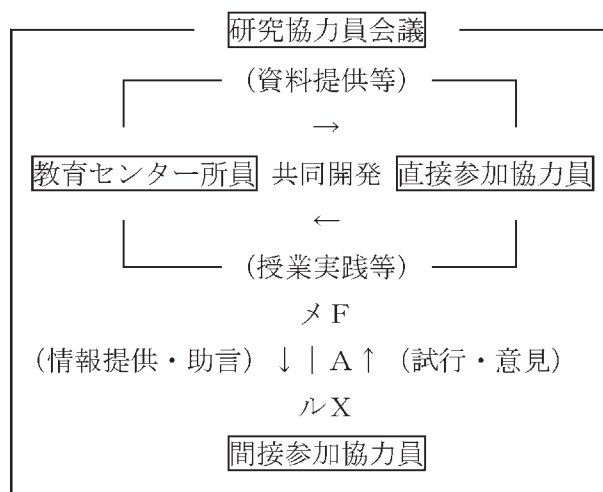
教育センター所員と直接・間接参加研究協力員との共同体制で研究を進める。

① 直接参加の研究協力員とは、プログラムの開発

に当たり、事前の打合せ、事後の反省会の場を設定しながら研究を進める。

② 間接参加の研究協力員とは、メール又はFAXを通してプログラムの情報提供・助言、プログラムの試行と意見の聴取を行う。また、夏季及び冬季の長期休業中に研究協力員会議を設定して、直接話し合う機会を持ち研究を進める。

③ 研究体制略図



3 研究の実際

(1) 基礎調査『児童生徒の「生きる力」の実態及び学級（ホームルーム）活動等における指導の現状に関する調査』

本研究を進めるに当たり、児童生徒の「生きる力」の実態及び学級（ホームルーム）活動等における指導の現状を把握するために基礎調査を実施した。

調査対象は、本年度の専門研修講座受講者240名（不登校等生徒指導講座84名、学校教育相談実践講座1・2班104名、学校教育相談基礎講座52名）とし、最終的に221名（小学校67名、中校74名、高等学校55名、盲聾養護学校25名）から回答を得た。

① 集計結果

単位；人（％）

評 価	調 査 項 目	十分身について			
		十分身についている	ある程度身についている	やや不足している	不足している
1	(1) コミュニケーション能力	15(6.8%)	128(57.9%)	61(27.6%)	17(7.7%)
	(2) アサーション	9(4.1%)	88(39.8%)	104(47.1%)	20(9.0%)
	(3) 共感性	28(12.7%)	126(57.0%)	61(27.6%)	6(2.7%)
	(4) 将来展望性	12(5.5%)	79(35.7%)	103(46.6%)	27(12.2%)
	(5) 集団参加能力	21(9.5%)	111(50.2%)	77(34.8%)	12(5.5%)
	(6) 実戦力	33(14.9%)	107(48.4%)	73(33.0%)	8(3.7%)
	(7) 規範意識	20(9.0%)	85(38.5%)	85(38.5%)	31(14.0%)
	(8) 基本的生活習慣	11(5.0%)	107(48.4%)	86(38.9%)	17(7.7%)
	(9) 自尊感情	12(5.4%)	108(48.9%)	90(40.7%)	11(5.0%)
2	学級（ホームルーム）活動の時間における「生きる力」（上記(1)～(9)の力等）を育成する指導の現状	十分行われている	ある程度行われている	あまり行われていない	全く行われていない
		7(3.2%)	100(45.2%)	106(48.0%)	8(3.6%)
3	「生きる力を育てる授業実践プログラム」が作成された場合の活用要求度	全面的に活用したい	部分的に活用したい	活用の必要性は感じない	
		52(23.5%)	165(74.7%)	4(1.8%)	

② 分析

ア 児童生徒の「生きる力」の実態

調査項目1の9項目について「十分身についている」、「ある程度身についている」を合わせた回答数は平均17.9名（8.1％）であった。すなわち、「生きる力」を調査9項目に限定してみた場合、児童生徒に「生きる力」が十分身についているとの回答は1割未満に留まっている。

イ 学級（ホームルーム）活動における「生きる力を育成する指導の現状

「十分に行われている」という回答数は7名（3.2％）に留まっている。それに対し、「あまり行われていない」、「全く行われていない」を合わせた回答数は114名（51.6％）と過半数であり、学級（ホームルーム）活動における「生きる力」を育成する指導が十分ではない現状が読み取れる。

ウ 「生きる力を育てる授業実践プログラム」が作成された場合の活用要求度

「全面的に活用したい」という回答数は52名（23.

5％）、「部分的に活用したい」は165名（74.7％）であり、「生きる力を育てる授業実践プログラム」に対するニーズの高さがうかがえる。

③ 分析結果から

児童生徒の「生きる力」の実態、学級（ホームルーム）活動における「生きる力」を育成する指導の現状、「生きる力を育てる授業実践プログラム」に対する活用要求度のいずれから、本研究の必要性を確認することができた。

無論、本研究で捉える「生きる力」は社会性＝自己肯定感、他者とかかわるスキルという一定の枠をはめているため、「生きる力」の多様な側面を全て網羅しているものではない。

本調査の結果から、価値観の多様化する現代社会の渦中で子どもたちにどのような力をつけていくのか、毎日の多岐にわたる校務の中で我々教師がいかに工夫すれば「生きる力」を育成する指導が可能になるのかを模索し、実際に活用価値のある授業実践プログラム開発を推進していきたい。

(2) 実践「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発

① 授業実践プログラムと学級（ホームルーム）活動の内容・項目

授業実践プログラムは、学習指導要領の学級（ホームルーム）活動の内容・項目に沿うものとして開発した。

また、各授業実践プログラムごとに、主たるねらいとする内容・項目、関連する内容・項目を明確にし、活用する側が内容・項目から活用可能なプログラムを検索しやすいように配慮した。

② プログラム開発のための授業実践

プログラム開発のための授業実践は、直接参加研究協力員の願いや期待、学級の児童生徒の実態から、どのような内容・項目をねらいとするかをその都度確認すると共に、教育センター所員から授業に取り入れる教育相談の手法を情報提供し、相互に連絡を取り合いながら実施した。

③ 授業実践プログラムの基本構成

授業実践プログラムの基本構成を以下に示す。

1 題材設定の理由

(1) 活動内容・項目

☆主たる内容・項目

★関連する内容・項目

(2) 題材設定の背景及び児童生徒の一般的な実態と現状

(3) 指導法・指導上の留意点

2 指導目標

3 指導計画

(1) 事前・事後指導

(2) 教科指導等との関連

4 指導案

(1) 指導過程

(2) 評価計画（評価の観点）

5 プログラムの展開例

6 児童生徒の反応（「振り返り用紙」等から）

7 授業者の感想

※資料

プログラム化に当たっては、実践した授業を基にし、授業実践校以外の学校・学級でも活用できるように、「題材設定の背景及び児童生徒の一般的な背景と現状」等を考慮し、併せて間接参加研究協力員からの意見も参考にし、範化を図った。

また、単に授業案の提示に留まらず、プログラム開発協力校での指導の様子、児童生徒の反応、研究協力員の感想、使用資料についても掲載することで活用のイメージを具体的にもちやすい内容となるよう工夫した。

④ 授業実践プログラムのWeb掲載

開発した授業実践プログラムは、その都度教育センターのWebページ(<http://www.center.fks.ed.jp/>)に掲載し、教師が随時活用できるようにした。

なお、Webには、前述した内容の授業実践プログラムと併せ、校種共通の「生きる力を育てる授業実践プログラム活用の手引」、校種ごとの「学級（ホームルーム）活動の内容・項目と授業実践プログラムの関連表」を掲載し、プログラム活用上の留意点の確認が行われると共に、検索の利便性が図られるように工夫した。

⑤ 授業実践プログラム活用上の留意点

ア 授業実践プログラム及び資料はプリントアウトしてそのまま使用することが可能な形で掲載してあるが、あくまでも基本型としてのプログラムであるため、自校に合うようアレンジして実施する柔軟性をもった活用が望まれる。

イ 授業実践プログラムは、学習指導要領の学級（ホームルーム）活動の内容・項目との関連表を参照し、主たるねらい、関連するねらいのどちらからでも実施することが可能である。

ウ 実施対象学年は限定的なものではないため、他学年での実施も可能である。

エ 授業実践プログラムは、グループ・エンカウンター等の教育相談の手法を多く取り入れているため、教師の指示を守る、ふざけた発言や行動をしない等の学級のルール作りを十分行った上で実施することが望まれる。（十分なルール作りが行われていない場合、プログラムの実施で傷つく児童生徒が出る危険性があるため）

(3) 小学校における授業実践プログラムの開発

No.	題材名 *実施時期	学級活動の 内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	みんな なかよく *1学期前半	☆(2)③ ★(1)①	① 自分の紹介をクイズにし答えてもらう喜びを持つ。 ② ゲームを楽しみながら、友達への理解を深め、相互の親密性を増す。	① 自己紹介カードの中から、自分が友達に特に「こんな自分を知ってほしい」という内容を○×ゲームのクイズにし、全員の前で紹介し合う。 ② 一人ずつの発表の感想を記録し、友達についてどんな感想を持ったか全体で振り返る。	○ グループ・エンカウンター 「○×ゲーム」
2	気持ちのよい あいさつ *2学期始め	☆(2)② ★(2)③	① 気持ちのよいあいさつについて考え、あいさつの仕方を身に付ける。 ② 様々なあいさつを体験し実践への意欲を持つ。	① 2種類のあいさつを見て、どんなあいさつをしたらお互いが心地よく感じるかを考え合う。 ② ペアで基本的なあいさつの仕方を練習する。 ③ どんなあいさつをしてみたいかを出し合い、グループで具体的な練習をする。	○ ソーシャル・スキル・トレーニング 「あいさつリレー」
3	話の聞き方・話し方 *2学期以降	☆(1)① ★(2)③	① 「すごろくトーク」を通して自分を楽しく語る。 ② 友達の話を聞き、他者と自分が同じことや違うことを知り、仲間意識を持つ。	① 上手な聞き方・話し方について確認し合う。 ② みんなからのリクエストで作成した「すごろくトーク」ゲームを行う。 ③ 楽しく友達の話を聞いたり、自分のことを語ったりできたか全体で振り返る。	○ グループ・エンカウンター 「すごろくトーク」 ○ 相談的技法 (傾聴等)

※「学級活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

① 直接参加研究協力校の実態把握

担任との事前打ち合わせから、学級の実態で特に力を入れて取り組みたい3つの問題をあげてもらった。1つ目は持ち上がりである2年生のこの時期は、友達関係が固定化しがちで他者とのかかわりの少ない子が増えていること、2つ目は家族や友達との日常的なかかわりの中で自然に身に付いていくべき社会性（特にあいさつ）が身に付いていないこと、3つ目はみんなの前での話が苦手な子や自分のことを話したがる子が多いことであった。日ごろこれらについての方策を考えているとのことだった。

② プログラム開発の視点

学級活動の年間指導計画の中から上記の問題に焦点を当て、3つの授業を選択した。さらに低学年という発達段階を考慮し、実践化が図られるような授業プログラム開発を試みることにした。

第1回ではグループ・エンカウンターを取り入れゲーム感覚で楽しみながら、友達に関心を持たせることのできる内容を、第2回ではソーシャル・スキル・トレーニングを取り入れ、どんなあいさつが気持ちのよいあいさつかを考えさせ、その場で実際に練習する内容を、第3回では相談的技法で用いられる話の聞き方・話し方に触れ、相手が話をしたくなる話の聴き方や自分が話をして心地よい気持ちを体

験する内容を行うことにした。

③ 学級活動の内容・項目との関連

「小学校学級活動の内容・項目」	
(1) 学級や学校の生活の充実と向上に関すること	
① 学級や学校における生活上の諸問題の解決	[No1★] [No3☆]
② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理	
(2) 日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること	
① 希望や目標をもって生きる態度の形成	
② 基本的な生活習慣の形成	[No2☆]
③ 望ましい人間関係の育成	[No1☆][No2★][No3★]
④ 学校図書館の利用	
⑤ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成	
⑥ 学校給食と望ましい食習慣の形成	

④ 授業の実際

ア プログラム案1「みんななかよく」

〔授業の内容〕

事前の準備として、自己紹介カードを1週間前から掲示しておいた。本授業では、その中から1つを「○×ゲーム」の問題にし、全員の前で紹介し合った。その際、一人一人の友達に対しての自分の思いを振り返らせ、今までかかわりが薄かった友達への興味やよさについての気付きを図り、友達関係の幅を広げるきっかけづくりをした。

〔児童の感想〕

- ・ 自分のことを分かってもらえてとてもうれしかった

た。

- ・ 学級活動の勉強の中で一番楽しかった。
- ・ もっともっとみんなのことが知りたいです。

〔参観者感想〕

クラス全体の友達のことについて「分かった（心の中でそうか）」というような態度が見られとてもよい機会だ



と思った。厚みを持つ〈回答に興味を示す子ども達〉た学級づくりができるように感じた。

〔授業者自評〕

グループ・エンカウンターを学級活動として取り上げるのは、授業としての流れに無理もなく実践的でよいと思った。単なる自己紹介でなく、グループ・エンカウンターの「〇×ゲーム」として取り入れたことにより、興味を持って取り組めたと思う。また、友達を知ることが正解につながるということは、今の子どもにピッタリした方法だと思った。

〔成果と改善の視点〕

グループ・エンカウンターは、ゲーム的な要素が多いため、大変親しみやすかった。内面に触れる内容は低学年には難しいが、きちんとねらいを伝えることと感想を出し合う時間をきちんと確保することで学級活動として取り入れることは可能であると考えられる。

イ プログラム案2「きもちのよいあいさつ」

〔授業の内容〕

本授業では、事前調査で気持ちのよいあいさつができないという7割の児童にも抵抗なくあいさつができるよ



う〈あいさつリレーをする子ども達〉う、基本練習、応用練習と段階を踏んで行った。さらに「こうすればいいんだ」という自信につながるまで繰り返し具体的に行った。

〔児童の感想〕

- ・ 心がいっぱいこもっていてうれしかったです。
- ・ はずかしかったけどがんばってやれたので、家でもやりたいです。

〔授業者自評〕

今回、授業を行ったことで、今まで小さい声でしかあいさつができなかった子や恥ずかしくてほとんどあいさつしなかった子の意識に変化が見られていた。とてもよいきっかけづくりになった。さらに定着を図る意味でゲームを再度行ったり、チェックカードの活用を図ったりしながら、今後も継続指導を行っていきたい。

〔参観者感想〕

ソーシャル・スキル・トレーニングは、流れがはっきりしているし、取り組みやすいことが分かり、ぜひ自分の学級でも実践してみたいと思った。また、繰り返しゲーム感覚で行う中で抵抗なく行えるので、日常化を図る上でもとても効果的だと思った。

〔成果と改善の視点〕

ソーシャル・スキル・トレーニングの流れと授業の流れを合わせて行っても、無理がなくスムーズに流れることが分かった。また、実践化を図る上で授業の中でトレーニングができるという点で即役立つと好評であった。練習場面では形式的にならないよう声かけをしたり、実態に応じた練習方法を工夫したりするとさらに効果が上がると考えられる。

ウ プログラム案3「話の聞き方・話し方」

〔授業の内容〕

導入で調査結果を示し、話の好きな子も嫌いな子もみんなに真剣に聞いてもらいたいと願っていることに気づかせた。さらに話への興味を持たせるための工夫として、みんなからのリクエストをもとにした「すごろくゲーム」を作成して行った。自己を語り、友達とコミュニケーションを図ることの楽しみや心地よさを味わわせ、お互いの交友を深める機会にした。授業の終わりの振り返りでは、聞き方・話し方について言語的な面だけではなく、どんな気持ちになったかという内面にも視点を当て、感想を出し合った。

〔児童の感想〕

- ・ 言いたいことがはっきり言えるようになった。
- ・ みんなのことが分かりとてもうれしかった。



〈すごろくトークを楽しむ子ども達〉

- ・ 友だちが静かに話を聞いてくれたので、とってもうれしかったです。

[授業者自評]

教師が数分入ったことで児童はとても喜んでいました。教師と児童との人間関係づくりにおいても有効であった。すごろくは慣れ親しんでいる遊びなので知らず知らずのうちに楽しみながら自分のことが言えたり相手の話を聞いたりする学習ができていた。低学年ということもあり、上手な話し方・聞き方を丁寧に押さえたこともよかった。

[参観者感想]

相談的「技法」を授業に取り入れることで、自然なうなずきが授業前より増え、ゲームをしながら楽しく自分のことを話したり、友だちの話を聞いたりすることにより、お互いの交流が図れた。ゲーム感覚で学習することができるため、実践化を図る上でも有効であった。

[成果と改善の視点]

2年生であっても非言語面での言葉が出てきた。また、ゲーム的な要素を加えたことで楽しみながら相手の話に耳を傾けることができることや、話をよく聞いてもらえて「いい気持ちになる」などの感想が出てきた。低学年から、単なる訓練的な要素ばかりでなく、心情面の内容（相談的手法である「技法」的なもの）についても触れながら、話の聞き方・話し方を指導していくことがより定着を図る上で有効であると考えられる。また、この授業に関しては、国語や特別活動の時間等、幅広い展開が考えられる。

⑤ プログラムの開発



開発したプログラムは福島県教育センターのホー

ムページ(<http://www.center.fks.ed.jp/>)からダウンロードできるようにした。上記はその一部である。

⑥ 研究協力員との連携

ア 直接参加の協力員との連携

直接参加の協力員の学校が近かったことから、すぐ打ち合わせ時間をとったり、調査等を届けに行ったりと、連絡が密にできた。また学年主任であったことから同学年の教師の協力・応援がもたらされたこと、さらには全校への働きかけで、他学年からも改善への意見をもらえたこと、プログラム案3は、校内の現職教育としても取り組んだこと等、広く連携が図られていった。

イ 間接参加の協力員との連携

間接協力員においては、その都度の意見交換は難しかったため、協力員会議を中心にした連携となった。

ウ 研究協力員会議

長期休業中2回の会議は、直接・間接協力員から実践での苦労や日ごろの定着を図る上での配慮等が聞け、研究を深める上で大変参考になった。直接協力校とは違った環境における実践という意味でも複数学校からの意見が加わることでさらに幅のある研究になったと思われる。

⑦ 今後の研究の方向性

直接参加協力員の教師が3回の授業を通して、子ども達の様子が次のように変化してきたと感想を述べていた。

ア 子ども達が生き生きと活動するようになった。

イ 教師の話を聞いているだけの受け身の授業から、楽しんで活動できる参加型の授業になり、子ども達が次の学級活動を楽しみにするようになった。

ウ いままで話して聞かせても実践に移すことが難しかったあいさつ等を子ども達が自主的に行うようになった。

以上から低学年においても、学級活動に教育相談的手法を取り入れることは思ったほど抵抗がなく、今後さらに幅を広げた研究が十分期待できると思われる。その際、ゲーム的要素に流れて楽しさだけに終始しないよう、指導者は十分ねらいやルールを確認した上で行うことを大切にしたい。

(4) 中学校における授業実践プログラムの開発

No.	題材名 *実施時期	学級活動の内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	自分を知ろう (人と個性) *1学期後半以降	☆(2)ア② ★(2)ア⑤ ★(3)⑤	他者との肯定的なかわりをおとして、自己肯定感や温かなリレーションを促進し、自他の個性の理解と尊重を図る。	① ワークシートに自分の長所を記入する。 ② 友達の長所を「言葉のプレゼント」に記入し、交換する。 ③ 「言葉のプレゼント」を読み、感想を書く。	○グループ・エンカウンター 「言葉のプレゼント」 ○ジョハリの窓 ○ポジティブフィードバック
2	学校生活のなかで(私たちにできること) *学期末または9月頃(前期終盤)	☆(1)① ★(1)②	自分たちのクラスのよさを考えていく活動をおとして、生徒同士の相互理解や学級の支持的風土を高め、進んで学級生活の諸問題を解決しようとする態度を養う。	① 予めクラスの好きなところを記入しておく。 ② クラスのよさをPR文で表現し、紹介する。 ③ クラスの課題解決に向け、具体策を話し合い、発表する。	○グループ・エンカウンター 「セルフモニタリング」 ○質問 ○明確化
3	有意義な冬休みにしよう *2学期末	☆(2)イ① ☆(3)② ★(2)ア② ★(3)①	互いの考えや意見を発表・聴取する活動をおとして、3学期や新年の抱負をもち、冬休みの生活設計・学習計画に生かそうとする態度を養う。	① トーク1で自分の趣味や好きなもの(こと)について話をする。 ② トーク2で2学期の振り返りと冬休みや新年について話をする。	○グループ・エンカウンター 「さいころトーク」 ○自己開示

※「学級活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

① 直接参加研究協力校の実態把握

人間関係づくりを不得手としている生徒が多く見受けられ、教師は「人間関係を結ぶ力の育成」を学級経営上の課題と捉えている。

② プログラム開発の視点

直接参加研究協力校では、教育相談チームとの共同研究を校内研修の活性化につなげ、グループ・エンカウンターの実践を通して「望ましい人間関係をはぐむ指導・支援のあり方」を追究する。

本プログラム開発においては、「自他の理解能力」「コミュニケーション能力」「自己肯定感」の獲得を軸とした「人間関係形成能力の育成」に視点をあて、学級活動の授業実践に取り組む。

③ 学級活動の内容・項目との関連

「中学校学級活動の内容・項目」	
(1) 学級や学校の生活の充実と向上	
① 学級や学校における生活上の諸問題の解決	[No2☆]
② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理	[No2★]
③ 学校における多様な集団の生活向上	
(2) ア 個人や社会の一員としての在り方	
① 青年期の不安や悩みとその解決	
② 自己及び他者の個性の理解と尊重	[No1☆][No3★]
③ 社会の一員としての自覚と責任	
④ 男女相互の理解と協力	
⑤ 望ましい人間関係の確立	[No1★]
⑥ ボランティア活動の意義の理解	
(2) イ 健康や安全	
① 健康で安全な生活態度や習慣の形成	[No3☆]
② 性的な発達への適応	
③ 学校給食と望ましい食習慣の形成	

(3) 学業生活の充実, 将来の生き方, 進路の適切な選択

- ① 学ぶことの意義の理解 [No3★]
- ② 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用 [No3☆]
- ③ 選択教科等の適切な選択
- ④ 進路適性の吟味と進路情報の活用
- ⑤ 望ましい職業観・勤労観の形成 [No1★]
- ⑥ 主体的な進路の選択と将来設計

④ 授業の実際

ア プログラム案1「自分を知ろう(人と個性)」 [授業の内容]

「言葉のプレゼント」というエクササイズを用いながら、自分の長所を考えたり、他者の長所を考え、伝えたりする活動を行った。自分の長所を考える活動では担任の例を提示し、他者の長所を考える活動では、補助資料として「長所を表す言葉マップ」を準備した。プリントを交換して互いに読み合ったり、その感想を書き、発表したりする活動をおとして、自分の長所に気づき、自己理解や自己受容を高めている生徒の姿が見られ、今後の進路学習の素地にもなった。

[生徒の感想]



- ・ グループ以外の他の人にも書いてあげたい。自分のよいところが改めてわかり、やってよかった。

- ・ 相手の長所を書くことで、相手のことがさらにわかったような気がした。互いの長所を認め合うことが大事だと思った。

〔授業者及び参観者の感想〕

- ・ 他者に褒められることにより、学級の雰囲気がとても柔らかくなった。褒めるということがこんなに効果があるのかと改めて実感した。
- ・ (導入部の) 教師の自己開示は、生徒とのリレーション形成や学習の意欲付けに有効であると思った。教師としての顔ばかりでなく、一人の人間としての顔(見方・考え方・生き方・失敗談等)も大切にしたいと感じた。

〔成果と改善の視点〕

- ・ 担任の例を提示したり、補助資料として「長所を表す言葉マップ」を準備したりしたため、ほとんどの生徒が自他の長所を捉えることができた。
- ・ 他者の長所を書けないでいる生徒への言葉かけ、指導援助の在り方を事前に十分に検討しておく必要がある。また、不安や抵抗の少ないグループ編成(生活班や男女別等)や、どの場面で編成するかなど配慮したい。(他者の長所をプリントへ記入してからグループになる等)
- ・ 事後として、日常場面において、互いのよさを伝え合う「いいところメッセージ」などを取り入れると、より効果的である。

イ プログラム案2「学校生活のなかで(私たちにできること)」

〔授業の内容〕

「みんなでつくるうよりよいクラス」というエクササイズを用い、自分たちのクラスのよさを考えPR文にしたり(モニタリング2)、もっと



いいクラスにするための突破口(モニタリング4)を話し合ったりした。生徒たちは、クラスの課題を明らかにし、解決に向かって具体策を話し合うことで、後期の学級組織づくりや活動計画づくりに見通しを持つことができた。

〔生徒の感想〕

- ・ 今まで学級はまとまりがなく、けじめがないと思っていたが、このセルフモニタリングをやって改めてこの学級のいいところを見つけられた。
- ・ 今まで深く学級のことを考えたことがなかったので、今日のような機会に考えることができてよかった。いろいろよいところも見つかったし、突破口もできあがった。これらの突破口を目標に学級がさらによくなるようにがんばりたい。

〔授業者及び参観者の感想〕

- ・ はじめに学級のよさを見つけることで、自分たちの学級にもこんなよさがあったのだと実感し、よりよい学級にするために積極的に意見を出し合い、改善策を考えていた。まとまりが出てきた。
- ・ グループ内で協力し合い、学級のよいところを出せていた。また、マイナス面も出されたが、「がんばっていこう」という風に、学級全体の志気が高まった。

〔成果と改善の視点〕

- ・ 事前にモニタリング1(学級のよさ)と3(学級の課題)を考えさせておいたため、本時の中心活動であるモニタリング2(学級のPR文)と4(突破口)についての話し合いが活発にできた。
- ・ モニタリング4(突破口)については、実践に移す段階でどう指導援助するかを明確にしておく必要がある。

ウ プログラム案3「有意義な冬休みにしよう」

〔授業の内容〕

「さいころトーク」というエクササイズを用い、トーク1では趣味や好きなこと、トーク2では2学期



の振り返り、冬休みや新年の抱負について、さいころの目に応じて話をした。さいころを転がすことによって生じるうち解けた雰囲気の中で、自分の思いや抱負などを発表しあった。トーク2終了後、心に残ったことをグループで話し合い、代表者が発表した。まとめでは、冬休みの目標と新年の抱負をワークシートに記入した。(このワークシートは後日教室に掲示された。)

[生徒の感想]

- ・ さいころを使った話し合いの方法も楽しかったし、話の中で互いの気持ちや冬休みの過ごし方などを話し合っ、自分もしてみたいなあというものが見つかってよかった。
- ・ 最初はどのような感じになるのかな？と少し心配だったけど、実際やってみたら結構おもしろかった。みんなの話を聞きながら、今日話したことをちゃんと行動に移さなくてはと思った。

[授業者及び参観者の感想]

- ・ 普段おとなしい生徒もいい表情で発表し、具体的な目標も立てることができた。
- ・ 予想以上に盛り上がり、活発に活動していた。学期に1回は実施したい。年度始の学級活動や生徒会の話合い活動に取り入れてみたい。

[成果と改善の視点]

- ・ 事前調査を実施していたため、「トーク1」から「トーク2」へのつながりがうまくいった。
- ・ 「グループでの話し合い」と「冬休みの目標・新年の抱負」の間に教師の講話を入れ、冬休みへの意識付けを強化することもできる。

⑤ プログラムの開発



開発したプログラムは福島県教育センターのホームページ (<http://www.center.fks.ed.jp/>) からダ

ウンロードできるようにした。左記はその一部である。

⑥ 研究協力校(員)との連携

ア 直接参加の研究協力校との連携

- ・ 研究協力員(研修主任)を中心に、指導案の作成・検討→授業実践→事後協議会の実施という一連の取組みを組織的に行うことができた。
- ・ 学年全クラスでの授業実践により、さまざまな授業の展開例を収集することができ、プログラム開発の参考になった。
- ・ 近隣小学校との授業研究会を実施し、研究の成果と啓蒙に努めた。
- ・ 現職教育と連動し、授業実践のために教育相談の手法を提供するとともに、校内実技研修会への支援など、協力校の要請に応じた。

イ 間接参加の研究協力員との連携

- ・ 直接参加協力校の授業実施後、プログラム案をもとに授業を実践した間接参加協力員から感想や改善点の聞き取りをした。

ウ 研究協力員会議

- ・ 研究協力員会議では、各校の実態を踏まえた取組みについて情報交換を中心としながら、「教育相談の手法を用いた授業実践」「年間指導計画への位置付け」「校内での協力・連携」「他校との連携・ネットワーク」「協力員間の連携・ネットワーク」等について協議を行った。
- ・ 研究協力員会議をとおして、「自己肯定感を高める手だてとその実践」、「養護教諭やスクールカウンセラーとのTTによる健康・安全指導の年間指導計画への位置付け」、「予防・発達(開発)的な指導援助の計画的・継続的な実践」等について積極的に取り組んでいきたいという意見が数多く出された。

⑦ 今後の研究の方向性

- ・ プログラム作成までのプロセスをより効率的なものとなるよう見直しを図る。
- ・ 間接参加研究協力員との情報交換を計画的に進める。プログラム作成までの指導案段階、授業実施後の授業者の感想等、それぞれの段階で意見交換できるための環境整備を進める。

(5) 高等学校における授業実践プログラムの開発

No.	題材名 *実施時期	ホームルーム活動の内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	私の就きたい職業は…… * 1学期半ば (2～3時間展開)	☆(2)ア② ☆(3)④ ★(3)⑥	① 自己理解・他者理解を深め、他者の考えを尊重する態度を身につける。 ② 職業に関する自分の興味の方向性を知る。	① 222種の「職業カード」を興味の有無で分類する。 ② 「興味がある」職業を内容毎に分類しながら台紙に貼り、小グループ毎にタイトルをつける。 ③ ②を友人と見せ合いながら自分の考えを話す。	○KJ法 ○グループ・エンカウンター 「自己理解・他者理解」
2	クラスについて思うこと * 通年 (複数回展開)	☆(1)① ☆(1)③ ★(2)ア③	① クラスの一員としての自分の在り方について考える。 ② クラスの現状について考え、改善すべき点に気付く。	① クラスの現状について思うことを自由に書く。 ② 教師は意見をまとめ、後日クラス通信上で発表する。 ③ 生徒は②を読み、それに対する意見を書く。 以下この取り組みを複数回繰り返す。	○紙上討論 ○クラス通信
3	デートDVってなに？ * 2学期以降 (1～2時間展開)	☆(2)イ② ★(2)ア④ ★(2)ア⑤	① DV・デートDVについて理解する。 ② 友人がデートDVの被害者・加害者になった時の対応法について考える。	① DV・デートDVについて知っていることを発表する。 ② 2種類の「チェックシート」に答える。 ③ デートDVのロールプレイを見て、被害者役・加害者役にメッセージを送る。	○ロールプレイ ○KJ法
4	ジェンダーってなに？ * 2学期以降 (1～2時間展開)	☆(2)ア④ ★(2)ア① ★(2)ア⑤	① 社会や自己の中にあるジェンダーに基づく偏見に気付く。 ② 望ましい男女の在り方について考える。	① 前時を受け、なぜ彼氏は暴力をふるうのか、なぜ彼女は別れないのかについて考える。 ② ジェンダーについて考えるとともに、ロールプレイを通して望ましい男女の在り方について考える。	○ロールプレイ ○アサーション・トレーニング

※「ホームルーム活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

① 直接参加協力校の実態把握

明るく元気な生徒が多く学校行事等では盛り上がるクラスである。時折羽目を外しすぎる生徒、担任や同級生に対しぞんざいな態度を取る生徒がいる。

② プログラム開発の視点

「他者を思いやることのできるクラスにしたい」という担任の思いを受け、グループ・エンカウンターを考えやロールプレイ等を取り入れながら、自己理解・他者理解が深まるよう配慮した。また、テーマについてはその時々生徒の実態を把握しながら、生徒にとって必要かつ身近な題材を取り上げることとした。

③ ホームルーム活動の内容・項目との関連

「高等学校ホームルーム活動の内容・項目」
(1) ホームルームや学校の生活の充実と向上
① ホームルームや学校における生活上の諸問題の解決 [No2☆]
② ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動
③ 学校における多様な集団の生活の向上 [No2☆]
(2) ア 個人及び社会の一員としての在り方生き方
① 青年期の悩みや課題とその解決 [No4★]
② 自己及び他者の個性の理解と尊重 [No1☆]
③ 社会生活における役割の自覚と自己責任 [No2★]
④ 男女相互の理解と協力 [No3★] [No4☆]

⑤ コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立 [No3★] [No4★]
⑥ ボランティア活動の意義の理解
⑦ 国際理解と国際交流
(2) イ 健康や安全
① 心身の健康と健全な生活態度や習慣の確立
② 生命尊重と安全な生活態度や習慣の確立 [No3☆]
(3) 学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定
① 学ぶことの意義の理解
② 主体的な学習態度の確立と学校図書館の利用
③ 教科・科目の適切な選択
④ 進路適性の理解と進路情報の活用 [No1☆]
⑤ 望ましい職業観・勤労観の確立
⑥ 主体的な進路の選択決定と将来設計 [No1★]

④ 授業の実際

ア プログラム案1「私の就きたい職業は……」

[授業の内容]

222種の「職業カード」の中から興味がある職業を選び、内容が似ている職業毎にグループ化しながらカードを台紙に貼った。4人組の班内でその台紙を見せ合いながら自分の考えを発表し、代表がクラス全員の前で自分の考えを発表した。

[生徒の感想]

- ・ 同じ職業を選んでいても、感じることや考える

ことが違うことがわかった。

- ・ 自分の興味関心がどこにあるかわかってきた。それに自分の夢を叶えるにはどうすればいいかがわかったのよかったです。



〔授業者自評〕

- ・ 生徒達はのびのびと授業に参加していた。取り組みの悪い生徒の存在も予想していたが、意外に素直に取り組んでいた。
- ・ 「ふりかえりカード」やその後の感想で「互いの興味の違いが分かってよかった」とあった。「他者を尊重する」ことはできたのではないかと思う。

〔成果と改善の視点〕

地域差、学力差のある6校7クラスで同一プログラムを実施した。どの学校においても生徒の反応の良さは共通していたが、222種の「職業カード」については、選択肢が「少ない」という意見と「多すぎる」という相反する意見が出された。また「生徒自身の職業に関する知識が少ないため、一つ一つ質問に答えねばならず時間が足りなかった」との意見も寄せられ、学校毎のアレンジの必要性が再確認された。



との意見も寄せられ、学校毎のアレンジの必要性が再確認された。

イ プログラム案2「クラスについて思うこと」

〔授業の内容〕

第1時ではクラスの現状について思うこと（善悪両面）を指定の用紙に自由に書かせた。その際個人批判はしないことを徹底した。第2時では前時に出た意見を掲載したクラス通信を配布し、それを読んだ感想を新たに書かせた。以後、一連の取り組みを繰り返した。

〔生徒の感想〕

- ・ みんながクラスの状態や先生に対してどう思っているのかわかったし、同じような意見の人がいたこともわかったのよかったです。
- ・ 授業中うるさかった人が静かになった。

〔授業者自評〕

- ・ 生徒自身がクラスの問題点を見出し、改善しようとする意欲が見られ、充実した時間となった。

〔成果と改善の視点〕

「他者尊重ができるようになってきた」「クラスの雰囲気が変わってきた」等の意見が協力員から寄せられた。一方「一つのテーマをどれくらい継続するかの見極めが難しい」という問題点も提起された。

ウ プログラム案3「デートDVってなに？」

〔授業の内容〕

親密なカップル間における暴力的なつきあい（以下「デートDV」）が高校生の間でも問題になっていること、誰もがDV（domestic violence）の被害者・加害者になっても不思議ではないこと等をチェックシートを用いて確認させた。次のステップでは、



同級生が演じる暴力的なつきあい方のロールプレイを見て「友人がデートDVの被害者・加害者だったらどうするか」について考えさせた。

〔生徒の感想〕

- ・ こんなことがあるなんて全然わからなかった。
- ・ 彼女が暴力を我慢してまで一緒にいたら彼氏はそれが間違いであることに気付かないと思う。
- ・ 彼女は、彼氏に暴力をふるわれて自分に自信がなくなっているから別れられないんだと思う。
- ・ 彼氏なりの愛情表現の仕方だと思う。その表現の仕方が偶然暴力ただただで、その度が過ぎるとDVとかになるんだと思う。
- ・ 実際に被害者・加害者役を演じてもらうことで、2人の気持ちがよくわかった。

〔授業者自評〕

- ・ 生徒にとっては興味があるテーマだったようで、題材の設定は適切であった。被害者・加害者へのメッセージを各生徒が付箋に書いてそれをグループで話し合いながら台紙に貼り付ける、という手法を用いたが、グループでの「話し合い」よりも取り組みやすい方法であったように思う。



〔成果と改善の視点〕

協力員からは「生徒たちの反応もよく、手応えを

感じることができた有意義なテーマであった」との意見が出されたが、「チェックシート」については今までの認識を否定された時に生じた「驚き」をより丁寧に時間をかけて取り扱う必要があるのではないか、との指摘があった。

エ プログラム案4「ジェンダーってなに？」

[授業の内容]

まず前時に質問した「この彼氏はなぜ彼女に暴力をふるうと思うか」「この彼女はなぜ暴力をふるう彼氏と別れないと思うか」に対する生徒の回答をプリントで示しながら、「両者とも自分の感情を表す方法が間違っている」ことを引き出した。次にジェンダー（社会的文化的に形成された性差）について解説しながら2人がとった方法・態度の背景にあるものについて考えさせた。

主活動では「彼氏」「彼女」「観察者」3人1組によるロールプレイを通して、不適切な彼氏・彼女の対応と適切な対応の2つを体験させ、相手を尊重する話し方について考えさせた。具体的には「だからお前はダメなんだ」と相手を責める「Youメッセージ」と「そういうことをされると僕は悲しい」と自分の感情を伝える「Iメッセージ」を取り上げ、どちらがジェンダーによる偏見を含んだ言い方か、自分だったらどちらの言い方をしたい（されたい）か、について考えさせた。



[生徒の感想]

- ・ DVとジェンダーがつながっていることがわかった。私の中にもジェンダーに基づいた考えがあるのでこれから気をつけたい。
- ・ 自分の気持ちを伝えることはある意味ですごく難しいことだと思った。その上で「Iメッセージ」「Youメッセージ」は重要だと思った。

[授業者自評]

- ・ 全員参加のロールプレイは初めての試みだったが概ねよく活動しており、ロールプレイを通して気づくことも少なくなかったようだ。
- ・ ジェンダーについて既に他教科で学習していたこともあり、レディネスを備えた生徒が多かった。

[成果と改善の視点]

「Iメッセージ」「Youメッセージ」に興味を示した生徒が多かったことは予想以上の成果であったが、その反面「ジェンダーに基づく偏見」や「彼氏が暴力を『選択』している」ことについて取り扱う時間が少なくなってしまった。

⑤ プログラムの開発



開発したプログラムは福島県教育センターのホームページ (<http://www.center.fks.ed.jp/>) からダウンロードできるようにした。上記はその一部である。

⑥ 研究協力員との連携

ア 直接参加の協力員との連携

担当所員が手法を提示し、具体的な進め方や資料についてはメールで連絡を取り合いながら協力員と担当所員で一緒に考えた。

イ 間接参加の協力員との連携

担当所員が指導案並びに資料を提示し、具体的な進め方については協力員の判断に委ねた。プログラム実施後にホームルームの様子、生徒並びに協力員の感想をメールやFAXで送付してもらった。

ウ 研究協力員会議

協力員それぞれから貴重な感想や意見が寄せられ、より使いやすいプログラムを構築する上で非常に有効な時間となった。会議時間の延長を望む声も聞かれるほどだった。

⑦ 今後の研究の方向性

人間関係づくりや各種スキルトレーニング等を含む、学校現場のニーズに合った高校2・3年生対象のプログラム作りを進めていくことが必要である。

Ⅲ 研究のまとめ

1 授業実践プログラムの有効性についての考察

(1) 事前・事後調査の結果分析から

各校種において、事前・事後調査として、プログラム開発協力学級（学年）を対象に「自己肯定度インベントリー」（自己肯定感について25項目の質問を行う調査。25点満点）を実施した。この調査を採用した理由としては、本研究では「生きる力」を自己肯定感、他者とかかわるスキとして捉えており、特に前者を「生きる力」の根底にあるものと考えるためである。

研究協力校の中学校（1学年，8学級，220名）においては，13.61（事前）→13.82（事後）と+0.21の結果が得られた。

(2) 児童生徒の反応・感想から

児童生徒の多くは教育相談の理論・手法を取り入れた本プログラムに対して、「授業が楽しかった」という感想を述べていた。楽しさ＝授業の充実とは一概には言えないが、授業の中心に児童生徒の活動が盛り込まれているスタイルが児童生徒の意欲を喚起するものであったことは確かである。

また、本プログラムを継続的に実施することで、児童生徒が個人としてだけでなく、集団としても成長する姿が見られた。集団の雰囲気が和み、他者を肯定的に見る、級友の考えを傾聴するなどの望ましい変容が回を重ねるごとに感じられた。

(3) 研究協力員の感想から

授業実践プログラムの共同開発に当たった直接参加研究協力員からは、苦労はあったが成果も大きかったという感想を得た。「生きる力」の育成については従来も力を注いできたが、学級（ホームルーム）の活動の中でその力を系統的に育成する道筋が見えてきたという声も聞かれた。

また、間接参加研究協力員からも、プログラムの試行、研究協力員会議での協議を通して、本研究の目標とその手法について肯定的な評価を得た。一方で、プログラムの範化や普及などについて、今後の研究の指針や課題改善の参考となる貴重な意見も数多く寄せられた。

2 研究手法についての考察

(1) 研究協力員との共同研究体制に関して

本研究の最終的な目標は、開発した授業実践プログラムを一人でも多くの教師に活用してもらうことにある。したがって、プログラムは学校という場でニーズが高くかつ活用しやすいものでなければならない。

そのため、プログラムの開発・修正に当たっては、学校で児童生徒を目の前に毎日の指導をしている研究協力員との共同研究という体制で行った。

授業実践の日程を組む困難、指導案を練り上げるための度重なる連絡の苦労などもあったが、共同研究の体制により、ねらいに即したプログラムを開発することができた。

(2) 教育相談の手法の導入に関して

従来の学級（ホームルーム）活動の授業は、概して教師からの指導に偏りがちではなかったろうか。

本研究では、教育相談の手法を導入することで、授業のねらいに応じて、児童生徒の活動を効果的に生かす学級（ホームルーム）活動の授業実践プログラムを開発することができた。

ただし、児童生徒が活動（疑似体験）を通し、考え、感じ、分かち合い、「生きる力」（自己肯定感や他者とかかわるスキル）を高めていくためには、活動がルールにのっとり行われることが必須の大前提である。

教育相談の手法が生かされる否かは、日常的な指導の積み重ねが重要であることを取って付言する。

(3) Webの活用に関して

冊子による研究成果の頒布には物理的な限界があったが、Web掲載はその制限がないため、より多くの教師に情報を提供することが可能になった。しかしながら、実際には教育センターのWeb利用状況が十分ではない現実もある。そのため、教育センターから学校への研究に関するPRを積極的に推進すると共に、各学校におけるコンピュータの使用環境の整備を促進していく必要がある。

また、Webの活用は迅速な情報提供が可能であるという利点もある。授業実践プログラムの掲載もできる限り迅速に行えるよう努めていきたい。

3 成果と課題

(1) 成果

- ① 教育相談は、問題解決的機能、予防的機能、発達の機能の三つの機能をもつが、「生きる力を育成するための授業実践プログラム」を開発することによって、教育相談のもつ予防的・発達（開発）的機能を具体的に生かす道筋が見えてきた。
- ② 研究協力員と教育センター所員の共同研究という研究体制で研究を進めてきた結果、よりニーズと有効性の高い、しかも活用しやすい授業実践プログラムの開発ができた。
- ③ 研究の進捗状況、開発した授業実践プログラムをWebに掲載することにより、随時情報を提供し、より活用しやすい形で資料を提供することが可能になった。

(2) 課題

- ① 本年度は研究初年度であるため、授業実践が1学期後半からの開始となった。次年度は、学級づくり（人間関係づくり）の時期であり、「生きる力」の育成に効果的である1学期前半に授業実践を開始し、この時期に活用できる授業実践プログラムの開発も進めていきたい。
- ② 授業実践プログラムの開発には、教育相談チームが従来研究をしてきたグループ・エンカウンター、ソーシャル・スキル・トレーニング、アサーション等の教育相談の手法を用いたが、更にストレス・マネジメント等の新たな手法の研究も進め導入に努めていきたい。
- ③ 間接参加研究協力員からは開発した授業実践プログラムへの意見を数多くいただいたが、今後は間接参加研究協力員が各学校で実施している授業も吸収・発展させ、相補的情報提供によって、授業実践プログラムの充実を図っていきたい。

(3) 次年度以降の研究の見通し

① 研究の内容

平成16年度は、小学校中学年、中学校第2学年、高等学校第2学年においてプログラムを開発する。

研究最終年度の平成17年度は、小学校高学年、中学校第3学年、高等学校第3学年においてプログラムを開発する。

これにより、本年度を含め3年間をかけて、小学校、中学校、高等学校の全ての学年における授業実践プログラムを開発していく。

② 研究体制

平成16年度、17年度共に、本年度同様直接参加及び間接参加の研究協力員を募り、共同研究の研究体制で授業実践プログラムの開発を進めていく。

ただし、教育課程の中にプログラムの開発、プログラムの試行を取り入れてもらうため、更には1学期前半から授業実践を開始するため、平成15年度内に募集は開始する。

なお、間接参加研究協力員に関しては年間を通して募集し、特に各学校で実施している授業について情報を提供してもらい、相補的にプログラムの充実を図る。また、養護教諭の先生方にも積極的に参加を募り、健康や安全に関する内容・項目における授業実践プログラムの開発に協力を求める。

③ 研究の普及

Webへの掲示を継続的に進めていくと同時に、教育センターの研修者への冊子の頒布等を通して、研究のPRを積極的に進め、授業実践プログラムの活用が広く図られるように努める。

〈参考・引用文献〉

- 1) 児童生徒の社会性の育成に関する調査研究
(埼玉県立総合教育センター 平成13年)
- 2) ニュー・カウンセリング 伊東博著
(誠信書房 1983年)
- 3) ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校
國分康孝監修 (図書文化 1999年)
- 4) エンカウンターで学級が変わる Part 3 小学校編
國分康孝監修 (図書文化 1999年)
- 5) エンカウンターで学級が変わる Part 1～3 中学校編
國分康孝監修 (図書文化 1999年)
- 6) エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集 國分康孝監修 (図書文化 1999年)
- 7) エンカウンタースキルアップ ホンネで語る「リーダーブック」 國分康孝他編 (図書文化 2001年)
- 8) デートDV 防止プログラム実施者向けワークブック
山口のり子著 (梨の木舎 2003年)

◎指導主事の個人研究

1 小学校総合的な学習の時間

小学校英語活動の在り方についての調査研究	76
I 研究の趣旨	76
II 調査研究の概要	76
1 小学校英語活動の実態	76
2 研究協力校における調査分析	76
III 研究のまとめと今後の課題	79
1 入門期の指導の在り方	79
2 今後の課題	79

2 小学校算数科

子どもたちの「確かな学力」の向上を目指し、「個に応じたきめ細かな学習指導」 を実施するための基礎研究（小学校算数）	80
I 研究の趣旨	80
II 研究の概要	80
1 研究の基本的な考え方	80
2 調査対象	80
3 学力到達度調査結果の分析・考察	80
4 研究の概要	80
III 研究のまとめ	83
1 この研究の意義	83
2 今後の研究の方向性	83

3 中学校保健体育科

簡単なディベートを組み込んだ中学校保健の授業 ー討論で喫煙問題の見方・考え方を深めるー	84
I 研究の趣旨	84
II 研究の概要	84
1 単元の設定	84
2 単元設定の理由	84
3 学習過程の工夫	84
4 授業の実際	84
III 研究のまとめ	87
1 成果	87
2 今後の課題	87

小学校英語活動の在り方についての調査研究

指導主事 黒 須 智 則

I 研究の趣旨

平成14年度「総合的な学習の時間の実施状況調査」によると、約6割の公立小学校で英語活動が行われている。「小学校英語活動実践の手引き」(文部科学省)によると、英語活動のねらいは、「興味・関心や意欲」を育成することにある。したがって、英語活動の指導において大切なことは、児童が英語に興味を持ちながら、英語を聞き、さらに、英語で表現できることに満足感を覚えて、いつまでも「英語が好きだ」という気持ちを持ち続けさせることである。

本研究では、英語活動をとおして英語学習に対する「興味・関心や意欲」の向上を図ることが、英語学習に対するモチベーションの向上につながると考えた。

そこで、次の2つの視点で調査研究を行った。

- 1 児童のモチベーション維持・向上を目指した小学校英語活動の在り方
- 2 中学校との関連を意識した英語学習の入門期における活動内容と指導法の改善

II 研究調査の概要

1 小学校英語活動の実態

福島県国際交流協会が平成15年3月に実施した「国際理解教育実態調査」によると、県内の英語活動の年間実施時数は、3時間以下の学校から70時間以上実施する学校まで様々である。英語活動は国際理解教育の一環として実施されており、年間11時間以下という学校がもっとも多く、児童の発達段階や興味・関心に即し、身近な英語を扱い、楽しみながら、英語に慣れ親しむことをねらいとして実施している。

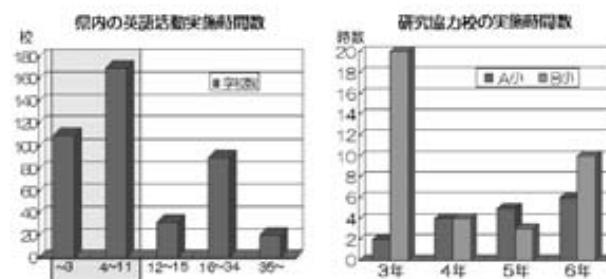
授業の形態は、学級担任主導、学級担任と外国語指導助手とのティーム・ティーチング、外部講師主導によるものなど、学校の実情に応じて取り組んで

いる。内容は、音声中心に話題・素材・題材を扱っており、英会話を中心に進めたり、外国人との交流学习を交え、ゲームや歌を取り上げたりと、各学校での創意工夫が見られる。

英語活動を担当する学級担任は、英語の発音、外国語指導助手との打ち合わせ、教材づくりなど、指導の際に不安を感じている。その一方で、テレビ番組やインターネットを活用したり、フラッシュ・カードによる文字指導を導入するなど、児童の知的好奇心を高める授業づくりを工夫している。また、学級担任は、研修をとおして自己の英語力や専門性を高め、英語活動をより充実させたいという願いを持っている。さらに、英語活動を充実させる上で必要なものとして、英語の歌のCD、ゲーム活動集、活動実践事例、教室英語のマニュアル、専門性を高めるための研修会への参加などを挙げている。

また、英語活動へ積極的に取り組んでいる学校では、児童の興味・関心や発達段階に応じた教材の開発や活動の在り方について情報の共有化を図る体制をつくり、年間活動計画や活動内容の改善が図られている。

2 研究協力校における調査分析



県内の英語活動の実施状況をもとに、実施授業時数が、11時間以下の同一学区の小学校2校(以下、A小学校・B小学校)の6年生及びその進学先の中学校(以下、C中学校)である1年生を対象にしてモチベーションに関する調査をした。

○調査項目

興味・関心	
1	今、英語の授業に興味を持っている。
2	先生や友だちが話す英語に興味を持って聞いている。
3	外国人が話す英語に興味を持って聞いている。
4	英文の内容に興味を持って聞いている。
5	将来、英語を話せるようになりたいと思っている。
6	将来、英語が書け、海外文通や電子メールなどができたらよいと思う。
7	英語と日本語のちがいに興味を持っている。
8	外国の文化と日本の文化のちがいに興味を持っている。
基本的な学習態度	
1	授業中、熱心に先生や友人の発音を聞いている。
2	発音する時は大きな声ではっきり発音している。
3	学習した基本本文の音読と暗唱をしている。
4	先生の質問に、間違いを恐れず答えている。
5	自分が思っていることを英語で表現する努力をしている。
6	板書など、学習内容を工夫して正しくノートに書いている。
7	学習した基本本文の暗写（暗記して写す）をしている。
8	宿題や提出物をきちんと提出している。
自発的な学習態度	
1	予習や自由課題を進んでしている。
2	英和辞典、和英辞典（電子辞書）などを活用している。
3	理解していない所を進んで質問している。
4	拳手を進んで発表や発言をしている。
5	グループ学習、ペア学習で協力して学習を進めている。
6	その日の学習内容を整理し、復習している。
7	学習した文型を利用して、機会を見つけて話したり、書いたりしている。
8	外国の文化や日本の文化を進んで調べ比較している。
積極的な学習態度	
1	日常生活で見たり、聞いたりする英語の意味を調べている。
2	ラジオやテレビの英語番組をよく聞いたり、見たりしている。
3	外国の映画を見て、英語を積極的に聞き取っている。
4	英語検定の学習に取り組み、受験している。
5	英語の物語、新聞、雑誌などを読んでいる。
6	英語で日記を書いている。
7	外国人と話す機会があると自分から進んで話しかけている。
8	外国人の人達と英語で文通や電子メールなどを行っている。

(1) 研究協力校（小学校）における英語活動の実態
両校とも、学年体制で指導内容の検討を行っているが、英語活動の指導形態、実施時期に違いが見られる。

A小学校はある時期にまとめて英語活動を行い、日本人外部講師が主導で英会話を中心に行っている。活動内容については、外部講師と学級担任で検討し、学年合同の授業を実施している。

B小学校は各学期ごとに活動内容を計画し、学級担任と外国語指導助手によるチーム・ティーチングを中心に、学級単位で授業をしている。

(2) 小学生のモチベーション調査結果から

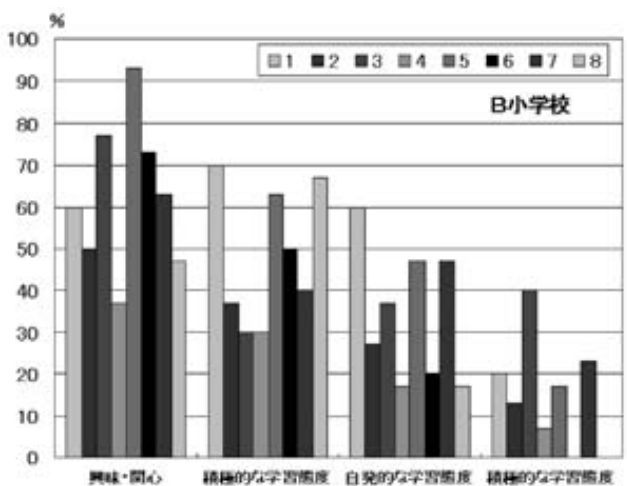
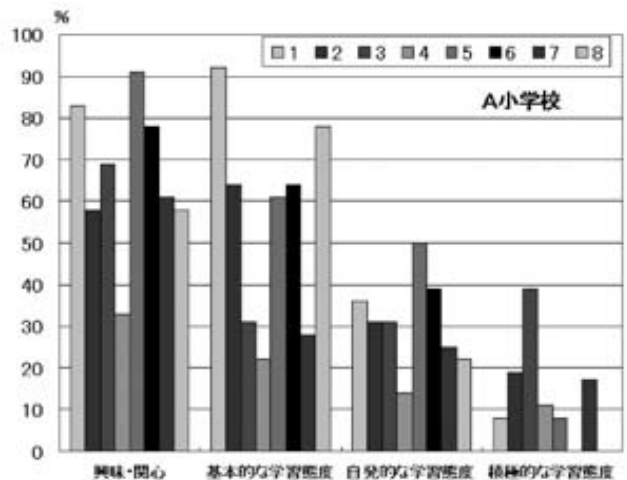
A小学校とB小学校の学習形態や活動内容の違いが、それぞれの児童のモチベーションに、影響を及ぼしていることがわかった。A小学校の児童は、英語の授業に対する興味・関心が高く、B小学校の児童は外国人の話す英語への興味・関心が高い。また、学習態度についても違いが見られる。

具体的には、外部講師による英会話活動を行っているA小学校の児童は、外国と日本の文化の違いに興味を持ち、授業への集中度が高く、英語の発声も大きい。

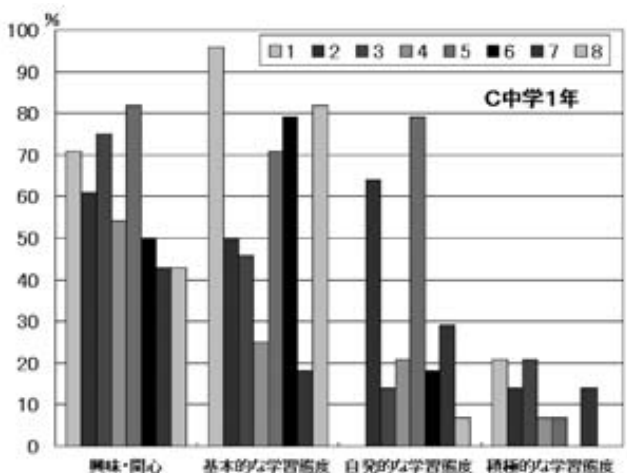
一方、B小学校の児童は外国人の生の英語に触れ、ゲーム中心に言語活動を行っており、外国人に進ん

で英語を使おうとする意識がある。

いずれの小学校の児童も、英語を話せるようになりたいという意欲が高い。



(3) 中学校1年生のモチベーションとの関連から



C中学校1年生の基本的な学習態度はA小学校児童の基本的な学習態度と類似している。A小学校は英語の専門性を有する外部講師主導による一斉授業で、中学校の言語材料を用いた英会話を中心として

進められている。これはC中学校の授業形態と類似している。活動内容と指導法が学習態度に影響を与えていると考えられる。

一方、B小学校は、外国語指導助手とゲームによる言語活動をとおして、英語の使用場面を多く設けたことで、積極的な学習態度の育成が図られている。

小学校英語活動では、英語の専門的指導と中学校とのつながりを意識したA小学校での活動に加え、生の英語に触れ、楽しい言語活動をとおして英語に慣れ親しむことをねらいとするB小学校での活動が、中学校以降の英語学習へのモチベーションを高める大切な要素であることがわかる。

(4) 小学生と中学生のモチベーションの考察

① 他教科との関連から

小学校6年生と中学校1年生のモチベーションの特質の違いを比較してみると、小学校6年生は、英語と日本語の違いや海外文通、Eメールに興味・関心があり、将来英語を話したいと思っている。また、大きな声で英語を発音したり、外国人へ話しかけたり、文化の違いを進んで調べる等の学習態度が見られる。英語活動が国際理解教育の一つとして、異文化交流学習や調べ学習とリンクし、教科横断的に実施計画されていることが、モチベーションの向上を促していると考えられる。

一方、中学校1年生の英語学習へのモチベーションの特質は、外国人の話す英語やその内容へと興味・関心が移り、未知語を自主的に調べ、英語を友達と使おうとしたりする点にある。

② 語彙との関連から

小学校英語活動における児童と中学生のモチベーションの違いが、語彙の習得状況にどのような関連があるのかを調べた。

調査語彙は、「数・形・色・動物・果物・野菜・身近なもの・家族・スポーツ等」についての単語210語に加えて、簡単なあいさつや表現についての21文も同時に調査した。小学生は文字の指導を受けていないので、絵や日本語で提示した。また、すぐに英語で言えるか、自己チェックするという方法で行った。

簡単なあいさつや表現の定着率に関しては、中学

校1年生の方が高い。しかし、動物や野菜名等、児童の日常生活にかかわる下記に示した語彙の定着率に関しては、小学校6年生の方が高い。小学校6年生は4年生から3年間英語活動を経験している。毎年、英語活動の内容や指導法が改善され、児童の身近な英語を扱うことに重点を置いて指導されている。楽しさの中に英語に親しむ言語活動をとおして身についた語彙の量は、児童のモチベーションと大きくかかわっているといえる。



③ 4技能の観点から

小学校6年生の興味・関心は初めて接する異文化や外国語としての英語に対するものであるが、中学生の興味・関心は英語を伝達手段ととらえ、「聞くこと」、「話すこと」に「読むこと」、「書くこと」を加えた4技能をもとにした、実践的なコミュニケーション能力を獲得することにある。

小学校英語活動から中学校英語への移行にともない、4技能へのモチベーションがどうかかわるのかをとらえるために、中学生の4技能に関する意識調査を行った。昨年度、英語活動を経験した中学校1年生のうち、下位生徒のほとんどが、4技能の中で「読むこと」、「書くこと」が苦手であると回答している。

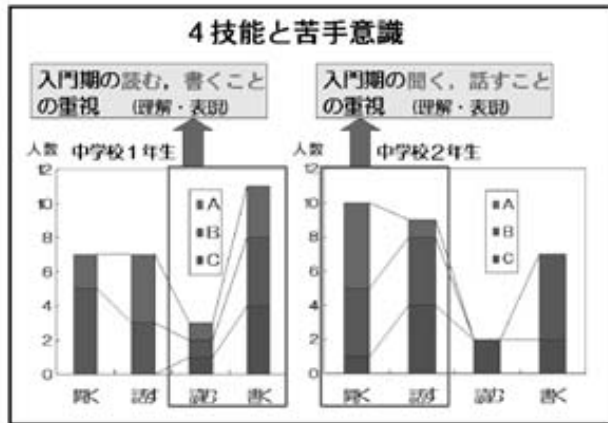
中学校2年生では、反対に上位生徒のほとんどが、「聞くこと」、「話すこと」に苦手意識を持っている。

小学校英語活動で特に「読むこと」、「書くこと」を扱っていないことは、中学校1年生での「つまずき」と関連があるといえる。

中学校2年生では、小学校において英語活動を経験していない生徒もおり、「聞くこと」、「話すこと」

の活動が十分なされていないままに、「読むこと」、「書くこと」の活動を行っていることが原因であると考えることができる。

このことから、小学校英語活動で培った英語学習へのモチベーションを維持し、向上させるためには、中学校英語で4技能のバランスを考慮した指導が大切であるといえる。



III 研究のまとめと今後の課題

1 入門期の指導の在り方

(1) モチベーションを高める内容と指導法

小学校英語活動における実施時数、実施時期、授業形態や活動内容の違いが、児童のモチベーションの形成に影響があることがわかった。

また、中学生のモチベーションの変容を調べることで、小学校英語活動での授業形態や活動内容が、中学生の積極的な学習態度の形成やその後の英語学習に対するモチベーションにかかわることがわかった。

(2) 英語活動で扱う語彙

英語活動では、児童の発達段階を踏まえた身近な話題・題材・素材を扱うことで、英語学習に対するモチベーションが高まり、中学生には定着が図られていなかった語彙についての発話が見られた。モチベーションの向上と語彙の関係についても確認できた。

また、語彙の調査結果から、小・中学生の両方とも未定着な語彙がいくつか見受けられた。このことは小学校段階で発話されなかった日常的な語彙は、

中学校段階でも発話されない可能性があることを示している。英語活動において、児童の発達段階や興味・関心に即した語彙を豊富に与えることは、英語学習に対するモチベーションの向上につながる。

(3) 4技能のバランスを意識した入門期の英語学習

小学校英語活動において、簡単なコミュニケーション活動を積極的に取り入れ、「聞くこと」、「話すこと」の活動を充実させることが、「読むこと」、「書くこと」の興味・関心を高めることになり、中学校英語における積極的な学習態度の素地をつくる。

そのためには、発達段階に応じ、児童の興味・関心を大切にしながら自然な発話が図れるよう配慮し、指導することが必要であると考えられる。

2 今後の課題

入門期における英語学習へのモチベーションを多角的にとらえて調査考察した。さらに、英語学習とモチベーションとのかかわりで、以下の項目に関して研究を深めたい。

- (1) 授業形態と活動内容の工夫改善が、児童のモチベーションと具体的にどう関係しているかを調べ、個に応じたモチベーションの育成を目指した授業形態や活動の在り方をさぐる。
- (2) 小学校英語活動の内容を、語彙レベルで検討する。
- (3) 中学校での「読むこと」、「書くこと」へのモチベーションを高める小学校英語活動におけるフォニクス指導の在り方を研究する。

〈参考・引用文献〉

- 1) 小学校英語活動実践の手引き (文部科学省 2001.12)
- 2) 関心・態度—その理論と指導と評価 金井達蔵編 (図書文化)
- 3) WORD BOOK 久埜百合編 (ぼーぐなん)

子どもたちの「確かな学力」の向上を目指し、「個に応じたきめ細かな学習指導」を実施するための基礎研究（小学校算数）

指導主事 桑名俊之

I 研究の趣旨

本県の教育課題である「確かな学力の向上」に資するために、県内全小・中学校で全国標準学力検査（NRT）が実施されている。このテストは、全県的な立場から学力の実態を把握し、それに基づいて教科指導の改善を図るためのものである。各校でもこのテスト結果を基にした指導の改善が求められている。

またこれを支援するために、昨年度本センターカリキュラム研究チームは「さまざまな調査をもとにして『個に応じた学習指導』を実施するための基礎研究」を行った。特に中学校3年生において、学力到達度ごとにつまずきの実態を把握し、学習指導の改善の在り方について具体策を示した。

この研究をさらに小学校算数段階に進めるために本研究主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究の基本的な考え方

これまでの学力調査では、集団の平均値に基づく分析がほとんどであった。しかしながら、「学習のつまずき」や「学習への取り組み方」は、子どもたち一人一人の学力到達度や学習姿勢などによって異なる。そこで、学力の実態を学力到達度ごとに詳細に把握し、それに基づいて授業改善の在り方を考察することが必要であると考えた。

この研究は2年計画であり、1年目の本年度は学力の実態を把握するための調査分析の方法や学習指導の在り方を研究した。次年度は、1年目の研究を基に、今求められている問題解決的な学習の在り方について研究を深める予定である。

2 調査対象 研究協力校（県内3小学校）

5年生10クラス：292名

3 学力到達度調査結果の分析・考察

(1) 分析・考察のための学力層の設定

テスト結果を分析・考察するための学力層の設定にあたっては、平成14年度カリキュラム研究チームと同様に、NRTの偏差値を基にして5つの学力層に分けて学力到達度の実態を把握した。〔表1〕

学力層	NRT偏差値
A層	～63
B層	62～55
C層	54～48
D層	47～40
E層	39～

(2) NRT結果による分析・考察

学力の実態を詳細に把握するために、平成14年度末に実施したNRT結果を分析し、学力到達度ごとに学習のつまずきの原因を考察した。

(3) 算数学力診断テストによる分析・考察

「平成13年度教育課程実施状況調査結果」を考慮しながら、「研究協力校のNRT結果」において、特に正解率が低かった学習項目を選び出して算数学力診断テストを実施した。なお、問題作成や分析にあたっては国立教育政策研究所の評価規準例を参考にした。さらにこの研究を深めるために、学習姿勢に関する算数学習基礎調査も同時に行った。

4 研究の概要

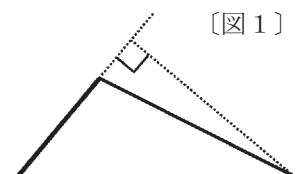
NRT結果と算数学力診断テスト結果を基にして、指導改善の在り方について研究した。ここでは特に、三角形の「面積」と「高さ」を例にとり指導改善の在り方について述べる。

(1) NRT結果による分析・考察

① 学力の実態把握

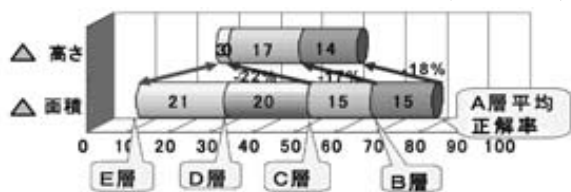
ア 「高さの捉え方」

三角形の「高さの捉え方」の正解率は、B層では48%、A層であっても62%であり決して高いとは言えない。また、「高さの捉え方」は三角形の「面積」の正解率に比べ、A・B・Cの各層で20%程度低下している。〔グラフ1〕 この「高さの捉え方」の設問



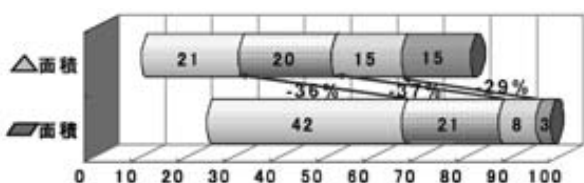
は、〔図1〕のように、三角形の1つの底辺に対して、その高さが底辺の外にある場合の高さを指摘する問題である。ただし、E層だけは、「高さの捉え方」に比べ「面積」の正解率が低下している。

〔グラフ1〕



イ 三角形の面積公式の「 $\div 2$ 」の定着率

三角形の面積の正解率は、平行四辺形の面積の正解率よりもB・C・Dの各層で30~40%程度低下している。〔グラフ2〕 この原因は、三角形の面積公式の「 $\div 2$ 」が欠落していたためであることが誤答分析から分かった。〔表2〕 他の類題においても同様の結果であった。〔グラフ2〕



〈「 $\div 2$ 」が欠落した誤答の割合〉 〔表2〕

三角形の面積	A層	B層	C層	D層	E層	全体
誤答率 (%)	20	30	33	34	43	30

② 学力の実態把握についての考察

ア 「高さの捉え方」が一層的

「高さの捉え方」は、「面積」に比べE層以外のすべての層において正解率が低く、教師の予想を大きく下回っている。この結果は、「高さの捉え方」の指導において〔図2-A〕における指導が中心で、〔図2-B〕のような取り扱いが不十分であったためと考えられる。



イ 「 $\div 2$ 」の欠落

三角形の面積公式の「 $\div 2$ 」の欠落は、すべての層で見られるが、特にB層以降の欠落率が高い。このことは単なるケアレスミスではなく、公式の意味の理解が十分になされていないままに、単に公式の定着のためのドリルのみがなされているからではないかと考えられる。

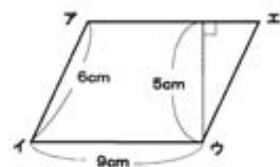
(2) 算数学力診断テストによる分析・考察

① 学力の実態把握

ア 「高さの捉え方」の検証

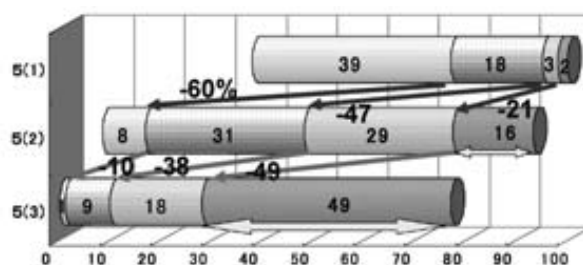
下の問題で、「高さの捉え方」についての検証を行った。

〔問題5〕右図の平行四辺形アイウエにおいて、



- (1) 面積を求める。
- (2) アイを底辺としたときの高さを図に示す。
- (3) (2) の高さを求める。

〔グラフ3〕

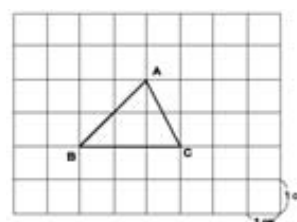


問題5小問(1)「面積」の正解率は、C層で95%、D層で77%であり、E層を除けば公式を用いて面積を求めることができる。しかし、底辺を辺アイにしたときの高さを図示する小問(2)の正解率は、小問(1)よりもB層-21%、C層-47%、D層-60%であり、A層以外は大きく正解率が低下している。さらに、その高さを求める小問(3)の正解率は、小問(2)よりも、B層-49%、C層-38%とさらに低下している。すなわち、A層を除いたすべての層において「高さの捉え方」が不十分であり、さらに具体的に面積から高さを求める小問(3)の正解率は、B層以降大幅に低下している。〔グラフ3〕

イ 「 $\div 2$ の欠落」の検証

下の問題で、「 $\div 2$ の欠落」についての検証を行った。

〔問題6〕右図において、



- (1) 三角形ABCの面積を求める。
- (2) 三角形ABCの面積を公式を用いてもとめるときに、その基になる四角形を図にかく。

問題6の2つの小問(1)、(2)を総合して「三角形

の面積公式の意味が分かっているか」を詳しく検証した。(1),(2)の2問とも正解した割合は、A層93%、B層77%、C層70%、D層35%、E層2%である。〔表3〕
B層とD層を境として正解率が大きく低下している。

〈6(1),(2)の正誤一覧表〉 [表3]

正答 (%)	(1) ○	(2) ○	(1)○ (2)○	(1)○ (2)×	(1)× (2)○	(1)× (2)×
A層	95	95	93	2	2	2
B層	89	87	77	11	9	2
C層	82	84	70	13	15	3
D層	65	45	35	31	12	22
E層	19	9	2	21	2	74

(3) NRT結果と算数学力診断テストによる分析・考察のまとめ

ア 「高さの捉え」が一様的

NRT結果による分析では、三角形における「高さの捉え方」が不十分であることを指摘したが、平行四辺形においてもB層以降はその定着が不十分であることがわかった。A層を除けば、「高さ」の定義の意味が十分に理解されていないことがわかる。

イ 「÷2」の意味の理解不足

三角形の面積公式における「÷2」の意味は、「三角形は四角形の半分」ということである。その最も基本的な考え方が理解されないままに、単なる公式として「÷2」を丸暗記しても、「÷2」は簡単に剥落してしまう。この「÷2」の定着はB層、さらにD層を境として低下する。

(4) 学習指導の改善策

三角形の面積の学習は、すべての面積の学習の基本である。これまでの結果を基にして、図形の面積の学習の「つまずき」として考えられる点を以下層別にあげる。

B層では、「公式の意味」の理解が不十分であり、位置や図形を変えてしまうと高さを適切に捉えることができない。C層では、B層でのつまずきの傾向がさらに強くなる。D層では、基本的な図形においてさえも「公式の意味」と「高さの捉え方」の理解が不十分である。E層では、これらのつまずきに加えて、乗除混合の計算技能が不足している。ただし、A層であっても、公式の意味の理解が十分でないために、公式を活用して解決すべき複合図形の問題の

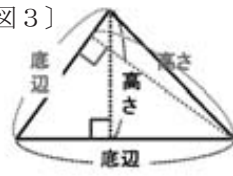
正解率は低い。そこで、(1)~(3)を踏まえて、指導の改善の具体策を述べる。

① 学力層によらない指導の重点

上で述べた分析結果から、いずれの層においても、公式の意味の理解が不十分であるとそれを適切に活用できない。いずれの層においても、三角形の面積の指導で大切なことは、「高さの捉え方」の理解を深めさせることである。すなわち、教科書にあるように〔図3〕において「高さの捉え方」を理解させて、〔図4〕のような捉え方の指導を十分に行うことが大切である。

さらに、三角形の面積公式の「÷2の意味」を十分に理解させるためには、公式を単に暗記させるのではなく、長方形、平行四辺形、台形、ひし形の公式と有機的に関連づけて指導することによって、公式の理解を深めさせることが大切である。

〔図3〕



〔図4〕



② 学力層に応じた指導の重点

学力層によらない指導の重点を踏まえながら、さらに学力到達度に応じた学習指導を行うことにより、学習意欲を減退させることなく、すべての学力層における学力の向上を図ることができると考える。

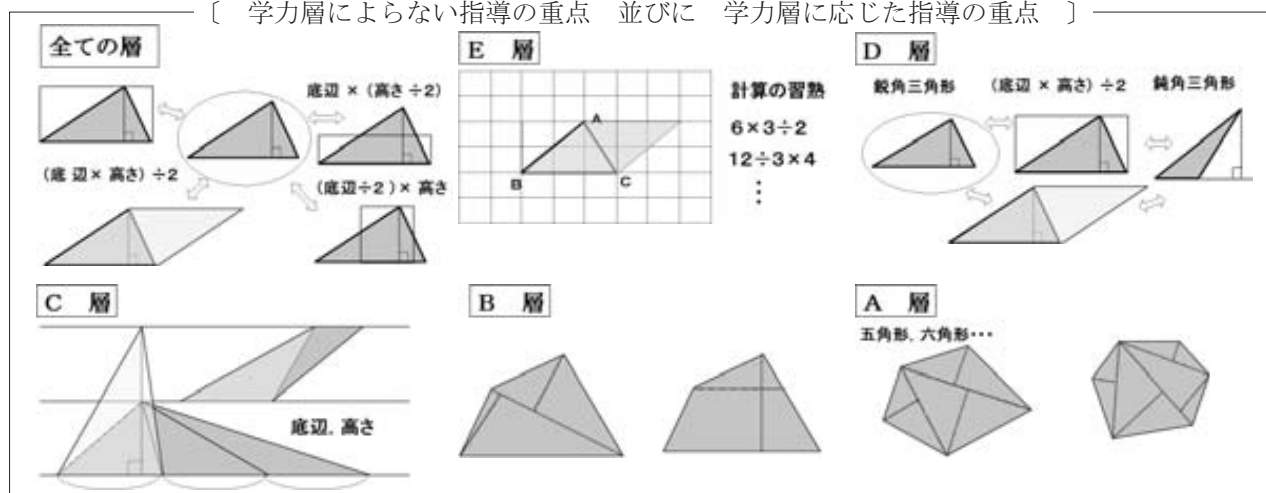
E層 …方眼紙を用いて、長方形の面積の考え方にまで立ち戻りながら、面積公式の意味を理解させる。加えて、乗除混合の計算技能を高めることも必要である。

D層 …教科書で扱う基本的な図形を基に、公式の意味の理解を通して、基礎の定着を図る。

C層 …三角形の面積や高さについての理解を確かなものとするために、底辺や高さを2倍、3倍にしたときの面積を考える。さらに、台形の面積を2つの三角形に分割して求める。

B層 …三角形の底辺や高さについての理解を深めるために、複合図形において三角形の底辺や高さを多様に捉えさせる。

A層 …1つの複合図形の面積の問題を解決した後に、自分で問題の条件を変えて自作の問題をつくり、それを解決する。



(5) 学力診断テストの分析・考察を深めるための算数学習調査による分析・考察

算数学力診断テストと同時にその分析・考察を深めるための算数学習調査を行った。この調査のねらいは、学習意識や学習に対する取り組みの姿勢等を学力到達度ごとに分析し、学習指導上の配慮事項を明らかにしていく点にある。

「算数が好き」の設問では、「好き」と回答した割合は、上位層になるにしたがってその割合が増え、A層では88%にも達した。「好き」の理由は、すべての層で「考えて答えが出たときうれしいから」「いろいろな解き方があるから」が多かった。一方、「公式に当てはめれば答えが出るから」の回答の割合は、各層において5%程度であった。^[表4] この結果は、A層はもとよりD層やE層であっても、形式的な丸暗記の学習を好まず、「学習していることの意味を理解し、自分で考えて問題を解決したい」、「いろいろな見方や考え方を学び取りたい」との願いがあることを示している。

<算数が好きな主な理由 (%)> [表4]

主な理由	層	A層	B層	C層	D層	E層	全体
考えて答が出たときうれしい		32	25	23	23	15	23
いろいろな解き方がある		25	17	13	11	15	15
公式に当てはめれば答えが出る		7	6	5	6	4	6

日々の授業が、子どもたちのこのような学習のニーズに込んでいるかどうかを教師自身が振り返りながら、(1)～(4)で述べたような指導の改善を図っていかなければならないと考える。

III 研究のまとめ

1 この研究の意義

これまでに述べてきたように、学力到達度別に詳しく学力の分析を行うことによって、児童の学力の実態を的確に把握することができ、学力到達度に応じたきめ細かな学習指導を行うことができる。さらに、このような分析によって、学力到達度によらないすべての学力層の子どもたちに対して行うべき指導の要点が明確になり、それを基に授業の質の改善を図ることができる。

ただし、この報告書で述べてきた分析例は研究協力校のものであり、それに基づいた指導の改善のための方策は、研究協力校の児童に対してのみ有効に働くものである。大切なことは、指導の要点に関する一般論を得ようとするのではなく、目の前の子どもたちに焦点を当て、ここで述べたような分析の手法を参考にしながら、指導者一人一人が指導の改善に努力することである。

2 今後の研究の方向性

学力到達度ごとのつまずきの実態を踏まえて指導の改善のための具体策をさらに明らかにしていくとともに、さらに思考力に注目して、問題解決能力の育成を図るための指導の在り方について研究を進めていきたいと考える。

<参考文献>

- 1) 福島県教育センターカリキュラム研究チーム研究報告書 (福島県教育センターWeb 2003年)
- 2) 個に応じた指導に関する指導資料小学校算数編 (文部科学省編 教育出版 2002年)
- 3) 平成13年度教育課程実施状況調査報告書 (国立教育政策研究所 東洋館出版社 2003年) 他

簡単なディベートを組み込んだ中学校保健の授業

— 討論で喫煙問題の見方・考え方を深める —

指導主事 渡部 光毅

I 研究の趣旨

肥満や生活習慣病の蔓延，喫煙・飲酒・薬物乱用等に見られる非行の低年齢化など，現代の子どもたちは健康にかかわる様々な問題を抱えている。

これらの問題に対処するために保健の授業においては，知識・理解を基礎として，広い視野から健康や社会問題に迫り，「健康や安全によい生活行動を選択し実践できる能力」の育成を目指すことが求められている。

今回の研究では，喫煙防止のために求められる実践力とは何かを明らかにした上で，その実践力の育成に結び付くであろう指導方法を取り入れ，その検証授業を行った。

II 研究の概要

1 単元の設定

3学年で学習する保健分野のうち，「健康な生活と疾病の予防」における，「喫煙，飲酒，薬物乱用と健康」の中から「喫煙と健康」を取り上げた。

2 単元設定の理由

- (1) 喫煙は健康に重大な影響を及ぼす問題として，社会的に関心が高い事象である。
- (2) 生徒の興味・関心が非常に高い内容である。
- (3) 小学校で既習経験があることから，生徒の考えを引き出しやすく，学習を進展させることが可能である。

3 学習過程の工夫

- (1) 導入段階において，生徒の心を揺さぶり，興味・関心を持たせる教材を工夫した。
- (2) 教師から生徒への伝達を「発問」，「説明」，「指示」の3つに分類し，明確にした。

- (3) 3時間という授業の流れを重視し，事前学習を要しない簡単なディベートを取り入れた。

4 授業の実際

授業にあたって，喫煙防止のために求められる実践力を次のように捉えた。

現在はもちろん将来の生活において，自分が喫煙にかかわる場面に直面したとき，適切な思考・判断，意思決定を行い，自分の健康管理や喫煙習慣の改善が適切にできる力

そして，実践力を身に付けさせるためには，喫煙がもつ社会的な問題や社会として解決していかねばならない問題に目を向けさせることが有効であると考え，ディベートを通して喫煙問題の見方や考え方を深めさせる授業を行った。

実際の授業では，以下に示すように1時間目に，喫煙が健康に与える影響を扱い，ディベートの基礎となる知識・理解を深めさせた。2時間目は，受動喫煙の影響や未成年の喫煙が及ぼす影響，そして社会的な喫煙規制の問題を扱い，喫煙問題の大きさに気付かせ視野を広げさせた。3時間目では，1時間目と2時間目の授業とのつながりを重視し，世界的に見られる喫煙制限の動きや日本で昨年5月に施行された「健康増進法」の資料をもとにディベートに発展させ，喫煙問題の見方や考え方を深めさせた。

【1時間目：喫煙が健康に与える影響】

導入：「ガム」を生徒に見せる。このガムが禁煙のために有効であるという話をする。

※指導上の留意点（以下記号のみとする）

ニコチン等，禁煙用ガムに含まれている物質の名前にはあえて触れないでおく。

発問①：「このガムの中には，禁煙のために有効な物質が入っています。それは何でしょうか。」

※ 有害物質の1つであるニコチンがたばこに含まれており、そのことが結果的に禁煙を助けるという点に注目させる。

指示②：「たばこの煙に含まれる有害物質について、その体への影響や作用をまとめなさい。」

※ 小学校で学んだ知識、あるいは現在の自分の知識をもとに、生徒一人一人に自分の考えを書かせる。机間巡視による観察や生徒発表により、たばこの煙に含まれる有害物質の影響や作用についての理解度を把握する。

説明①：ニコチン、タール、一酸化炭素については教科書の説明だけでは不十分であるので、写真を見せ資料を生徒に配布して話をする。

※ たばこのもつ依存性の原因はニコチンであることを特に強調する。そして、禁煙ガムはその依存性を少しずつ減らしていく手段になっていることを説明する。

【2時間目：受動喫煙の影響と未成年の喫煙が及ぼす影響や社会的な喫煙規制】

説明②：「受動喫煙」、「主流煙」、「副流煙」について説明する。

※ 有害物質の含有量を比較したとき、副流煙が最も多いことを強調する。

発問②：「喫煙者本人と受動喫煙者のどちらがたばこの煙による健康被害を受けやすいのでしょうか。」

説明③：説明②を聞いているので、多くの生徒から周りの人という声が上がった。しかし、実際にはたばこの副流煙に最も近いのは、喫煙者自身であり主流煙・副流煙両方の影響を大きく受けることを説明する。

※ 喫煙によって引き起こされる疾病や、受動喫煙者の健康被害にも触れ、教科書や資料を使って詳しく話をする。

指示③：「未成年のうちから喫煙をすると、どんな影響があるか考えよう。」

※ 教科書の青少年の喫煙と呼吸器症状のグラフを参考に考えさせる。

説明④：未成年者の法的な規制、未成年者が喫煙した場合の健康への影響を説明する。

発問③：「たばこの箱には、警告文が書かれていますが、日本のたばこには何と書かれているのでしょうか。」

※ 日本のたばこに書かれてある次の警告文の内容を生徒から引き出す。

あなたの健康を損なう恐れがありますので健康のために吸いすぎには注意しましょう。
喫煙マナーを守りましょう！

説明⑤：外国の警告文の書かれた資料を配布し警告文の内容を比較させた。

※ 外国から輸入したたばこを日本で買うと、上と同じ警告文しか書かれていないことにも触れる。

海外たばこのパッケージ警告文

- ・煙は、がん、心臓病、肺気腫、妊娠障害などの原因になる。
- ・妊婦の喫煙は胎児の障害、未熟児、低体重児出産を引き起こす恐れがある。
- ・たばこの煙には一酸化炭素が含まれている。
- ・今禁煙すればあなたの健康の重大なリスクは低減する。
- ・たばこは高度な依存性物質だ。
- ・あなたはそのたばこを一人で吸っているのではない。
- ・毎年カナダの小都市に相当する人がたばこが原因で死んでいる。
- ・子どもたちは見たことを実行する。(大人のまねをしてたばこを吸いたがる)

指示⑤：「たばこの警告文を比較し、問題だと思ふことを考え、班で話し合ってみよう。」

※ ブレインストーミング法を用いて、生徒から様々な意見を引き出す。話し合いを通して、日本の警告文の曖昧さと外国の警告文の明確さに注目させる。

【3時間目：簡単なディベートを通して、喫煙問題の見方・考え方を深める】

発問④：「今、世界的に見ても喫煙を規制しようとする動きがありますが、日本ではどのような場所でたばこを吸うことを規制しているのでしょうか、考えなさい。」

※ 日常生活の中で喫煙が禁止されている場所を考えさせ、大勢の人が集まる場所が該当するこ

とに気付かせる。

発問⑤：「今年5月に施行された健康増進法という法律を知っていますか。」

※ 知っていると挙手した生徒には法律の内容を尋ねる。その後、「健康増進法」受動喫煙防止についての資料を配布する。

第二節 受動喫煙の防止

第二十五条 学校、体育館、病院、劇場、観覧場、展示場、百貨店、事務所、官公庁施設、飲食店その他の多数の者が利用する施設を管理する者は、これらを利用する者について受動喫煙（室内またはこれに準じる環境において他人のたばこの煙を吸わされることをいう。）を防止するために必要な措置を講ずるように努めなければならない。

発問⑥：「皆さんが生活している〇〇中学校も大勢の人の集まる場所に該当します。あなたは、先生が学校で喫煙することを認めますか。認めませんか。どちらかに立場を決めて、その根拠や理由を考えてください。」

※ 肯定派と否定派に席を分けて、対面させる。司会者は重要な役割を担うので、事前に学級委員長に依頼し、ディベートの進め方について簡単に指導しておく。板書係、記録係についてはその場で決めさせる。

指示⑥：最初に肯定派の意見、次いで否定派の意見を発表させ、次にそれぞれに対する反論、さらにはその次に再反論、再々反論、再々々反論と進めさせた。



ディベートの主な記録

【肯定派の意見】

- ・喫煙室の中でだけ吸っている。
- ・法律で禁止されていない。
- ・精神的なストレスの解消である。

【否定派の意見】

- ・先生は生徒の模範となるべき存在である。
- ・喫煙室からの煙による受動喫煙が心配される。
- ・喫煙について生徒が興味を持つ危険性がある。

【反論】

- ・喫煙室の横は生徒の通路であり、副流煙の害が心配(否)
- ・教師は教える立場にあり、禁煙教育も重要な仕事(否)
- ・ストレスの発散方法は他の方法でも可能(否)
- ・大人が模範ならば先生以外もたばこを吸えない。(肯)
- ・喫煙室付近を通行してもたばこの臭いはしない。(肯)
- ・非行や問題行動に走るかどうかは生徒自身の問題(肯)

【再反論】

- ・先生という立場を自覚して禁煙すべき。(否)
- ・COなど臭いのない有害物質が危険である。(否)
- ・非行に走る生徒を指導するのが先生である。(否)
- ・喫煙室は常に換気されている。(肯)
- ・教師だから吸ってはいけないというのはおかしい。(肯)
- ・生徒が休み時間を取ることと同じに考えればよい。(肯)

【再々反論】

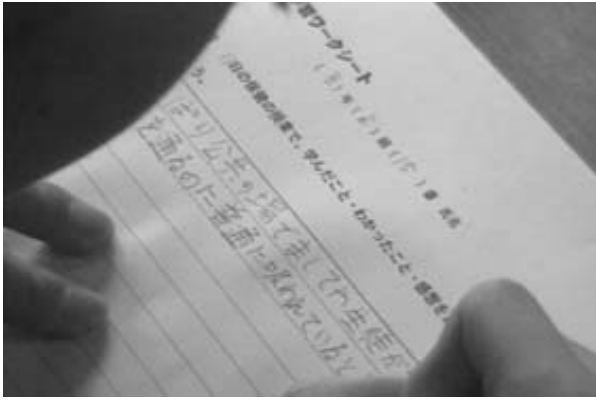
- ・休み時間は授業の準備に使うべきである。(否)
- ・先生だからたばこを吸うなどというのは差別ではないのか。(肯)

【再々々反論】

- ・学校での先生の立場は重い。家に帰って吸えばよい。(否)
- ・授業の準備をした後に吸っている。(肯)

指示⑦：「それでは、今日の討論の内容を踏まえて、感想を書いてみましょう。」

※ 正式なディベートならば、最後に判定を下すのだが、ディベートを通してどのようなことを感じたか、あるいはどのようなことを考えることができたかを知るために、「今日の授業に参加して、あるいは意見を聞いて感じたこと」や「授業で学んだことや喫煙に関する自分の考え」を感想としてまとめさせる。



ディベートの授業を受けた感想

- ・肯定側、否定側の両方の主張や意見を興味深く聞くことができた。
- ・改めてたばこの害を知ることができた。
- ・生徒も先生も正しい判断を持って自己管理をすることが互いの尊重につながる。
- ・喫煙だけでなくマナーの大切さを知ることができた。
- ・肯定側と否定側の意見を聞き、様々な考え方があることがわかった。
- ・自分が大人になった時、自分の健康を守るためのよいきっかけになったと思う。
- ・公共の場で喫煙することの問題点を知ることができた。
- ・法律上の認可と規制の関係について調べてみたい。
- ・換気をすることは大気汚染につながりはしないか不安になった。
- ・たばこに限らずけじめをつけることが大切ではないか。
- ・学校だけでなく街中でもたばこの煙には注意をする必要がある。
- ・健康に悪いことがわかっていながらたばこを吸うという行為は人間の弱さを象徴するもののように感じられた。
- ・他の学校ではどのような措置が取られているのか知りたいと思った。
- ・今日の話し合いを聞いていて、たばこを売る店の経営が大丈夫なのか心配になった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- (1) 各時間における指導のねらいを明確にし、その流れから発展させた簡単なディベートであったが、生徒の主体的な活動を引き出すことができた。
- (2) 生徒の感想で出された、公共の場での喫煙問題や将来の自分の健康管理の在り方などについての考え方は、喫煙防止のために求められる実践力に結びつくものであり、ディベートを取り入れた授業がその目的を引き出す有効な手だてであることが分かった。

2 今後の課題

- (1) ディベートの成果を生かし実践力をさらに育成するためには、まとめの時間の設定や授業後の事後指導が必要である。
- (2) ディベートにおける興味・関心を高める適切な論題の設定と、ディベートスキルの向上を図るために他教科との連携を図ることが必要である。
- (3) 「喫煙と健康」に3時間を費やすことは指導計画、他の単元を指導する時間の不足を招くおそれがある。小学校の保健の授業との系統性を図り、効果的な指導計画を立てることが必要である。

〈参考・引用文献〉

- 1) 小学校学習指導要領解説—体育編— (文部省 1999年)
- 2) 中学校学習指導要領解説—保健体育編— (文部省 1999年)
- 3) 第17回保健授業づくりセミナー資料集
保健教育研究会 森 昭三代表 (平和印刷)
- 4) 新しい学習指導要領とこれからの保健体育
大修館書店編集部 (大修館書店)

◎長期研究員の研究

1	高等学校芸術科（美術）	
	形の構想を明確にするための学習指導の工夫	90
2	中学校美術科	
	互いの感性を生かし、協調し合える共同で行う創造活動の在り方	92
3	中学校英語科	
	音声英語のオンライン処理能力向上を目指した音読指導	94
4	中学校理科	
	電流領域の基本概念の理解を深める学習計画の在り方	
	－電流モデルの確立と規則性（法則）の検証・一般化を通して－	96
5	小学校算数科	
	小学校算数科において、児童が意味理解を図り、学習内容を自分の知識として	
	獲得する授業の在り方	98
6	小学校総合的な学習の時間	
	総合的な学習の時間における効果的な指導の在り方	
	－評価観点と育成したい力をもとにした評価計画と支援計画の在り方－	100
7	小学校図画工作科	
	子どもたちが意欲的に取り組むことのできる図画工作科の授業はどうあればよいか	
	－図画工作科における効果的な情報機器の活用－	102
8	中学校学級活動	
	教育相談的手法を用い自己理解の深化と社会性の向上を目指す、	
	学級活動を通しての支援の在り方	104

形の構想を明確にするための学習指導の工夫

長期研究員 高橋 克之

I 研究の趣旨

学習指導要領には、生涯にわたって美術を愛好していくために、造形的創造活動の基礎的能力を伸ばす指導が求められている。その能力のひとつとして、意図に応じて色を選択できる能力が挙げられる。意図に応じて色を選択できる能力は、日常生活と深い関わりをもち、多くのデザインの表現題材において活用されることから、重要な能力の一つといえる。しかし、意図に応じて色を選択できる能力について自信がもてないために、意欲的に表現に取り組めない生徒が多いことが明らかになった。そこで前年度は、意図に応じて色を選択できる能力を伸ばすための学習指導の工夫について研究した。その結果、成果として、「切り絵」を活用すること、「自分の顔」をモチーフとすること、「色とことばの関係表」を活用することの有効性を明らかにすることができた。また課題として、意図に応じて色を選択できる能力を伸ばすためには、形の構想を明確にするための学習指導も必要であることが明らかになった。













今年度は、前年度の研究を発展させ、形の構想を明確にするための学習指導の工夫についての研究に取り組むことにした。また、色の構想を明確にするための手だてとして「色とことばの関係表」が有効であったことから、形の構想を明確にするための手だてとして「形とことばの関係表」を取り上げた。

II 研究の概要

1 研究仮説

形の構想の指導過程において、「形とことばの関係表」を取り上げ、その活用について工夫すれば、

形の構想を明確にさせることができるであろう。

角度→	水平	垂直	斜め	放射	
線↓					地味
直線					活気
角線					穏和
曲線	安定	強い	希望	広がり	

形とことばの関係表（一部）

2 研究の実際

題材「切り絵によるセルフポートレート」において、形の構想を明確にさせるために、以下のような学習計画を作成した。

(1) 色紙を活用した平面構成

① 設定理由

形とことばの関係表は、形のデザインと、形とことばの関係の二つに分けられる。形のデザインの方がより基礎的な内容であることから、はじめに形のデザインについて理解させる学習活動を計画した。

② 活動の手順

ア 色紙に、四角形や円などの簡単な形を描き、何枚かを重ねて切る。

イ いろいろな並べ方を試し、台紙に貼る。

ウ 掲示作品の鑑賞活動を通して、形のデザインについて理解する。

(2) 線の性質とことばの関係の理解

① 設定理由

形とことばの関係は、線の性質とことばの関係と、配置角度のそれとの二つに分けられる。線の性質の方がより基礎的な内容であることから、はじめに線の性質について理解させる学習活動を計画した。

なお、線の性質とことばの関係への関心を高めるために、生徒一人一人の考えが反映される学習活動を計画した。

② 活動の手順

ア 線の性質とことばの関係について予想する。

イ 線の性質とことばを結びつけるイメージについて予想する。

ウ アとイの集計結果を把握する活動を通して、線の性質とことばの関係について理解を深める。

(3) 配置角度とことばの関係の理解

① 設定理由

配置角度とことばの関係への関心を高めるために、生徒一人一人の考えが反映される学習活動を計画した。

② 活動の手順

ア 配置角度とことばの関係について予想する。

イ 配置角度とことばを結びつけるイメージについて予想する。

ウ アとイの集計結果を把握する活動を通して、配置角度とことばの関係について理解を深める。

(4) アイデアスケッチ

① 設定理由

形の構想を明確にさせるために、形とことばの関係表を活用し、以下の手順でアイデアスケッチをさせる学習活動を計画した。

② 活動の手順

ア 顔・背景のデザイン

イ 細部・キャッチコピーのデザイン

III 研究のまとめ

1 成果

(1) 形とことばの関係表の活用についての、構成の過程における有効性の明確化

「形の構想を明確にするために、形とことばの関係表は有効であったか」という質問に対して、「有

効であった」「やや有効であった」と答えた生徒の割合は、8割弱であった。このことから、形の構想を明確にするために形とことばの関係表の活用が有効であることを明らかにすることができた。

(2) 形とことばの関係表の活用についての、鑑賞の過程における有効性の明確化

鑑賞の過程において、生徒作品への感想を付箋紙に記入させ、それを作品に添付させた。付箋紙について、「15文字以上」「評価の観点の明記」という視点から検証した結果、それらの条件を満たしている割合は10割であった。また、形とことばの関係表の中のことばが、付箋紙の中で使われた割合は約7割であった。これらのことから、鑑賞の過程においても、形とことばの関係表が有効性をもつことを明らかにすることができた。

2 今後の課題

(1) 構成とことばの関係表の充実化

「不満と感じる点」として最も目立った感想は、「主題に合う構成がわからなかった」や「構成をもっと満足いくものにしたかった」など、構成に関するものであった。これらのことから、今後は、構成の表現の幅をより広げられるよう、構成とことばの関係表の内容を充実させていく必要がある。

(2) 顔の撮影および画像編集の工夫

「不満と感じる点」として他に目立った感想は、「顔の切り取りがうまくいかなかった」であった。この原因として、顔の輪郭線が細かすぎたことが考えられる。このことから、今後は、生徒の顔写真の撮影および画像編集について工夫する必要がある。

〈参考文献〉

- 1) デザイン技法講座1 (ベーシックデザイン)
真鍋一男著 (美術出版 1970年)

互いの感性を生かし、協調し合える共同で行う創造活動の在り方

長期研究員 金澤文利

I 研究の趣旨

1 研究の方向性

美術科学習指導要領の目標は「情意・態度的目標（みることや実感を持って理解できること）」が「能力的目標（的確に表す技能・技術）」よりも上位に設定されている。つまりこれからの美術は情意・態度の目標の達成を能力的目標同様もしくはそれ以上に伸ばし高める方向性で美術教育を考えなければならない。

2 美術の問題点

- 指導要領では時数の削減と新しい指導領域の追加があったが、単に作品を小さくしたり題材の複合を図ればすむものではない。
- 学校では、協力し合って一つのことに向かって取り組む体験が少なくなっている。
- 授業では発想・構想段階で自分の考えをどう生み出したらいいのかわからずに悩む生徒が多い。以上のことより「共同で行う創造活動」として生徒個々が授業の中で自分の考えや想いを他者の考えと協調させたり、共感させる「場」を持たせることで本来持っているそれぞれの美的能力や資質を伸ばしたり高めたりすることができるのではないかと考えた。

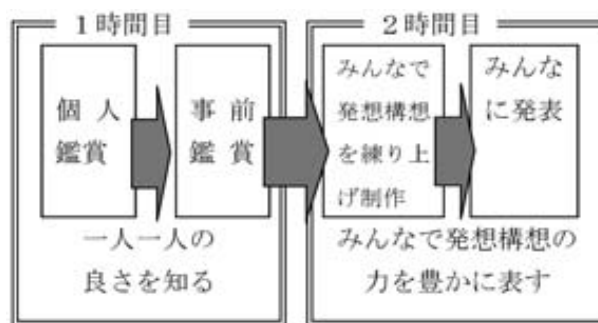
II 研究の概要

1 研究仮説

生徒が発想・構想を共有できる場を設定した題材を開発すれば、創造活動を通して創造の喜びを味わうことができるであろう

2 研究授業

- (1) 対象学年 第2学年
- (2) 題材名 写真鑑賞「ふきだしアート」
- (3) 授業構想
 - 次のような流れをもとに、「共同で行う創造活動」を位置づける。



(4) 研究の実際

① 動物の写真とふきだしの活用

指導要領の新しい領域に「写真と漫画の表現」が導入されたこともあるが、まず美術作品の鑑賞授業で、生徒の多くは絵画や造形作品の鑑賞に対して「難しくわからない」と感じている。その固定観念を取り払い、興味関心を引き出すために「動物写真」を活用するようにした。また動物の表情を自分なりに「見立て」て、吹き出しに具体的に表すことで鑑賞の喜びを感じ取り、活動を通して「美しい、人にやさしい、人がうれしくなる、楽しくなる」といった心の価値に気付かせる。

② 一人一人の良さを引き出すために事前鑑賞の時間の設定

作品の見方、よさや美しさを感じ取る力をアートゲームやミニコンクールなどの活動を通し、楽しい雰囲気の中から学び取らせる。自分の考えをみんなにみせて、お互いにアイデアを共有する場面を「事前鑑賞」という形で設定する。

ア グループ発表を中心にしてプリントの鑑賞

イ それぞれにふきだしの形と「言葉」をユーモアをもって考える。

ウ 作品を交換し合い、一人一人の良さを知る。



エ それぞれの作品に賞をつける。

③ 「共同で行う創造活動」をビジュアルコミュニケーションの場として授業に活用

発想・構想，アイデアを練り上げ工夫し，作品を制作する場面を「共同で行う創造活動」の場として設定した。事前鑑賞で一人一人の良さを知って，それを発展させ，発想構想の力を練り上げ制作していく過程で「みんなで高めあっている」と実感できる活動にする。共感させる「場」として発表も必ず行う。

ア 前回の活動を振り返りみんなで発想を出し合う
イ 話の展開をみんなで考えストーリーを組み立てる。

ウ 発想構想をより良いものにするために改善を図る。



エ 決定案を学級発表する。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 研究の方向性より

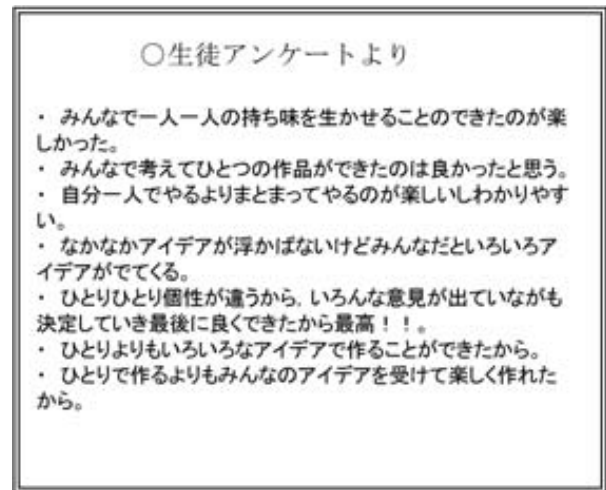
今回の研究を通して、「美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情」は技能・技術を習熟させること以上に生徒の発達段階や表現欲求を大切にしながら「発想・構想力，鑑賞する楽しみ（みる・考える）」を高めることにより「情意・態度的目標」へ近づけることがわかった。生徒の多くは共同創造

活動のなかで「人の気持ちを考える」ことや「人と共に喜び合う良さ」を活動の中で味わっていた。

(2) 動物写真とふきだしを活用したことは多くの生徒に受け入れてもらえた。「楽しさおもしろさ」がベースとなって鑑賞活動ができた。この鑑賞形式は学年や生徒の実態に合わせて展開することができると思う。

(3) 事前鑑賞の在り方が共同創造活動を行ううえで効果的だった。ストーリー制作のためのトレーニングには最適だった。とくに他人と意見を交換していく場面でお互いが高まって「より面白くしよう，より良く表そう」と言葉を選んだり，動物の表情を読みとる姿勢がみられた。

(4) 共同創造活動を行うことによって，生徒それぞれの「発想構想を創出する力」「考えをまとめ，組み立てる力」「鑑賞する力」が向上したと思われる。



2 今後の課題

○ 今回は鑑賞の領域で研究授業を行ったが，表現領域においてどれだけ共同で行う創造活動の「場」を設定していくかということが，今後の課題となる。

○ 今回はグループをどう作るかが問題だった。多くの友人の良さを知る共同創造活動の場にしていくことが目標なのだが，人間関係に問題を感じている生徒についてはよく話を聞き，もっとも良い形で活動に参加するよう促した。常に生徒の実態を把握し授業の組み立てを考えていくことも重要な今後の課題といえる。

音声英語のオンライン処理能力向上を目指した音読指導

長期研究員 熊谷幸司

I 研究の趣旨

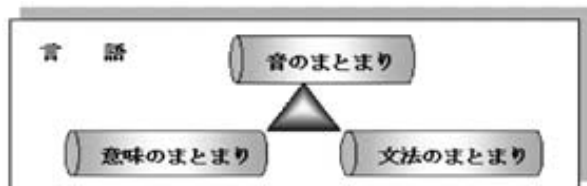
音声の英語は、耳に入っては瞬間的に消えてしまう。消えていく音を正しく捉えながら、その音进行处理し、重要箇所のみを保持しながら理解していく(オンライン処理)能力は、実践的コミュニケーション能力に必要である。

中学校段階におけるオンライン処理能力の向上のために、音のまとまりという考えに基づいた音読指導を取り上げた。

II 研究の概要

1 3つのまとまり

どの言語においても、音・意味・文法と言った3つのまとまりが存在し、この3つを使ってコミュニケーションを行っている。



これまで多くの授業では、音のまとまりは意味のまとまりと同じと考えられたり、あまり注意が払われないことも多かった。

2 意味と音のまとまり

意味のまとまりは、情報授受の単位であり、音のまとまりは文における強音節から強音節までを1単位としたものである。

Tom told me about his company in the station.

a) Tom told me/about his company/in the station.

b) **Tom** told me abou his) **company** in the) **station**.

a) が意味のまとまりごとに、b) が音のまとまりごとに分けたものである。(注)太字の部分が強音節

意味のまとまりごとに理解した英文を音のまとまりごとに読む練習を行えば、聞こえてくる音声

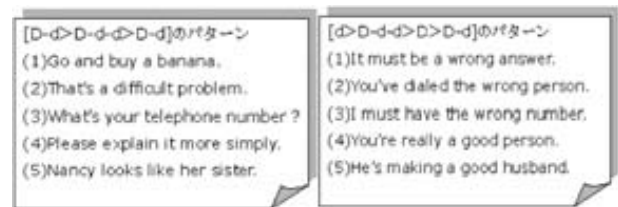
に近い音になりオンライン処理に役立つだろうという仮説を立てた。

3 授業の実際

(1)~(3)を約4ヶ月間、継続実践を依頼した。

(1) リズムトレーニング

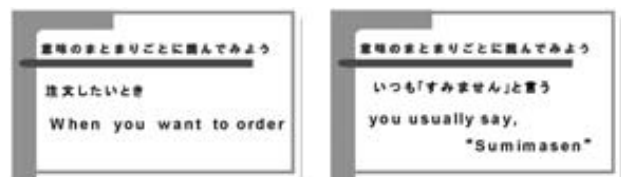
同じリズムパターンを持つ英文の口頭練習を行った。英語のリズムに慣れるということと、音のまとまりの中で起こる音変化を自ら音声化することにより、聞き取るときに役立つであろうと考えたからである。



1つのパターンにつき4回、合計34のパターンを授業のウォームアップ時の約5分間で行った。

(2) フレーズリーディング

教科書の文字情報を意味のまとまりに分け、音声化する活動である。この活動では、Power Pointを使い、意味のまとまりごと、一時的に英語が表示され・消える機能を活用した。



そして、この活動に短時間の記憶保持活動やペアによる同時通訳活動などを組み合わせた。



(3) リズムリーディング

(1)と(2)を統合し、音のまとまりごとに読むことによりオンライン処理能力を向上させる目的で行っ

た。ALTとリズムについての検討を行い、1分間に100拍のスピードで録音し、Power Pointで教材を作成した。



そして、リズムリーディングの目標を「ALTの録音音声とリズムに合わせて、シャドーイングできる」と設定した。

音のまとまりを作る上では、下記のようなことに留意した。

【音のまとまり:指導上の留意点】

(1) 区切り方
 ア 最も自然なものを選ぶ。下記では、a)を選ぶ。
 a) O Shall I > wrap it > up for you ?
 b) Shall I > wrap it > up for you ?
 イ まとまりが単語の途中になることもある。
 例) O It's > hard to de > cide.
 ウ 単語数が同じでも、まとまりの数が違うことがある。
 エ 全く同じ文でも、状況によって、音のまとまりは変わる。
 a) O So I > get very > hungry.
 b) O So > I get very > hungry.
 状況により、a)とb)の両方ありえる。

(2) 強さ
 ア まとまりにおける強勢の強さは、全く同じではない。
 イ 意味の対照やリズムの構成上、強勢の位置が変わる場合がある。下記a), b)では、Japaneseの強勢位置が異なる。
 a) O It's > difficult for > me to under > stand Japa > nese.
 b) O My > Japanese > friend had a > different > problem.

(3) 速さ
 ア すべてのまとまりが同じテンポで読まれるわけではない。
 例) These are my > pet > monsters.
 [D-d-d > D > D-d] というリズムパターンなので、1拍目に3音節、2拍目に1音節、そして3拍目に2音節入る。そのため、1拍目が一番速く読まれる。

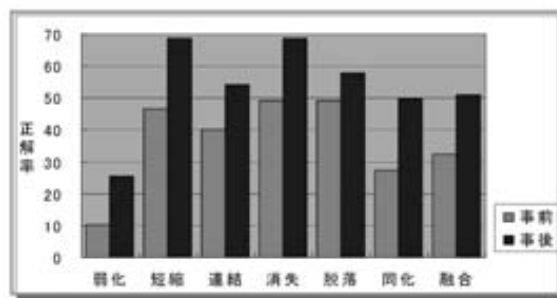
Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

(1) 音変化の聞き取り

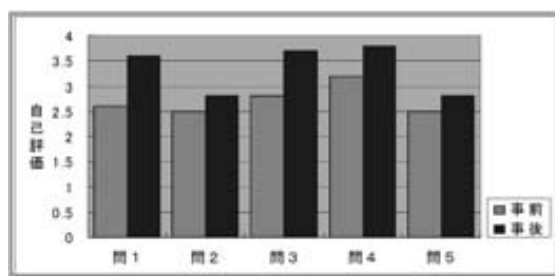
オンライン処理を難しくしている音変化についての聞き取りに、実践後、向上が見られた。

特に、短縮と同化に関する音変化の聞き取りが最も伸びた。特に下位生徒における短縮についての聞き取りの変容が一番大きかった。



(2) 内容把握

音変化や等時性を意識させるため、教科書より速いスピードの対話文を聞かせた。その時の、生徒の自己評価を比較してみると、自信を持って聞き取れる生徒が多くなった。



また、自己評価の高い設問と低い設問では、音のまとまりの構造に大きな違いがあることもわかり、音のまとまりがオンライン処理に影響を与えていることがわかった。

2 今後の課題

- 弱化の音変化や弱音節が3つ以上続く音のまとまりを含む英文の聞き取りが弱い。このことは、リズムトレーニングのリズムパターンに改善を加えることが必要であることを示している。
- 今回の実践は、意味や音のまとまりを示すのに、すべて教師がワークシート上に準備した。生徒が自らそれらのまとまりを見つけられるようにしなければならない。
- リズム以外の音の要素をさらに考慮に入れ、豊かな感情表現を伴った音声化をさせたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 英語の頭が変わる本 中田憲三著 (中経出版 2002年)
- 2) 文字言語情報と音声言語情報の処理モデルに基づく英語学習システムの開発研究 基盤研究(C) (1)研究成果報告書 平井明代編
- 3) 'Some functions of silent stress.' Abercrombie Aitken et al (1971年)

電流領域の基本概念の理解を深める学習計画の在り方

—電流モデルの確立と規則性(法則)の検証・一般化を通して—

長期研究員 大野 勝彦

I 研究の趣旨

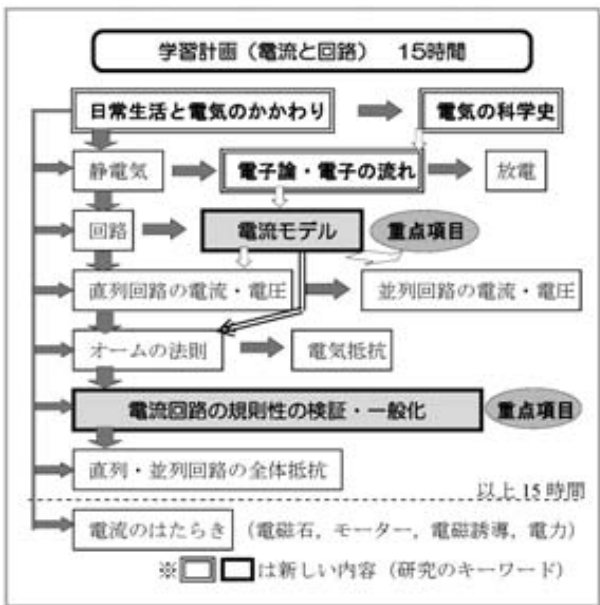
「科学技術」が著しい発展を遂げている今日、学校現場では「理科離れ」が大きな問題として取り上げられている。また、平成13年度教育課程実施状況調査の結果において、理科の学力の低下が指摘されている。特に「電流」に関しては、学力だけでなく、生徒にとって「わかりにくい単元」、「苦手な単元」の上位にあげられ、「電流」の学習後に理科学習そのものに対する関心・意欲までも低下しているという結果が出ている。そこで、本研究では、「電流モデルの確立」、「規則性(法則)の検証・一般化」というキーワードを中心に、「電流」領域の基本概念の理解を深める学習計画の在り方を模索した。

II 研究の概要

1 電流領域の新しい学習計画の試作と実践

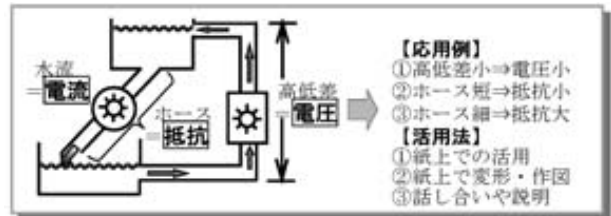
(1) 新しい学習計画

現行の学習計画の課題や生徒の実態の上に立ち、次のような学習計画を作成した。



(2) 基本的な理論

① 電流モデル



② 規則性(法則)の検証・一般化

観察・実験を中心とした探究活動により発見した規則性(法則)を、さらに様々な回路でも成り立つかをコース別学習で検証し、日常生活と関連させて一般化する学習を行った。

2 実際の授業

(1) 単元名 回路を流れる電流・電圧の関係

(2) 学習の展開

「回路を流れる電流・電圧の関係」展開概要 (4時間扱い・第3・4時)	
1 オームの法則の確認 (1) 電流モデルでの確認 (2) 電流モデルでのオームの法則の応用 (3) オームの法則の説明 (4) 全体確認	話し合い活動
2 オームの法則の検証 (1) 検証計画の検討 (2) グループの再編成 (コース別学習) ① 抵抗の種類 ② 回路の種類 ③ コンピュータの活用 (3) 検証実験、結果の検討 (4) 全体抵抗の確認 (5) ワークショップによる結果の共有	検証実験
3 オームの法則の一般化 (1) 家電製品の使用とオームの法則の関連 (2) 家電製品を使った演示実験 (簡易電流測定器) (3) インターネットによる電流の基本概念的な情報収集 (電気的基础知識) (4) 電力の確認	コンピュータ
4 学習のまとめ (1) 学習内容の確認 (2) 自己評価	家電品の実験

Ⅲ 研究の検証と考察

1 電流モデルの活用

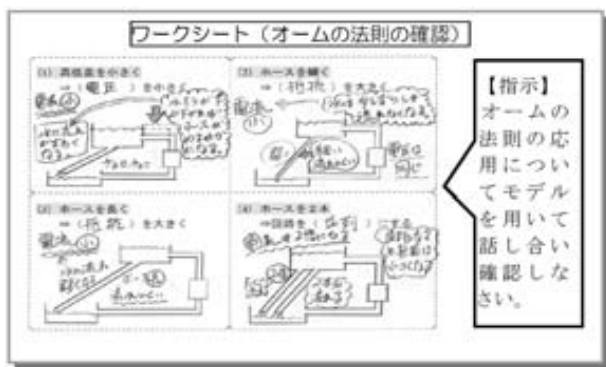
(1) 電流モデルの導入⇒関心・意欲の向上

電流に関する学習意識調査の結果では、「電流学習が好き」等の項目で、研究対象学級では事後で大きく向上した。聞き取り調査の結果でも、「電流モデルがわかりやすく面白くなった」などが多く出され、電流モデルの導入が電流学習への関心・意欲の向上に直接的に影響したと考えられる。



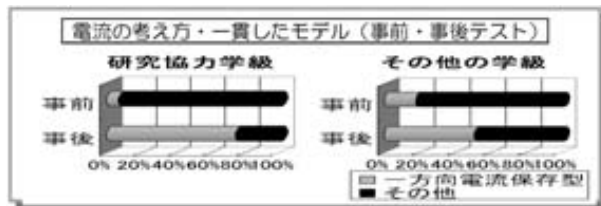
(2) 電流モデルの導入⇒科学的思考力の向上

授業でのワークシートへの記入によると、電流モデルを様々なパターンで活用している姿が見られた。話し合いもモデルを用いて理論的にすすめられており、電流モデルの活用により、科学的思考力が高まったと考えられる。



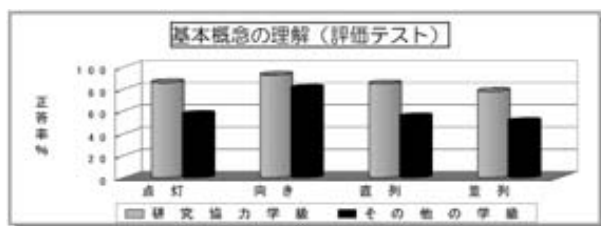
(3) 電流モデルの導入⇒電流の考え方の改善

電流の考え方を調べた結果では、科学的な電流の考え方である「一方向電流保存型」が大幅に増加している。電流モデルを中心に学習を展開したので、一貫した電流のモデルを持たない「状況依存型」が改善したと考えられる。また、ワークシートへの記入でも、電流の正体や基本的な原理についての内容が多く見られ、電流の考え方の改善と同時に基本概念の理解も深まっている。



(4) 規則性(法則)の検証・一般化⇒基本概念の理解

評価テストでは、回路の確認、電流の向きなどの基本概念の理解で高い正答率を示した。また、自己評価でも学習内容の理解で評価が高くなっている。



(5) 規則性(法則)の検証・一般化⇒日常生活との関連意識の向上

学習意識調査の電流学習と日常生活との関連に関する項目で、肯定的な意見が増加し、電流学習の意義や有用性が理解されたと考えられる。



Ⅳ 研究のまとめ

1 研究の成果

- 電流モデルの導入は、学習意欲や科学的な思考力を向上させ、正確な電流の考え方である「一方向電流保存型」を確立させることができた。
- 規則性(法則)の検証・一般化は、日常生活と関連意識を高め、電流学習の意義や有用性を意識させ、基本概念の理解を深めることができた。

2 今後の課題

校種間の関連を考え、中学校理科の学習計画全体の流れを再検討し、理科の概念を体系化できるような学習計画の再編成を図っていきたい。

小学校算数科において、児童が意味理解を図り、 学習内容を自分の知識として獲得する授業の在り方

長期研究員 薄葉 征子

I 研究の趣旨

I 研究の趣旨

平成13年度教育課程実施状況調査の結果によると、児童の学習の状況はおおむね良好であると公表されている。しかしながら、領域や観点によっては指導の改善も指摘されている。その中で、「数と計算」領域においては、特に計算の意味理解や計算のしかたの思考・判断に関わる指導の改善があげられている。そこで、今求められている指導の改善点を踏まえて、算数の概念形成（意味理解）に重点をおいた授業や学習内容を自ら意味づけし、知識を獲得することができる授業の在り方についての研究を進めるため、本主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

「小数のかけ算・わり算(2)」の単元（第5学年）において、かけ算やわり算の意味の拡張のしかたや学習過程を工夫すれば、その計算の意味を理解し、場面に応じてそれらを用いることができるようになり、計算の意味やしかたを自分の知識として獲得することができるであろう。

2 研究の実際

(1) 構成的アプローチによる学習の導入

児童が学習内容の意味理解を深めて、知識を獲得する学習形態として、広島大学の中原忠男氏が提唱した「算数・数学教育における構成的アプローチ」に着目した。この考えは、「知識は伝えられるものではなく、学習者によってつくられる」という考えに基づいている。その中の様々な方法的な工夫の中から、次の3点に着目し、研究単元の学習計画に取り入れることにした。

① 学習過程のモデル

問題解決のための操作的活動や念頭操作活動（操

作化)から、一般化を行い算数的知識を構成する段階（反省化）を媒介することをねらいとして、新たな知識の獲得のために「媒介化」の過程を取り入れる。

② 構成的相互作用

「媒介化」や「反省化」の段階において、子どもが持っている知識から出発し、その知識を学級全体で討議、批判し、相互に影響し合い、新しい算数的知識を子ども自身がつくりあげられるようにする。

③ 反省的思考

「媒介化」、「反省化」、「協定化」の段階で、子ども達が数学的な概念を抽象化したり、解決方法一般化して算数的知識を構成していくために反省的思考を促す。

(2) かけ算・わり算の意味の拡張のしかた

小数の乗法・除法の問題場面の数量関係をとらえ、計算の意味や計算の仕方が理解できるように数直線を活用し、意味の拡張と統合を行う。

(3) 授業の実際

① 単元名 第5学年「小数のかけ算・わり算(2)」

総時数20時間（検証授業1.2.9.10時目）

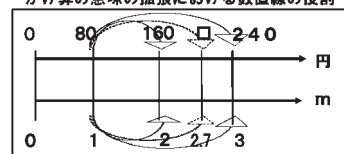
② 検証授業の考察

ア 意味の拡張のしかた

数直線を活用して問題場面の数量関係を捉えさせたことで、整数で成り立つ関係が小数においても成り立つことが視覚的

構成的アプローチによる算数の学習	問題解決的な学習
反構 意識化：問題を意識し、解決に向けて見通しを立てる	問題把握
省成的 媒介化：操作化と反省化の間を埋める	自力解決
相互 反省化：操作化や媒介化における活動を振り返る	話し合い
作用 協定化：反省化において構成された算数的知識を整理・検討・確認し、協定する	まとめ・話し合い

かけ算の意味の拡張における数直線の役割

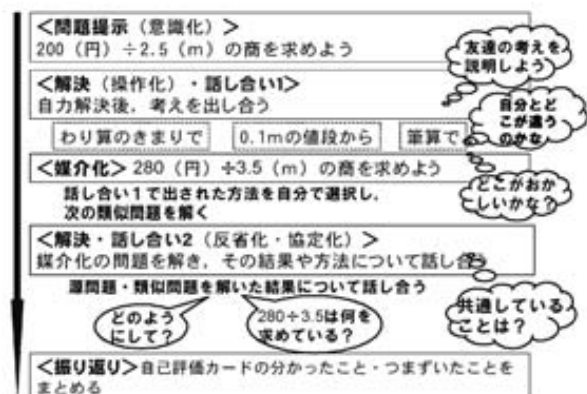


2つの量は伴って変わることから、 80×2.7 と立式できる。

にも理解することができた。事後アンケート結果で

は、数直線を用いたことで「分かりやすかった」「立式のときに役立った」という回答が多くあった。かけ算・わり算の意味の拡張や統合に数直線の活用は効果があると考えられる。

イ 学習過程の工夫（例：10/20時目）



○ 「媒介化」の設定について

「媒介化」では、導入問題（以後源問題）の解決や学習内容の理解を助けるために、源問題の類似問題を提示し、解決させた。その際に、自力解決後に出された方法の中から類似問題解決のための方法を「自分とは別な方法で」「どの方法がいいか」などの視点から選択させた。この「媒介化」を取り入れたことにより、自分と友達の考えとを比較してそのよさに気づいたり、自分の考えを補ったりすることができるようになった。そして、数直線の活用による効果とも相まって、本時の学習内容を理解しやすくなることのできた。

○ 「構成的相互作用」について

「反省化」「協定化」の段階において「友達の考えを説明しよう」「共通していることは?」「友達の考えで足りないものは?」など児童相互が影響し合えるような発問をした。このことにより、自分と友達の考えとを整理・統合しながら、小数の乗法・除法の意味や計算のしかたを理解することができた。また、以前よりもできるだけ自分の言葉で説明したり、友達の意見を補ったりする姿が見られるようになった。

○ 「反省的思考」について

思考過程を振り返られるように、「これまでとどこが違うの」「これまで習ったどんな考えを使ったの?」「どのようにして?」「式は何を求めているの?」「自分の考えで足りなかったことは?」などの発問

を努めて行った。このことにより、自分の考えや計算の意味やしきたを振り返りながら学習を進めることができるようになった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 意味の拡張のしかたについて

数直線を活用することにより、2量の数量関係が把握しやすくなり、立式の根拠や小数のかけ算・わり算の意味、その拡張についての理解が容易になることが分かった。

(2) 学習過程の工夫について

「媒介化」では、類似問題を解決したことで、友達の考えや学習内容の理解につながったと考えられる。また、各段階において児童に「構成的相互作用」「反省的思考」を意識化させたことで、友達と自分の考えとを整理しながら学習内容を理解することができ、自分の学習について見つめることができた。「構成的アプローチによる算数の学習」の手法を取り入れたことは、これまでの問題解決的な学習を補う効果が見られ、計算の意味や獲得した知識の意味理解に有効であると考えられる。

2 研究の課題

今後は、構成的アプローチによる算数の学習過程の「媒介化」の役割に注目して、学習内容の意味の理解を深めるための効果的な指導の工夫を探っていきたい。

また、自分の知識を自ら構成していく過程を大切にしていくために、「構成的相互作用」「反省的思考」の有効性を生かして、他の単元はもとより、他教科においても取り入れることにより、学習内容の意味理解を深めていきたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 算数・数学教育における構成的アプローチの研究
中原忠男著 (聖文社 1995年)
- 2) 構成的アプローチによる算数の新しい授業づくり
中原忠男編 (東洋館出版社 1999年)
- 3) 数学的な考え方を育てる「乗法・除法」の指導
片桐重男著 (明治図書 1995年)

総合的な学習の時間における効果的な指導の在り方

＝評価観点と育成したい力をもとにした評価計画と支援計画の在り方＝

長期研究員 鈴木 努

I 研究の趣旨

総合的な学習の時間が平成14年度から各学校において創意工夫されながら取り組まれている。その中で様々な成果があげられているが、反面、この学習を通して育成する児童像が系統的にとらえにくく、具体的な指導の方法や評価する基準・手段における戸惑いがあり、総合的な学習の時間を負担と感じる教師も多い。

そこで、本研究では「生きる力」の育成のために、総合的な学習の時間で「育てたい力」の再確認をするとともに、評価計画や支援計画の工夫をした授業実践を通して、総合的な学習の時間における効果的な指導の在り方について研究を行うこととした。

II 研究の概要

(協力校：河東町立河東第一小学校)

1 研究仮説

(1) 研究仮説

総合的な学習の時間において、教師が達成基準をもとに児童の学習状況を適切に把握し支援していけば、児童によりよく問題を解決する資質や能力を育むことができるであろう。

(2) 仮説にせまる手だて

- ① 指導・評価・支援計画の作成
- ② 「育てたい力」の育成のための授業実践

2 授業実践

第4学年 単元名「世界のダンスを知ろう」

3 研究の実際

(1) 指導・評価・支援計画の作成

① 指導目標・評価観点の確認

総合的な学習の時間の評価も各教科と同じように観点別評価が基本となる。そこで、本研究では総合的な学習の時間のねらい(1)より「問題を解決する力」、ねらい(2)より「学び方・考え方」「主体的・創造的

な態度」「自己の生き方」の計4観点を設定した。

② 「育てたい力」と達成基準の作成

それぞれの評価観点における「育てたい力」をしぼりこみ、本研究では以下の10項目を「育てたい力」として設定した。

問題を解決する力	<ul style="list-style-type: none">○ 題材をもとに自分の課題を見つける力○ 課題を解決するための覚悟をもつ力○ 調べた結果を振り返りまとめる力○ まとめた結果を分かりやすく発信する力
学び方・考え方	<ul style="list-style-type: none">○ いろいろな方法で課題を追究する力○ グループで考えや意見を尊重したり話し合ったりする力
主体的・創造的な態度	<ul style="list-style-type: none">○ 自分の資質ややり方を大事にして活動する力○ 工夫して取り組んだりめく力
自己の生き方	<ul style="list-style-type: none">○ 自分の考えをもつ力○ 自他へのよき影響、自分に自信をもち、生き方を考える力

授業において児童の学習状況を適切に見取り支援を行うためには、それぞれの「育てたい力」ごとに達成基準が必要となる。本研究では、広島市教育センターでの実践を参考にするとともに、次のような考え方のもと達成基準を作成した。

A 基準	自分の力で活動したりグループの中心となって活動したりする姿
B 基準	友達と協力し合って活動する姿
C 基準	教師の支援を受けたり友達の考えに返信したりする姿

③ 指導・評価・支援計画の作成

ア 「世界のダンスを知ろう」単元指導の概要

1 課題探し (7時間)	ダンスを体験し、自分の課題を見つける。	
2 探究活動 (6時間)	課題ごとにグループを編成し、様々な手段で課題追究する。	
3 プレゼンテーション (5時間)	同学年の友達に分かりやすくまとめ、発表する。	
4 再探究 (4時間)	グループで調べてまとめたものを、自分の方でもう一度まとめなおす。	
5 成長エントリー (1時間)	良くなったところを見つける。	

子どもたちが意欲的に取り組むことのできる図画工作科の授業はどうあればよいか

—図画工作科における効果的な情報機器の活用—

長期研究員 富田 弘

I 研究の趣旨

情報化対応教育により、指導要領総則の指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項の中では、「各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、適切に活用する学習活動を充実するとともに、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」と明記されており、各学校においていろいろな面で活用する取り組みが行われている。しかしその取り組みを見ると、図画工作科においてはあまり活用されていない現状が見えてくる。

そこで児童が意欲的に図画工作科に取り組むためにはどのような情報機器を活用した授業があるのかを明らかにしたいと考え、研究に取り組んだ。

II 研究の概要

1 研究仮説

図画工作科において、情報機器を効果的に活用すれば、児童が意欲的に取り組み、様々な表し方や見方にふれ、創造的に表現することができるであろう。

- (1) 各学校内の図画工作科データベース作成
- (2) 情報機器を活用した授業事例研究

2 仮説を具現化するための手だて

- (1) パソコンによる参考作品鑑賞(データベース作成)

① 内容

パソコンを使って校内に図画工作科用のデータベースを作り、そのデータ化された参考作品を鑑賞する。

② 目的

- 児童の発想の広がりや豊かな表現
- 児童の意欲的な鑑賞
- 校内データベースの活用

③ 特徴

- ・ 多くの作品にふれることができる。
- ・ 発想段階でも個人ごとに繰り返し見直すことができる。
- ・ 直感的に使用でき、小学生でもすぐに使用できる。
- ・ 参考作品の保存・管理が容易である。
- ・ 作品の分類・整理が容易である。
- ・ 参考作品や児童の作品をデータベース化しておけば提示が容易になる。
- ・ インターネットでの作品公開が容易になり、他校との鑑賞交流にも利用することができる。

④ 準備の仕方

ア 「蔵衛門10デジブックPLUS」※をダウンロードする。※(URL:<http://www.kuraemon.com/products/digibookplus/>)

イ パソコンに「蔵衛門10デジブックPLUS」をインストールする。(必要台数分)

ウ 作品データを入れる。その際に学年ごとや題材別ごとなどに分類しておくようにする。

(2) デジタルタイムカプセル

① 内容

パソコンを使い、デジタルカメラで撮影した児童の作品を編集し、学校のweb上に公開する。

② 目的

- ア 児童の意欲喚起を行う。
- イ 児童に未来を見つめる目(意識・姿勢)を持たせる。

ウ 校内データベースの活用

③ 特徴

- ア 設定した期限が来ないと閲覧できない。(JavaScriptを使用する。)
- イ 作品や写真等の経年変化がない。
- ウ 全国どこからでもアクセスが可能。

以上2つの手だてを用いることにより意欲的な鑑賞が可能となり、自分の知らない表現方法や表現技法にふれることで発想が広がり、表し方を試行錯誤

しながら制作することにより、創造的に表現することが可能になるのではないかと考えた。

3 研究方法・内容

- (1) コンピュータを利用した鑑賞授業の展開
- (2) 参考作品鑑賞による幅広い発想・表現のための工夫
- (3) 情報機器を利用した題材の工夫

4 研究の実際

(1) 検証授業計画

題材名 「未来へ伝える私の思い」(絵に表す)

対象学年 第6学年

(2) 授業実践

① パソコンによる参考作品鑑賞

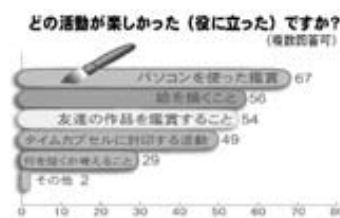
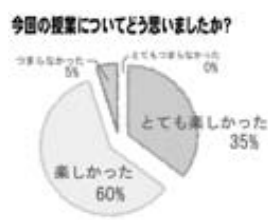
導入の段階では、自分が未来に伝えたいものや思いにはどのようなものがあるのかを考えさせるようにし、今回の題材である「未来へ伝える私の思い」の絵を描くことを提示した。そして発想の広がりを持たせるために、パソコンによる参考作品鑑賞を行った。鑑賞する作品は、他校の昔の6年生児童がタイムカプセルに入れた作品という設定にした(実際には卒業生の作品)。こうすることにより興味を持って鑑賞できるようにし、自分と同じ6年生がどのような考えを未来に伝えたかったのかを見るという「鑑賞の視点」を持たせるようにした。

② デジタルタイムカプセル

終末の段階では出来上がった作品を未来に伝えるためにデジタルタイムカプセルに封印した。ここではカプセルに入れる作品などの紹介を行い、最後にみんなでかけ声をかけて封印した。将来、カプセルを見る時の注意点の説明も行った。

(3) 考察

事後の調査の結果、今回の授業を通してほとんどの児童が意欲的に取り組めたことが分かった。1番多かった理由は「自分の思った通りの作品を作ることができたから」というものであり、自分の気に入った作品を仕上げることができ



た達成感を味わうことができたと考えられる。

また今回の制作では、パソコンを

使った鑑賞が役に立ったと感じている児童が多いことが分かった。参考作品を提示せずに制作するよりも、提示してから制作に入る方が、発想が広がるために制作もしやすく、つまずかずに取り組むことができると言える。友達の作品を鑑賞することも、自分の作品を制作する上で「楽しかった(役に立った)」と答えており、鑑賞の有効性が伺えた。ただ単に「未来についての絵を描いてみよう」とするのではなく、「デジタルタイムカプセル」のような要素を授業に取り入れることにより意欲的に取り組むことができた。また将来についても具体性が増して、自分の未来への思いを絵に表しやすかったようである。

III 研究のまとめ

1 成果

- 発想ができずに制作活動が停滞してしまうために図画工作科の授業に意欲が持てない児童が、スムーズに制作することができたことから分かるように、データベースを活用した参考作品鑑賞は有効であることが分かった。
- 作品を鑑賞するという行為は実物を見ることが理想だが、実際はなかなか実現できない。その解決策であるコンピュータを使用した鑑賞でも、児童は違和感なく取り組むことができ、主体的にどんどん鑑賞できることが分かった。意欲的に鑑賞することにより、作品の良いところを見つけたり自分の考えを持つことができるため、その後の作品制作にもそれらをいかすことができることが分かった。

2 課題

今後はインターネットの活用の仕方が課題であると考え。お互いの学校で交流学習を行ったり、図画工作科のためのインターネットの環境の整備など、さらなる鑑賞教育の充実、新しい題材の開発を図っていく必要があると考える。

教育相談的手法を用い自己理解の深化と社会性の向上を目指す、 学級活動を通しての支援の在り方

長期研究員 猪 狩 孝

I 研究の趣旨

都市化や少子高齢化、情報化等の社会情勢の変化が、子どもたちの成長にも大きな影響を与えている。そうした状況下で一部の児童生徒に限らず、全ての子どもを対象にした、対人関係づくりや自己実現の支援など、予防開発的視点に基づく教育活動が求められている。

本研究では、自己存在感を与えるために自己理解の深化、共感的人間関係を育てるために社会性の向上に焦点を当て、予防開発的視点に基づき全ての子どもを対象にした支援の在り方を探る。

具体的には、学級活動の時間において教育相談的手法を用いた、自己理解の深化と社会性の向上を目指す授業の提案及びその有効性の検証を行う。

II 研究の概要

1 研究計画

(1) 研究方針

自己理解の深化と社会性の向上を目指す具体的な授業の提案及びその有効性の検証を行う。

(2) 研究期間及び研究対象

- 期 間：2学期（9月～12月）計6回
- 対 象：中学校2年生，1学級36名

(3) 研究体制

研究対象学級担任との共同体制で研究を進める。授業は学級担任を主とするTT方式で行う。

(4) 研究内容

発達段階を考慮した自己理解と社会性の捉え方、及び自己理解の深化と社会性の向上に焦点を当てた授業実践方法を研究する。

(5) 研究方法

教育相談的手法として、構成的グループエンカウンター等を用い、学級活動の授業を通して自己理解の深化と社会性の向上を図る。検証には自己肯定度インベントリーとソーシャルスキル尺度を用いる。

2 研究の実際

(1) 自己理解と社会性の捉え方

自己理解を他者とのかかわりの中で肯定的な自己像を探っていくこと、社会性を人とかかわる心情と技能と捉える。

(2) 手法

○ 構成的グループエンカウンター

集団生活を通して不安や緊張を和らげ、あたたかな裏腹のない人間関係を体験する方法。

○ ソーシャルスキルトレーニング

良好な人間関係をつくり保つための知識と、具体的な技術やコツを体験を通して身に付ける方法。

○ アサーショントレーニング

自分も相手も大切にしたい自己表現の仕方を、体験を通して身に付ける方法。

(3) 授業

① 研究協力員からの聞き取り（願い・課題）

ア 特定の友人だけでなく、より開かれた人間関係をつくりたい。

イ 自己主張のスキルを身につけさせたい。

ウ 今回の取り組みを進路指導にも生かしたい。

② 授業実践（a・概要，b・生徒の反応）

授業1「仲間を知る」

a. 互いの違いを認めあえる雰囲気作りと自己主張のスキル向上をねらい実施した。「人の話を否定せず良く聴く」ルールの徹底ができるよう配慮した。

b. 「一人一人の言うことは納得できた。」

「付き合いがなくても好みや感じ方が似ていた。」

授業2「自己理解を深める(1)」

a. 内面を見つめ自己理解を深めることをねらい実施した。進路指導の契機としても活用できる。自分の肯定的な部分に着目させるよう配慮した。

b. 「新たな発見があった。もっと自分を知りたい。」

「自分について知ることは怖かったけど、やってみたら面白かった。」

授業3「合唱祭に向けて」

- a. 学校行事の指導に教育相談的手法を生かし、学級の団結力や生徒相互の信頼感の向上をねらった。
- b. 「協力はとても大事だなあと思った。」
「気持ちが伝わるような合唱をしたい。」

授業4「相手も自分も大切に話し方(依頼)」

- a. 聴く・話すスキルの向上をねらいソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニングを取り入れ授業を行った。役割演技を行うことへの抵抗に配慮した。
- b. 「頼み方次第で相手の対応の仕方が全然違った。」
「話し方で自分の気持ちも変わるのが分かった。」

授業5「自己理解を深める(2)」

- a. 友達との交流から自己像を知り自己理解を深めることや、自己肯定感の向上をねらい実施した。話し合いで互いに傷つけることが無いよう配慮した。
- b. 「僕の良い所がこんなにあるんだと驚いた。」
「相手が違くと自分に対する見方も違った。」

授業6「リレーションを深める」

- a. 教育相談的手法を、今後の授業につなげていくために、人と触れ合うことの楽しさを感じられる授業を目指した。途中から学級の課題となっていた男女の協力もねらいにした。人数を次第に増やす等、抵抗への配慮と構成を工夫した。
- b. 「普段かかわりの少ない友達とも仲良く協力して活動できたのが良かった。」
「みんなで協力できて楽しかった。」

III 研究のまとめ

1 研究の有効性についての考察

(1) 生徒の反応・感想から

授業への意欲向上、人とかかわる内容への抵抗の減少を端的に表すものとしてふりかえり用紙の「この活動は楽しかったか」の変化を表1で示す。

【表1】「ふりかえり」の変化 ※授業2は実施せず

	授業1	授業3	授業4	授業5	授業6
男子平均	2.58	2.98	2.84	3.10	3.21
女子平均	3.25	3.44	3.44	3.38	3.51
学級平均	2.94	3.23	3.15	3.24	3.37

(2) 事前事後調査結果分析より

① 自己肯定度インベントリーの結果

学級平均値は12.5から12.7へ0.2上昇した。特に「私はしばしば学校でやる気をなくしています」と

いう質問に対し、「ちがいます」と答えた人数が8人増え、生徒の自己肯定感の表れとしての「やる気」が向上してきていることが窺える。

② ソーシャルスキル尺度の結果

それぞれ、人とかかわる心情・技能を表す、配慮・かかわりの両スキルとも表2のように向上した。

(3) 研究協力員の視点から

学級担任、養護教諭 【表2】

の目から見た生徒の変容を一部ではあるが掲載する。

	事前	事後
配慮	44.9	47.7
かかわり	41.2	42.0

○ 今までかかわりがなかった生徒同士も、互いの違いを認め合い仲を深めることができた。

○ 構成的グループエンカウンターのねらい通りの小さな変容があちこちに見られるようになった。

2 成果と課題

事前事後調査の数値のみならず、生徒の感想である「頼み方次第で相手の対応の仕方が全然違った。」等から具体的な知識を獲得していることがうかがわれ、認知面の変容が見られる。更に「協力できて楽しかった」という感想からは感情面の変容、担任や養護教諭の言葉から行動面での変容が見られ、認知・感情・行動ともに望ましい方向に変化してきており、本研究の有効性が確認できた。

学級活動内容項目と授業のねらいとの関連の明確化、実態に合わせた展開例、人間関係づくりへの効果、更に実施の際の配慮点を明らかにすることで具体的授業内容の提案もできたと思われる。

本研究で導入した手法以外にも、対人関係の中で生じるストレスを個人の中で処理・緩和していく方法であるストレスマネジメント等も、生徒が人間関係を維持向上させていくためには不可欠なものに思えた。多様な手法の導入を今後の課題にしたい。

尚、今回の成果は、本研究がその一因とも考えられるが、学級担任をはじめとした周囲の日常的指導援助が基盤となっていることは言うまでもない。

(参考図書・文献)

- 1) グループ体験による学級育成プログラム 河村茂雄編著
- 2) エンカウンターで学級が変わる 國分康孝監修

(図書文化)

平成15年度 研究協力校・研究協力員一覧

研究協力校

福島市立三河台小学校	福島市立瀬上小学校	福島市立湯野小学校
福島市立福島第三小学校	本宮町立本宮小学校	本宮町立本宮まゆみ小学校
須賀川市立第一小学校	郡山市立橋小学校	郡山市立安積第一小学校
須賀川市立仁井田小学校	須賀川市立稲田小学校	白河市立五箇小学校
白河市立白河第二小学校	白河市立白河第五小学校	棚倉町立棚倉小学校
会津若松市立謹教小学校	会津若松市立永和小学校	会津若松市立湊小学校
田島町立田島小学校	田島町立檜沢小学校	田島町立荒海小学校
河東町立河東第一小学校	相馬市立大野小学校	相馬市立磯部小学校
相馬市立中村第一小学校	いわき市立小名浜第一小学校	いわき市立上遠野小学校
いわき市立平第一小学校	いわき市立平第三小学校	

福島市立福島第二中学校	福島市立清水中学校	福島市立西根中学校
福島市立岳陽中学校	福島市立北信中学校	福島市立松陵中学校
須賀川市立第一中学校	須賀川市立仁井田中学校	本宮町立本宮第一中学校
白河市立白河第二中学校	白河市立白河南部中学校	須賀川市立稲田中学校
長沼町立長沼中学校	白河市立五箇中学校	下郷町立下郷中学校
会津若松市立第三中学校	会津若松市立第六中学校	会津若松市立湊中学校
田島町立田島中学校	田島町立檜沢中学校	西会津町立西会津中学校
相馬市立中村第一中学校	相馬市立中村第二中学校	田島町立荒海中学校
いわき市立平第一中学校	いわき市立小名浜第一中学校	相馬市立磯部中学校
いわき市立上遠野中学校	小高町立小高中学校	

福島県立福島高等学校	福島県立本宮高等学校	福島県立福島商業高等学校
福島県立福島明成高等学校	福島県立福島東高等学校	福島県立安積高等学校
福島県立郡山商業高等学校	福島県立清陵情報高等学校	福島県立光南高等学校
福島県立喜多方東高等学校	福島県立会津農林高等学校	福島県立会津高等学校
福島県立原町高等学校	福島県立双葉翔陽高等学校	福島県立喜多方工業高等学校
福島県立小高工業高等学校	福島県立磐城高等学校	福島県立小高商業高等学校
福島県立勿来工業高等学校	福島県立いわき海星高等学校	福島県立湯本高等学校

研究協力員

福島市立蓬莱東小学校	校長 君島 勇吉	矢祭町立関岡小学校	校長 佐久間裕晴
川俣町立川俣小学校	校長 高橋 友憲	福島市立野田小学校	教諭 七海 康広
白沢村立白岩小学校	教諭 根本多恵子	小野町立小野新町小学校	教諭 伊藤 博義
いわき市立渡辺小学校	教頭 江上 君子	北塩原村立裏磐梯小学校	教頭 大橋 淳子
国見町立小坂小学校	教頭 佐々木義通	南郷村立南郷第二小学校	教頭 佐藤かよ子

いわき市立久之浜第一小学校 教諭 芳賀 重行
福島市立福島第四小学校 教諭 富田 元久
福島市立森合小学校 教諭 羽染 聡
国見町立大木戸小学校 教諭 吉田 聡
郡山市立芳山小学校 教諭 角田 雅仁
泉崎村立泉崎第一小学校 教諭 小野 浩司
喜多方市立第一小学校 教諭 酒井 康雄
喜多方市立第二小学校 教諭 佐藤 明

福島市立瀬上小学校 教諭 渡邊 睦恵
福島市立三河台小学校 教諭 高木 正英
福島市立松川小学校 教諭 三浦 正彦
伊達町立東小学校 教諭 青柳 俊宏
本宮町立本宮小学校 教諭 佐藤 聡
郡山市立朝日が丘小学校 教諭 長壁 秀和
喜多方市立第一小学校 教諭 小野 明彦

福島市立福島第四中学校 校長 大橋 勝彌
滝根町立滝根中学校 校長 佐久間光春
須賀川市立第三中学校 教頭 石山 晃司
会津若松市立第二中学校 教頭 佐藤 一彦
桑折町立醸芳中学校 教頭 茅原 秀雄
福島市立福島第三中学校 教諭 福島 稔
福島市立北信中学校 教諭 島田 祥司
福島市立茂庭中学校 教諭 永倉 久
岩代町立小浜中学校 教諭 三津間勝彦
小野町立浮金中学校 教諭 金子 伸之
郡山市立御館中学校 教諭 二瓶 英俊
郡山市立安積中学校 教諭 二瓶 浩治
いわき市立泉中学校 教諭 赤津 雅彦(代表)
福島市立茂庭中学校 教頭 島貫 条司
西会津町立西会津中学校 教諭 武藤 達也
鮫川村立鮫川中学校 校長 小澤 章雄

福島市立平野中学校 校長 浅野テル子
西会津町立西会津中学校 教頭 高橋 弘悦
会津本郷町立本郷中学校 校長 北舘 長一
只見町立朝日中学校 校長 佐藤 泰
檜枝岐村立檜枝岐中学校 教頭 山口 浩
会津若松市立第二中学校 教諭 藤田 信一
福島市立西信中学校 教諭 菅家 久人
桑折町立醸芳中学校 教諭 福地 淳一
岩代町立岩代中学校 教諭 千代田幸子
小野町立浮金中学校 教諭 吉田 泰作
郡山市立郡山第三中学校 教諭 大橋 克全
会津若松市立一箕中学校 教諭 小野寺光喜
福島市立清水中学校 教頭 佐藤 和彦
西会津町立西会津中学校 教諭 金道 律
相馬市立中村第一中学校 教諭 松本 一宏

福島県立西会津高等学校 教頭 菅野 貴夫
福島県立安達東高等学校 教諭 斎藤 隆一
福島県立白河実業高等学校 教諭 遠藤 進一
福島県立平商業高等学校 教諭 佐藤 珠恵
福島県立福島中央高等学校 教頭 荒井 勝彦
福島県立須賀川養護学校 教諭 斎藤 成子
福島県立郡山養護学校 教諭 丹野 勝彦
福島県立会津工業高等学校 教諭 渋谷由紀子

福島県立湯本高等学校 教諭 加藤 香洋
福島県立福島商業高等学校 教諭 松浦 冬樹
福島県立須賀川桐陽高等学校 教諭 水野 隆文
福島県立坂下高等学校 教諭 高橋 宏之
福島県立盲学校 教諭 遠藤 宣雄
福島県立須賀川養護学校医大分校 教諭 佐々木孝幸
福島県立福島東高等学校 教諭 太田 隆明

研究紀要執筆・編集者一覧

所長	星 本文								
次長	伊藤 幸雄	石橋 光一	佐藤 俊市郎						
○企画振興チーム									
主任指導主事	岩淵 賢美	指導主事	荒 昌利	指導主事	佐藤 誠一				
指導主事	高橋 卓夫	指導主事	渡辺 さやか						
○教育調査チーム									
主任指導主事	羽川 昌廣	指導主事	中目 雅彦						
○学校評価研究チーム									
主任指導主事	奥 建	指導主事	吉田 豊彦						
○カリキュラム研究チーム									
主任指導主事	遠藤 雄二郎	指導主事	島 義一						
○情報活用研究チーム									
主任指導主事	皆川 正信	指導主事	鈴木 稔						
○教科教育チーム									
主任指導主事	荒井 光廣	指導主事	刈屋 俊樹	指導主事	中根 猛				
指導主事	黒須 智則	指導主事	大和田 一成	指導主事	安齋 美智男				
指導主事	渡辺 郁哉	指導主事	桑名 俊之	指導主事	渡部 光毅				
指導主事	石川 千穂	指導主事	金成 智子	指導主事	森下 陽一郎				
長期研究員	高橋 克之								
○教科外教育チーム									
主任指導主事	平澤 芳朗	主任指導主事	本田 樹	指導主事	村上 正義				
○情報教育チーム									
主任指導主事	伊豆 幸男	指導主事	佐藤 浩正	指導主事	阿部 洋己				
指導主事	坂本 晴生	実習教諭	鹿俣 和子						
○教育相談チーム									
主任指導主事	水野 晴夫	指導主事	深谷 和子	指導主事	白玉 俊和				
指導主事	内田 恒一	長期研究員	猪俣 雄介						
○長期研究員									
長期研究員	金澤 文利	長期研究員	熊谷 幸司	長期研究員	大野 勝彦				
長期研究員	薄葉 征子	長期研究員	鈴木 努	長期研究員	富田 弘				
長期研究員	猪狩 孝								

研究紀要 第33集

2004.6 印刷発行

編集発行 福島県教育センター
〒960-0101 福島市瀬上町字五月田16
☎(024)553-3141 FAX(024)554-1588
印刷所 (株)アクト印刷
〒960-8044 福島市早稲町8-26
☎(024)523-4475 FAX(024)523-4556
